

COLLADA - Digital Asset Schema リリース 1.4.0

仕様書

2006年1月

Editor: Mark Barnes, Sony Computer Entertainment Inc.

© 2005, 2006 The Khronos Group Inc., Sony Computer Entertainment Inc.

All Rights Reserved.

This specification is protected by copyright laws and contains material proprietary to the Khronos Group, Inc. It or any components may not be reproduced, republished, distributed, transmitted, displayed, broadcast, or otherwise exploited in any manner without the express prior written permission of Khronos Group. You may use this specification for implementing the functionality therein, without altering or removing any trademark, copyright, or other notice from the specification, but the receipt or possession of this specification does not convey any rights to reproduce, disclose, or distribute its contents, or to manufacture, use, or sell anything that it may describe, in whole or in part.

Khronos Group grants express permission to any current Promoter, Contributor, or Adopter member of Khronos to copy and redistribute UNMODIFIED versions of this specification in any fashion, provided that NO CHARGE is made for the specification and the latest available update of the specification for any version of the API is used whenever possible. Such distributed specification may be reformatted AS LONG AS the contents of the specification are not changed in any way. The specification may be incorporated into a product that is sold as long as such product includes significant independent work developed by the seller. A link to the current version of this specification on the Khronos Group website should be included whenever possible with specification distributions.

Khronos Group makes no, and expressly disclaims any, representations or warranties, express or implied, regarding this specification, including, without limitation, any implied warranties of merchantability or fitness for a particular purpose or noninfringement of any intellectual property. Khronos Group makes no, and expressly disclaims any, warranties, express or implied, regarding the correctness, accuracy, completeness, timeliness, and reliability of the specification. Under no circumstances will the Khronos Group, or any of its Promoters, Contributors, or Members or their respective partners, officers, directors, employees, agents, or representatives be liable for any damages, whether direct, indirect, special, or consequential damages for lost revenues, lost profits, or otherwise, arising from or in connection with these materials.

Khronos is a trademark of The Khronos Group Inc.

COLLADA is a trademark of Sony Computer Entertainment Inc. used by permission by Khronos.

All other trademarks are the property of their respective owners and/or their licensors.

Publication date: January 2006

Khronos Group P.O. Box 1019 Clearlake Park, CA 95424, U.S.A.

Sony Computer Entertainment Inc. 2-6-21 Minami-Aoyama, Minato-ku, Tokyo 107-0062 Japan

Sony Computer Entertainment America 919 E. Hillsdale Blvd. Foster City, CA 94404, U.S.A.

Sony Computer Entertainment Europe 30 Golden Square London W1F 9LD, U.K.

目次

本ド	キュメントについて	vii
	対象読者	
	本ドキュメントの構成	
	その他の情報源	
1章	表記法 設計上の考慮事項	
ᅵ부		
	概要	
	前提条件と依存関係	
	目標とガイドライン	
o 	開発方法論	
2章	スキーマの概要	
	概要	
	コンセプト	
	アドレス構文	
3章	スキーマのリファレンス	
	はじめに	
	accessor	
	ambient	
	animation	
	animation_clip	
	asset	3-11
	bool_array	3-13
	camera	3-14
	channel	3-16
	COLLADA	3-17
	contributor	3-19
	controller	3-20
	directional	3-21
	extra	3-22
	float_array	3-24
	geometry	3-25
	IDREF_array	3-27
	image	3-28
	imager	
	input	
	instance_animation	
	instance_camera	
	instance_controller	
	instance_geometry	
	instance_light	
	instance_node	
	instance_visual_scene	
	int_array	
	joints	
	library_animations	J-51

iv 目次

3-52
3-53
3-54
3-55
3-56
3-57
3-58
3-59
3-60
3-61
3-62
3-63
3-64
3-65
3-67
3-69
3-71
3-73
3-75
3-76
3-78
3-80
3-81
3-83
3-84
3-85
3-86
3-87
3-88
3-91
3-93
3-94
3-96
3-97
3-98
-100
-100
-104
-106
-108
-109
-110
-111
-111
-114
-114
–118

	vertices	3-120
	visual_scene	3-121
4章	共通プロファイル	4-1
	概要	
	命名規則	
	共通プロファイル	
	インタフェースとしてのパラメータ	4-4
	共通用語集	4-4
5章	ツールの要件とオプション	5-1
	概要	5-3
	エクスポータ	5-4
	インポータ	
6章	COLLADA フィジックス	6-1
	物理的な単位について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6-3
	慣性について	6-3
	新しいジオメトリの種類	6-4
	box	6-6
	capsule	
	convex_mesh	
	cylinder	6-9
	force_field	6-10
	instance_physics_model	6-11
	instance_rigid_body	
	physics_material	
	physics_model	
	physics_scene	
	plane	
	rigid_body	
	rigid_constraint	
	shape	
	sphere	
	tapered_capsule	
	tapered_cylinder	
7章	COLLADA FX	
	レンダリング状態	
	alpha	
	annotate	
	array	
	argument	
	bind	
	bind_material	
	blinn	
	code	
	color_clear	
	color_target	
	common_color_or_texture_type	
	common_float_or_param_type	7–24

	compiler_options	
	compiler_target	7-26
	connect_param	7-27
	constant	7-28
	depth_clear	7-30
	depth_target	7-31
	draw	7-32
	effect	7-33
	generator	7-34
	include	7-35
	instance_effect	7-36
	instance_material	7-37
	lambert	7-38
	modifier	7-40
	name	7-41
	newparam	7-42
	param	7-43
	pass	7-44
	phong	7-46
	profile_CG	7-48
	profile_COMMON	7-50
	profile_GLES	
	profile_GLSL	7-53
	RGB	7-54
	sampler1D	7-55
	sampler2D	7-56
	sampler3D	
	samplerCUBE	7-58
	samplerRECT	
	sampler_state	7-60
	semantic	7-61
	setparam	7-62
	shader	7-63
	stencil_clear	
	stencil_target	
	surface	
	techniquetechnique	7-68
	technique hint	
	texcombiner	7-71
	texenv	7-72
	texture_pipeline	7-73
	texture_unit	
	usertype	
	VALUE_TYPES	
Appen	dix A キューブの例	
• •	例:キューブ	
用語集		

本ドキュメントについて

本ドキュメントでは、COLLADA スキーマについて解説します。COLLADA は COLLAborative Design Activity の略で、複数のソフトウェアパッケージを組み合わせて非常に強力なツールチェーンとして使えるようにするため、情報を損なうことなく 3D オーサリングアプリケーション間で自由にデジタルアセットの交換を可能にする XML ベースのスキーマを定義しています。

本ドキュメントの趣旨は、ソフトウェアプログラマの方が COLLADA リソースの処理ツールを作成できることを目的に、COLLADA スキーマの詳しい仕様について解説することです。この仕様は、特にビデオゲームや映画業界などで利用されている DCC(デジタルコンテンツ作成)アプリケーション、3D 対話型アプリケーションやツールチェーン、プロトタイプ化ツール、リアルタイム視覚化アプリケーションなどとのインポートやエクスポートを行うために重要です。

本ドキュメントでは、COLLADA スキーマの初期設計と仕様、さらに COLLADA エクスポータに最低限必要な条件について扱います。また簡単な例として、COLLADA のインスタンス文書を付録 A に記載してあります。

COLLADA スキーマを利用した文書には、「.dae」(Digital Asset Exchange の頭字語)というファイル拡張子が割り当てられています。この拡張子は、インターネットで検索したところ、これまで利用された例はありません。

対象読者

本ドキュメントは、パブリックに公開されているものです。COLLADA スキーマを利用したアプリケーションや、そういったアプリケーションのプラグインを作成したいプログラマの方を対象としています。

本ドキュメントでは、以下の知識を持っている方を対象としています。

- XML と XML スキーマの知識
- NVIDIA® Cg や Pixar RenderMan®といったシェーディング言語の知識
- コンピュータグラフィックスと、OpenGL®のようなグラフィックス API に関する一般的な知識と 理解

本ドキュメントの構成

本ドキュメントは、以下の章から構成されています。

章/節	説明
第1章:設計上の考慮事項	COLLADA の設計に関する課題の説明
第2章:スキーマの概要	スキーマと、その設計についての概要
第3章:スキーマのリファレンス	スキーマについての詳しいリファレンス
第4章: 共通プロファイル	COLLADA の共通プロファイルの説明
第5章:ツールの要件とオプション	ツール作成者に向けた、COLLADA ツールに必要な条件の説明
第6章: COLLADA フィジックス	COLLADA フィジックスの要素についての詳しいリファレンス
第7章: COLLADA FX	COLLADA FX の要素についての詳しいリファレンス
付録 A:キューブの例	COLLADA 文書の例
用語集	本ドキュメントで利用されている用語の定義
索引	

その他の情報源

本ドキュメントの参考資料としては、以下のリソースがあります。

- Extensible Markup Language (XML) 1.0, 2nd Edition
- XML Schema
- XML Base
- XML Path Language
- XML Pointer Language Framework
- Extensible 3D (X3DM) encodings ISO/IEC FCD 19776-1:200x
- Softimage® dotXSI™ FTK
- NVIDIA® Cg Toolkit
- Pixar's RenderMan®

また、COLLADA の詳細に関しては www. khronos. org/collada を参照してください。

表記法

本ドキュメントでは、解説文の意味を明確にするために、全体を通して以下のような表記法が使われて います。

記法	説明
明朝体	説明文を示します。
Courier New	クラス名、メソッド名、変数名への参照を示します。
Courier New bold	ファイル名を示します。
> Courier New bold	右角括弧(>)を先頭に付けて、コマンドを示します。
青色	ハイパーリンクを示します。

1章 設計上の考慮事項

このページは空白です。

概要

COLLADA デジタルアセットスキーマの開発には、協力して設計活動にあたる多くの会社の設計者やソフトウェア・エンジニアが関係しています。この章では、設計者が作成したより重要な設計目標と概念、さらに想定について再検討しておきましょう。

前提条件と依存関係

COLLADA アセットスキーマの設計の最初の段階で、参加者はさまざまな議論を行い、以下のような取り決めについて同意しました。

- COLLADA はゲームはエンジンのフォーマットではなく、オーサリングツールのユーザと対話型アプリケーションコンテンツ作成用のパイプラインに有益なものと想定しています。また、対話型アプリケーションの多くで、COLLADA は、最終的な配信メカニズムではなく、むしろ製作パイプラインで利用されることを想定しています。たとえば、多くのゲームでは、サイズを最適化した専用のバイナリファイルが利用されています。
- エンドユーザは、頂点プログラムやピクセルプログラム(シェーダ)のような高度なレンダリングテクニックが含まれているけれども、比較的簡単なコンテンツやテストモデルを短期間で作成してテストできることを望んでいます。
- エンドユーザの制作環境では、Microsoft Windows®および Linux®オペレーティングシステムが利用すると想定しています。エンドユーザがディベロッパの場合には、ほとんどが C/C++言語でプログラミングを行うことを想定します。したがって、COLLADA のソースコードサンプルは、主にこれらの言語を利用して作成されています。

目標とガイドライン

COLLADA デジタルアセットスキーマの設計目標は、以下のようなものです。

- デジタルアセットを、専用のバイナリフォーマットから解放して、仕様の明確な XML ベースのオープンソース・フォーマットに移行すること。
- 既存のコンテンツ・ツールチェーンで COLLADA アセットが直接利用でき、ツールチェーンの統合 を促進するような標準化された共通フォーマットを提供すること。
- なるべく多くのデジタルコンテンツユーザによって採用されること。
- あらゆるデータが COLLADA を介して利用できるような簡単な統合メカニズムを提供すること。
- 3D アプリケーション同士でのデータ交換のための共通基盤となること。
- デジタルアセットスキーマ設計において、ディベロッパや DCC、ハードウェア、ミドルウェアベンダの間の共同作業の促進剤となること。

以降のセクションでは、COLLADA の目標について解説し、またその結果と根拠について述べておきます。

デジタルアセットの専用バイナリフォーマットからの解放

目標:専用のバイナリフォーマットから、正しく仕様化された XML ベースのオープンソースのフォーマ ットへとデジタルアセットを解放すること。

今日、ほとんどの 3D アプリケーションでは、デジタルアセットが大部分を占めています。

ディベロッパは、大量のデジタルアセットを、不明瞭な専用のフォーマットで蓄積しています。このよ うな専用ツールからデータをエクスポートするには、複雑な専用のソフトウェア開発キットを開発しな くてはならず、かなりの投資が必要です。また、このような投資を行った後でも、そのツールの外でデ ータを変更してから、再度インポートするというようなことは、依然として不可能です。データが陳腐 化することを覚悟の上で、進化し続けるツールとともに、エクスポータをも更新し続ける必要がありま す。

また、ハードウェア・ベンダは、新たなハードウェアを利用するためには、ますます複雑なアセットを 必要とするようになってきています。必要なデータはツールの中に存在するかもしれませんが、そのデ ータをツールからエクスポートする方法がないことも少なくありません。つまり、このようなデータの エクスポートは、ディベロッパが高度な機能を利用する上でも、ハードウェア・ベンダが新製品を普及 させる上でも障害となるような、複雑な処理だということです。

ミドルウェアやツールのベンダは、ミドルウェアやツールをあらゆるツールチェーンに組み込んで、デ ィベロッパが利用できるようにする必要がありますが、これはほとんど無理な使命です。ミドルウェ ア・ベンダが成功するためには、拡張性のある独自のツールチェーンおよびフレームワークを提供して、 それをディベロッパに採用させる必要があります。このため、ゲームディベロッパは、同一のプロジェ クトで複数の DCC ツールを使うことが困難であるのと同じように、同一のプロジェクトで複数のミドル ウェア・ツールを使うことは不可能になります。

このような目標を達成するためになされた決定には、以下のようなものがあります。

• COLLADA では XML を使う。

XML は、明確に定義されたフレームワークを提供します。文字セット (ASCII、Unicode、シフト JIS) のような問題は、すでに XML 規格がカバーしているので、XML を利用するあらゆるスキーマ は、そのまま国際的に利用できるようになります。また、XML は、インスタンス文書の例さえあ れば、資料がなくても容易に理解することができますが、このようなことは、他のフォーマット では稀です。XML パーサは、プラットフォームを問わず、ほとんどあらゆる言語用のものがある ので、XML ファイルは、ほとんどあらゆるアプリケーションから簡単にアクセスすることができ ます。

• COLLADA では、XML 中でバイナリデータを使わない。

ロードの容易さ、高速化、およびアセット・サイズの最適化などのために、頂点やアニメーショ ンのデータを、何らかの2進表現で保存すべきではないかという論点については、何度も議論が 交わされました。けれども、多くの言語では、XML ファイル内部のバイナリデータを簡単にサポ ートすることもできなければ、バイナリデータ一般の操作もサポートしていないので、残念なが ら、バイナリデータを使うことは、大多数のチームに便利であるべきという目標に反しています。 COLLADA を完全にテキストベースのフォーマットにしておけば、大多数の選択肢をサポートする ことができます。COLLADA には、バイナリデータを外部に保存して、それを COLLADA アセットか ら参照できるメカニズムが用意されています。

• COLLADA 共通プロファイルに多くの共通データが含まれるように、常に拡張を続ける。 現在、COLLADA では、ポリゴンベースのモデルを共通フォーマットでサポートしています。けれ ども COLLADA では新たな課題が持ち上がるのに際して、シェーダー効果、物理的特性、パラメト リック曲面など、他の領域もカバーしていくようにしています。

標準化された共通フォーマットの提供

目標:既存のコンテンツ・ツールチェーンで直接 COLLADA アセットを利用できるようにし、ツールチェーンの統合を容易にする標準化された共通フォーマットを提供すること。

共通プロファイルは、この目的を実現するために設定されたものです。共通プロファイルの目標は、ツールが COLLADA アセットを読み込むことができて、共通プロファイルによって示されるデータを使うことができ、任意の DCC ツールをコンテンツ作成に利用できるようにする、ということです。

COLLADA アセットのツールチェーンへの統合を容易にするためには、スキーマや仕様ばかりではなく、COLLADA アセットを既存のツールチェーンに統合するのに役立つようにきちんと設計された API (COLLADA API) を提供する必要がある、という結論に達しました。この新しい開発の方向性は、ディベロッパの労力を省くばかりでなく、新たにさまざまな可能性を開きうるものです。COLLADA API のデザインは、既存のコンテンツ・ツールチェーンで使われている固有のデータ構造との統合が容易にできるものである必要があります。

COLLADA では、ツールチェーンに組み込んで、プロ用のコンテンツ・パイプラインを構築することができるような、さまざまなツールの開発が行えます。COLLADA は、メンテナンスの難しい一体化したツールチェーンよりも、むしろ、特定の用途に特化したさまざまなツールの設計を容易にします。内部もしくは外部で開発されたツールの再利用を容易にすることは、ディベロッパおよびツールやミドルウェアのメーカーに経済的かつ技術的な利点をもたらすので、デジタルアセット交換フォーマットの標準としての COLLADA の地位を強化します。

できるだけ多くのデジタルコンテンツ・ユーザによって採用されること

目標:できるだけ多くのデジタルコンテンツ・ユーザによって採用されること。

COLLADA が採用されるためには、ディベロッパに役に立つものである必要があります。COLLADA が自分たちの問題に役立つかを評価するディベロッパのために、私たちは正確な情報を提供して、彼らがCOLLADA ツールの品質を評価できるようにする必要があります。

- ツールの品質や適合度を評価するための、適合性試験スイートを提供する。
- 多くのディベロッパの役に立つために、ツール供給者がしたがうべき必要条件の一覧を、仕様の中で提供する(これらの目標は「ツールの要件とオプション」で指定します)。
- ユーザから意見を集めて、必要条件や規格適合性試験スイートに反映させる。
- バグレポートの問題を管理し、実装上の疑問点を公開する。このためには、バグに優先順位をつけて、COLLADAパートナーの間で修正のスケジューリングを行う必要があります。
- アセット交換やアセットマネージメントに対するソリューションを促進する。
- COLLADA のエクスポータやインポータなどのツールを DCC ツールやミドルウェアのベンダに直接 サポートさせる。ゲームディベロッパにとっては、パイプラインであらゆるパッケージを利用で きるという利点をもたらします。ツール・ベンダにとっては、より多くのユーザを獲得とする機 会を得るという利点をもたらします。
- 自動ビルド処理の中に、DCC ツールのエクスポータやインポータのタスクを組み込めるような、コマンドライン・インタフェースを提供する。

簡単な統合メカニズムの提供

目標: あらゆるデータが COLLADA を介して利用できるような、簡単な統合メカニズムを提供すること。

COLLADA には、ディベロッパ固有のニーズに対応できるだけの十分な拡張性が備わっているので、これは、以下のような目標を導くことになります。

- XML Schema 機能、および簡易コード生成を全面的に利用することにより、拡張処理が容易になるように、COLLADA API と今後の COLLADA 全体を設計する。
- 拡張が簡単にできるエクスポータやインポータを作成することを、DCCベンダに奨励する。

- ディベロッパがまだ共通プロファイルに用意されていない機能を必要とする場合には、ベンダが、 そのエクスポータやインポータにベンダ独自の拡張としてそれらの機能を追加することを奨励す
- これに相当するのは、たとえばアンドゥ・スタックのようなツール固有の情報であるとか、ある いは複雑なシェーダのように、すぐにでも必要であるにもかかわらず、COLLADA への導入をまだ 検討中であるようなコンセプトなどです。
- このような情報を収集して、次バージョンの COLLADA で共通プロファイル中の問題を解決する。

COLLADA アセット・マネジメントを使いやすくする。

- たとえば、DCC ツールで選択したデータの一部を、特定のアセットとしてエクスポートできるよ
- アセット識別を可能にし、正しいメタデータを使用するようにする。
- そのアセット・メタデータの使用を、エクスポータおよびインポータに対して強制する。

共通データ交換の基盤としての役割

目標:3Dパッケージ間の共通データ交換の基盤となること。

この目標の最も重要な帰結は、COLLADA 共通プロファイルは常に拡張し続ける必要があるということで す。本書執筆時点では、COLLADA 共通プロファイルは、ポリゴン・ベースのモデル、マテリアルとシェ ーダ、複数のアニメーション、および DAG ベースのシーングラフをカバーしています。将来は、NURBS や細分割曲面などのより複雑なデータ形式を、ツール間の情報交換が可能になるような共通の方法でカ バーすることを予定しています。

デジタルアセットスキーマ設計の促進

目標:デジタルアセットスキーマ設計において、ディベロッパや DCC、ハードウェア、およびミドルウ ェア・ベンダの間の共同作業の促進剤となること。

DCC ベンダ、ハードウェア・ベンダ、ミドルウェア・ベンダ、ゲームディベロッパなどの各市場区分の 内部、ならびに相互間では、激しい競争が行われています。けれども、デジタルコンテンツの問題を解 決するためには、彼らすべてがコミュニケーションを行う必要があります。彼らが、共通のデジタルア セット・フォーマットに関して協力しないことには、ひいては市場全体のソリューションの最適化に直 接的な悪影響が出てきます。

- ハードウェア・ベンダは DCC ツールの露呈する機能の欠如に苦しんでいます。
- ミドルウェア・ベンダはツールチェーンの間の互換性の欠如に苦しんでいます。
- DCC ベンダは、ディベロッパを満足させるために必要なサポートや開発作業の量の多さに苦しん でいます。
- ディベロッパは、「使える」ツールチェーンを作成するために必要な投資額の大きさに苦しんで います。

彼らは、他の関係者と相談して、営業上、もしくは技術上の利点を考慮に入れない限り、共通フォーマ ットの設計を主導することはできません。つまり、関係者全員を満足させるような目標を設定できる者 は、この中にはいないのです。けれども、共通フォーマットは関係者全員に受け入れられる必要があり ます。この共通フォーマットが幅広く採用され、受け入れられるためには、主な関係者全員がその設計 に満足する必要があるのです。

このような共同作業を行うための触媒として、ビデオゲーム業界の主導者者の地位にある Sony Computer Entertainment (SCE) こそがふさわしかったのです。SCE には、ミドルウェアやディベロッ パプログラムにおいて、ツール・ベンダとゲームディベロッパの仲介を行ってきた歴史があったので、 この共通フォーマットの問題を、次世代プラットフォーム用のコンテンツの品質や量を向上させたい、 という要求とともに、議題に挙げることができました。

私たちは、この運動を常に SCE が推進しようとは思っておらず、時機が来れば、主導者の役割をグルー プの他のメンバに譲り渡したいと思っています。

- 主導者の役割をあまり早く譲ってしまうと、SCE が COLLADA を見捨てたのではないかという印象を与えるので、パートナーに好ましくない影響を与えるでしょう。
- 役割を譲るのが遅すぎると、SCE の COLLADA に対する管理が強すぎると考える企業の、外部からの関与や長期的な投資を妨げることになるでしょう。

開発方法論

COLLADA スキーマの開発のためのアプローチと方法論としては、分析、設計、実装という標準的なウォーターフォールプロセスを採用しています。分析段階においては、現在、業界で使われているツールやフォーマットの比較分析に、かなりの労力が割かれました。

設計段階においては、Microsoft Visual Studio® XML Designer と Altova 社の XMLSPY®ツールを使って、フォーマットのスキーマを繰り返し開発・検証しました。さらに、Altova 社の XMLSPY®を使って、ファイルが COLLADA スキーマにしたがっているかを検証し、文書化用の図面を作成しました。

このページは空白です。

2章 スキーマの概要

このページは空白です。

概要

COLLADA スキーマは、XML (eXtensible Markup Language) のデータベーススキーマです。COLLADA の機能セットを記述するのには、XML Schema 言語が利用されています。

コンセプト

XML は、ファイルや文書やデータセットのコンテンツ、構造、セマンティックスを記述するための標準的な言語として利用できます。XML 文書は、主に複数の「要素」で構成されます。それぞれの要素は、開始タグと終了タグで囲まれた情報ブロックです。以下に例を示しておきます。

```
<node id="here">
    <translate sid="trans"> 1.0 2.0 3.0 </translate>
    <rotate sid="rot"> 1.0 2.0 3.0 4.0 </rotate>
    <matrix sid="mat">
      1.0 2.0 3.0 4.0 5.0 6.0 7.0 8.0
      9.0 10.0 11.0 12.0 13.0 14.0 15.0 16.0
      </matrix>
</node>
```

この例には、<node>、<translate>、<rotate>、<matrix>という 4 つの要素が含まれており、最後の 3 つの要素は、最初の<node>要素の中にネストされています。つまり、要素を任意の深さにネストさせることが可能です。

要素には、その要素の特徴を記述した「属性」を指定することも可能です。たとえば、いま示した例の中の<node>要素には、"here"という値が設定された id 属性が指定されています。そのため、id 属性が"there"の別の<node>要素と区別することができるようになります。いまの場合だと、属性の名前は id で、値は here となります。

XMLの語彙の詳細に関しては「用語集」を参照してください。

アドレス構文

COLLADA では、インスタンス文書の要素や値を参照するために、以下の 2 種類のメカニズムを利用するようになっています。

- 多くの要素の url 属性や source 属性では、インスタンス文書およびその中の要素を id 属性に よって特定する URI 参照方式を利用しています。
- animation 要素の target 属性では、インスタンス文書中の要素を id 属性と sid 属性によって特定する COLLADA 独自の参照方式を利用しています。この方式に C/C++スタイルの構造体メンバの選択構文を加えると、要素の値を参照することができます。

id 属性は、URI フラグメント識別子表記法を使って参照されます。XML 文書内の URI フラグメント識別子の構文は、XML 仕様で定義されています。URI フラグメント識別子は、XPointer 構文に準拠している必要があります。COLLADA で URI を使って参照するのは、一意の識別子だけなので、ここで使われる XPointer の構文はショートハンド・ポインタと呼ばれます。ショートハンド・ポインタで指定するのは、インスタンス文書中の要素のid 属性の値です。

url 属性と source 属性では、URI フラグメント識別子の前にシャープ記号(#)が付きます。 target 属性はURIではないため、シャープ記号はありません。これらの記法を使うと、たとえば、同一の<source>要素を以下のように参照することができます。

```
<source id="here" />
```

```
<input source="#here" />
<skin target="here" />
```

target 属性の構文は、以下のような複数の部分から構成されます。

- 最初の部分は、インスタンス文書中の要素の ID、またはこれが相対アドレスであるということを 示すドット・セグメント (.) です。
- その後には、1 つまたは複数のサブ識別子が続きます。各サブ識別子の先頭には、パスの区切り 文字として、スラッシュ記号(/)が付加されます。サブ識別子は、最初の部分によって特定さ れる要素の子要素を指定します。ネスト(入れ子)になった要素の場合、対象となる要素へのパ スを指定するために、複数のサブ識別子が使われることもあります。
- 最後の部分はオプションです。この部分が存在しない場合には、target 要素の全メンバの値 (たとえば、行列すべての値)が対象となります。この部分が存在する場合、以下の 2 つのうち のいずれかの形式をとることができます。
 - 。 シンボルアクセスを示す、メンバ値(フィールド)の名前。この記法は、以下の要素から構成されます。
 - メンバ指定アクセスを示すピリオド記号(.)。
 - メンバ値 (フィールド) の記号名。第 4 章の一般用語集には、共通プロファイル中のこのフィールドの値が記載されています。
 - 。 配列アクセスを示すメンバ値(フィールド)の基数的な位置。この記法は、以下の要素から 構成されます。
 - 配列選択アクセスを表す左括弧記号「(」。
 - ゼロ(最初のフィールド)で始まるフィールド番号。
 - 式の終わりを示す右括弧記号「)」。

配列アクセス構文を利用できるのは、1次元のベクトルと2次元の行列中のフィールドを示すときだけです。以下に、target 属性構文の例をいくつか示します。

各<channel>要素は、X、Y、Z で表される<translate>要素のメンバ値の各成分を対象にしています。同様に<rotate>要素の ANGLE メンバは、それぞれシンボリック構文と、配列構文を使って 2 回対象にされます。

柔軟性と簡潔性のために、ターゲットのアドレッシング・メカニズムは XML 要素をスキップすることができます。id 属性と sid 属性をすべての間に位置する要素に割り当てる必要はありません。たとえば、<optics>と<technique>の要素に sid 属性を追加せずに、カメラの Y を対象とすることが可能です。実際、いくつかの要素では id 属性や sid 属性が指定できません。

また、対象となるテクニックごとにわざわざ余分にアニメーション・チャネルを作成することなく、複数のテクニックの中のカメラの yfov を対象とすることも可能です(テクニックというのは「スイッチ」のことで、一方または他方がインポート時に選択され、両方が選択されることはありません。したがって、対象となるのは1つだけです)。

例:

それぞれのテクニックでパラメータの名前が異なっていますが、それでも同じ **sid="YFOV"**属性が使用されている点に注意してください。このようにすることも可能なのです。

スキップすることができなければ、要素を対象とすることは不安定なメカニズムになり、長い属性や多くの余分なアニメーション・チャネルが必要となってしまうでしょう。

異なるテクニックの対象パラメータが異なる値を必要とする場合、ディベロッパが別個のアニメーション・チャネルを使用できることは言うまでもありません。

このページは空白です。

このページは空白です。

はじめに

本章では、COLLADA スキーマのシンタックスについて機能ごとに解説します。スキーマ中の個々の XML 要素は、以下のセクションに分けて解説してあります。

節	説明
概要	要素の名前と目的について簡単に述べてあります。
コンセプト	要素が定義された背景と意義について述べてあります。
属性	要素に適用可能な属性について述べてあります。
要素	要素の制約事項や相互関係について述べてあります。
備考	要素を使用する上で関係した情報を述べてあります。
例	要素の使い方を紹介してあります。

accessor

概要

<accessor>要素は、<float array>、<int array>、<Name array>、<bool array>、 <IDREF array>のいずれかの配列要素へのアクセスパターンを宣言するためのものです。offset と stride のどちらかの属性を指定して、インターリーブ方式または非インターリーブ方式で構成された 配列へのアクセスを記述します。

コンセプト

<accessor>要素では、配列データソースから値のストリームを記述します。このアクセッサの出力は、 <param>子要素で記述されます。

属性

<accessor>要素には、以下の属性があります。

count xs:nonNegativeLong offset xs:nonNegativeLong

source xs:anyURL

stride xs:nonNegativeLong

count は必須の属性で、配列へのアクセス回数を表します。

offset はオプションの属性で、配列から最初に読み取る値のインデックスを表します。デフォルト値 は0です。

source は必須の属性で、URL 表記を利用して、アクセスする配列の場所を表します。

stride はオプションの属性で、配列へ毎回アクセスする際に、1 つの単位としてみなす値の数を表し ます。デフォルト値は1で、これは単一の値にアクセスすることを意味します。

関連要素

<accessor>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 technique common

子要素 param その他 なし

備考

<param>要素は任意の数だけ利用でき、まったく指定しなくてもかまいません。

<param>要素の数と順番で、<accessor>要素の出力が定義されることになります。

それぞれのパラメータは、指定されている順番で各値にバインドされます。データの並べ替えは行われ ません。name 属性のない<param>要素はバインドされず、その値は出力の一部ではないことを意味し ます。

<param>要素の type 属性は、<accessor>要素の子である場合、int、float、Name、bool、 IDREF の型の配列セットに限定されます。

<accessor>要素の source 属性で、インスタンス文書の範囲外にある配列データソースを参照して もかまいません。

stride 属性は、<param>要素の数と等しいかまたは大きい値でなければなりません。stride の値で 示されているよりも<param>要素の数が少ない場合、バインドされていないデータソースの値はスキ ップされます。

例

以下に<accessor>要素の基本的な使い方の例を示しておきます。

また、以下は3つ整数値のペアのストリームを表した<accessor>要素の例で、2番目の<param>要素にはname 属性がないため、配列中の2番目の値をすべて読み飛ばしています。

さらに以下の例では、stride 属性が3だけれども、3番目の値を出力とバインドする<param>要素がないため、3番目の値を読み飛ばしています。

ambient

概要

<ambient>要素は、環境光源を表すためのものです。

コンセプト

<ambient>要素で、環境光源を表すために必要なパラメータを宣言します。環境光源というのは、位 置や方向に関係なく、すべてに対して均一に照明が当たる光のことです。

属性

<ambient>要素に属性はありません。

関連要素

<ambient>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 technique common

子要素 color その他 なし

備考

<ambient>要素は、<light>要素の下の<technique common>の子としてだけ利用できます。 <color>要素を 1 つだけ利用しなければなりません。<color>要素には、光源のカラーを表す 3 つの 浮動小数点を含めておきます。sid 属性を指定することも可能です。

例

以下は、<ambient>要素の例です。

```
d="blue">
 <technique common>
   <ambient>
     <color>0.1 0.1 0.5</color>
   </ambient>
</light>
```

animation

概要

<animation>要素は、アニメーション情報の宣言をカテゴリ化するためのものです。アニメーションの階層構造には、アニメーションのキーフレームデータとサンプラ関数を記述するための要素が含まれます。これらの要素は、一緒に実行すべきアニメーションをグループ化して提供するように順番付けられています。

コンセプト

アニメーションは、時間の経過にしたがってオブジェクトまたは値の変化を記述します。通常、アニメーションは、動いている錯覚を与えるために利用されます。一般的なアニメーションの技法は、キーフレームアニメーションです。

キーフレームはデータを 2 次元 (2D) サンプリングしたものです。最初の次元は入力と呼ばれ、通常、時間です。ただし、他の任意の値でもかまいません。2 番目の次元は出力と呼ばれ、アニメートされている最中の値を表します。キーフレームのセットと補間アルゴリズムを利用してキーフレーム間の時間に対して中間の値が計算され、キーフレーム間の区間全体の出力値のセットが生成されます。これらのキーフレームセットとその間の補間によって、「アニメーション曲線」や「関数曲線」と呼ばれる 2 次元の関数を定義することになります。

属性

<animation>要素には、以下の属性があります。

id はオプションの属性で、<animation>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。
name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

<animation>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数スキーマ中に定義された要素の数親要素library animations、animation

子要素 asset、animation、source、sampler、channel、extra

その他なし

備考

<animation>要素には、アニメーションツリーを形成するためのアニメーションデータを表す要素が含まれます。データの実際の型と複雑度の詳細を表すのは、子要素に任せられています。

<animation>要素には、0個以上の<source>要素を記述することができます。

<animation>要素には、0個以上の<sampler>要素を記述することができます。

<animation>要素には、0個以上の<channel>要素を記述することができます。

<asset>要素はまったく記述しないか、一度だけ記述することができます。

<extra>要素はまったく記述しないか、任意の数だけ記述することができます。

それぞれの子要素は、<asset>、<source>、<sampler>、<channel>、<animation>、<extra>の順番でなければなりません。

例

以下は、指定可能な属性を持った空の<animation>要素の例です。 library animations> <animation name="walk" id="Walk123"> <source /> <source /> <sampler /> <channel /> </animation> 以下は、「ジャンプ」するアニメーションを定義した簡単なアニメーションツリーの例です。 library animations> <animation name="jump" id="jump"> <animation id="skeleton root translate"> <source/><sampler/><channel/> </animation> <animation id="left hip rotation"> <source/><source/><sampler/><channel/> </animation> <animation id="left knee rotation"> <source/><sampler/><channel/> </animation> <animation id="right hip rotation"> <source/><sampler/><channel/> </animation> <animation id="right knee rotation"> <source/><sampler/><channel/> </animation> </animation> </library animations> 以下は、一部のアニメーションを未定義のままにした、もっと複雑なアニメーションツリーの例です。 library animations> <animation name=" elliot's animations" id="all elliot"> <animation name="elliot's spells" id="spells elliot"> <animation id="elliot_fire_blast"/> <animation id="elliot_freeze_down"/> <animation id="elliot_ferocity"/> </animation> <animation name="elliot's moves" id="moves elliot"> <animation id="elliot walk"/> <animation id="elliot run"/> <animation id="elliot jump"/> </animation> </animation> </library animations>

animation_clip

概要

<animation_clip>要素は、アニメーションクリップとして一緒に利用するアニメーション曲線の一部を定義するためのものです。

コンセプト

アニメーションクリップは、アニメーション曲線の1つのセットから異なる部分を切り分けるのに利用します。たとえば、キャラクタが最初は歩いており、途中から走り出すアニメーションがある場合、歩いているアニメーションと走っているアニメーションを2つの別々のクリップとして切り分けることができます。また、アニメーションクリップは、同じシーン中にいる別々のキャラクタのアニメーションを切り分けたり、同じキャラクタの別々の部分(上半身と下半身など)を切り分けるのにも利用できます。

現時点では、アニメーションクリップを COLLADA ドキュメント中でインスタンス化することができません。エンジンや他のツールで利用するためのものです。

属性

<animation clip>要素には、以下の属性があります。

id はオプションの属性で、<animation>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。

start はオプションの属性で、クリップの開始時間を表します(単位は秒)。この時間は、キーフレームデータで利用されているのと同じで、どのキーフレームセットをクリップに含めるのか判断するのに利用されます。クリップがいつ再生されるのかを開始時間で指定するわけではありません。参照されているアニメーションの2つのキーフレーム間に時間が位置する場合には、補間された値が利用されることになります。デフォルト値は0.0です。

end はオプションの属性で、クリップの終了時間を表します(単位は秒)。開始時間と同じように利用されます。終了時間を指定しなかった場合、最も長いアニメーションの終了時間が値として利用されます。

関連要素

<animation clip>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数スキーマ中に定義された要素の数親要素library animation clips

子要素 asset、instance animation、extra

その他 なし

備考

<asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ指定しなければなりません。
<instance_animation>要素は、1つまたは複数指定しなければなりません。
<extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ指定できます。
それぞれの子要素の順番は、<asset>、<instance_animation>、<extra>でなければなりません。

例

以下は、指定可能な属性を持った2つの<animation_clip>要素の例です。

asset

概要

<asset>要素は、その親要素に関連したアセット管理情報を定義するためのものです。

コンセプト

コンピュータは、膨大な量の情報を保存しており、アセットというのは、識別可能で1つの単位として管理できるように組織化された情報セットのことです。そういった情報をソフトウェアツールと人間が管理して理解できるようにするために、さまざまな属性を利用してアセットを表します。

属性

<asset>要素に属性はありません。

関連要素

<asset>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 camera、COLLADA、light、material、technique、texture

子要素 contributor、created、keywords、modified、revision、subject、

title, units, up axis

その他なし

contributor 要素には、その親要素に貢献した人に関連したデータが含まれます。contributor 要素は、まったく指定しないか、もしくは複数記述してもかまいません。

created 要素には、親要素が作成された日付と時刻が XML スキーマの dataTime プリミティブ型として ISO 8601 形式で表現されて含まれます。created 要素は、まったく指定しないか、もしくは 1 つだけ 記述することができます。

modified 要素には、親要素が最後に修正された日付と時刻が XML スキーマの dataTime プリミティブ型として ISO 8601 形式で表現されて含まれます。modified 要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。

revision 要素には、親要素のためのリビジョン情報が含まれます。revision 要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。

title 要素には、親要素のタイトル情報が含まれます。title 要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。

subject 要素には、親要素のトピックスに関して記述した情報が含まれます。subject 要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。

keywords 要素には、親要素を検索する際の条件に利用される言葉のリストが含まれます。keywords 要素は、まったく指定しないか、もしくは複数記述してもかまいません。

unit 要素には、測定単位について記述した情報が含まれます。単位の名前(name)とメートル法換算時の値(meter)を表す属性があります。unit 要素は、要素は、まったく指定しないか、もしくは 1 つだけ記述することができます。name 属性のデフォルト値は「meter」です。また、meter 属性のデフォルト値は「1.0」です。

up_axis 要素には、ジオメトリデータの座標系に関する情報が含まれます。座標はすべて右手系です。 X_{UP}, Y_{UP}, Z_{UP} のいずれかが指定できます。この要素は、それぞれどの軸を上、どの軸を右、どの軸を内側とみなすのかを指定します。

値	右軸	上軸	内側軸
X UP	負のY	正のX	正のZ
Y UP	正の X	正のY	正のZ
Z UP	正のX	正の Z	負のY

デフォルト値は Y_{UP} です。 up_{axis} 要素は、まったく指定しないか、もしくは 1 つだけ記述することができます。

備考

それぞれの子要素は、<contributor>、<created>、<keywords>、<modified>、<revision>、<subject>、<title>、<units>、<up axis>の順番となります。

例

以下は、親の<COLLADA>要素を表した<asset>要素の例です。つまり、ドキュメント全体を表しています。

bool_array

概要

<bool array>要素は、Boolean値の同種の配列用の保存場所を宣言するためのものです。

コンセプト

<bool_array>要素は、COLLADA スキーマで汎用的に利用されるデータ値を保存します。配列そのものは強く型付けされますが、セマンティックスをともないません。単純に、XML での Boolean 値の並びを記述します。

属性

<bool array>要素には、以下の属性があります。

count xs:nonNegativeLong

count は必須の属性で、配列中の値の数を表します。

id はオプションの属性で、この要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値はインスタンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

<bool array>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数スキーマ中に定義された要素の数

親要素 source

子要素 子要素はありません

その他なし

備考

<bool_array>要素には、XML Boolean 値のリストが含まれます。これらの値は、<source>要素へ のデータのレポジトリとして利用されます。

例

以下は、4つの Boolean 値の並びを表した<bool array>要素の例です。

```
<bool_array id="flags" name="myFlags" count="4">
    true true false false
</bool array>
```

camera

概要

<camera>要素は、シーン階層またはシーングラフへのビューを宣言するためのものです。<camera> 要素には、カメラの光学的な特性や撮影装置を表す要素が含まれます。

コンセプト

カメラというのは、シーンの視覚的なイメージを捕らえる装置です。シーン中のカメラには位置と方向 があり、カメラの光学系レンズから見たシーンとして、これがカメラのビューポイントとなります。 カメラの光学系は、入射光の焦点をイメージに合わせます。イメージの焦点は、カメラの撮影装置(フ ィルム)の面に合わせられ、

結果として生じるイメージを撮影装置が記録します。

属性

<camera>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName

id はオプションの属性で、<camera>要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値は、 インスタンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

<camera>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 library cameras

子要素 asset, optics, imager, extra

その他 なし

備考

カメラテクニックの要素には、<optics>要素が1つ、また0個か1つの<imager>要素が含まれてい なければなりません。

単純なカメラの場合、汎用的なテクニックでは、標準パラメータを利用して視野と視野錐台を記述した <optics>要素だけが含まれていれば問題ありません。

<asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 <extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。

例

以下は、視野角 45 度でシーンの透視図を記述した<camera>要素の例です。

```
<camera name="eyepoint">
  <optics>
    <technique common>
      <perspective>
        <yfov>45</yfov>
        <aspect ratio>1.33333</aspect ratio>
```

channel

概要

<channel>要素は、アニメーションの出力チャネルを宣言するためのものです。

コンセプト

時間の経過とともにアニメーションがその値を変換していくのにともなって、チャンネルに対してその 値が出力されます。アニメーションのチャンネルでは、変更された値をアニメーションエンジンからど こに保存するのか、その場所を表します。チャンネルは、アニメーションされた値を受け取るデータ構 造を対象とします。

属性

<channel>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName source xs:anyURL target xs:token

id はオプションの属性で、<channel>要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値は、 インスタンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

source は必須の属性で、URL 表記を利用して、サンプラの場所を表します。

target は必須の属性で、サンプラの出力にバインドされた要素の場所を表します。このテキスト文字 列は、第2章の「アドレス構文」のセクションに記述されている単純な形式にしたがったパス名です。

関連要素

<channel>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 animation

子要素はありません 子要素

その他 なし

備考

アドレス形式を表す target 属性については、「アドレス構文」のを参照してください。

例

以下は、「Box」という id を持つ要素の値の変化を対象とした<channel>要素の例です。 <animation>

<channel id="Box-Translate-X-Channel" source="#Box-Translate-X-Sampler"</pre> target="Box/Trans.X"/>

<channel id="Box-Translate-Y-Channel" source="#Box-Translate-Y-Sampler"</pre> target="Box/Trans.Y"/>

<channel id="Box-Translate-Z-Channel" source="#Box-Translate-Z-Sampler"</pre> target="Box/Trans.Z"/>

</animation>

COLLADA

概要

COLLADA スキーマは XML をベースとしています。そのため、整形式 XML ドキュメントにするには「ドキュメントルート要素」、つまりドキュメントのエントリが必要となります。

コンセプト

<COLLADA>要素は、COLLADA スキーマに準拠しているコンテンツであることを表すドキュメントルートを宣言するためのものです。

属性

<COLLADA>要素には、以下の属性があります。

version xs:string xmlns xs:anyURI

version は必須の属性で、インスタンス文書が準拠している COLLADA スキーマのリビジョンです。現時点で指定可能な値は 1.4.0 だけです。

インスタンス文書のスキーマを特定するために、この要素に XML Schema 名前空間属性の xmlns が指定できます。

関連要素

<COLLADA>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 1回

親要素 親要素はありません

子要素 asset、library animations、library animation clips、

library_cameras. library_controllers. library_effects.

library force fields, library_geometries, library_images,

library_lights, library_materials, library_nodes,
library physics materials, library physics models,

library physics scenes, library visual scenes, scene, extra

その他 なし

備考

<COLLADA>要素は、COLLADAインスタンス文書中のドキュメントエントリ (ルート要素)です。

ドキュメントルートには、<asset>要素が1つ含まれていなければなりません。

ドキュメントルートには、library_*>要素をまったく含めないか、または任意の数だけ含めることができます。

ドキュメントルートには、<scene>要素をまったく含めないか、または 1 つだけ含めることができます。

それぞれの子要素を指定する場合、以下の順番で指定しなければなりません。

- 1. <asset>要素
- 2. 2. system *>要素
- 3. <scene>要素

以下は、スキーマのバージョンが「1.4.0」の空の COLLADA インスタンス文書の例です。

contributor

概要

<contributor>要素は、アセット管理のために作成者情報を定義するためのものです。

コンセプト

現在の制作ラインでは、特にアートのサイズが着実に大きくなるのにともなって、複数の人間がおそらく複数のツールを利用して、1 つのアセットに携わることが増えてきています。そのため、この作成者情報は、アセット管理システムにとって重要な意味を持ちます。

属性

<contributor>要素に属性はありません。

関連要素

<contributor>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 asset

子要素 author、authoring tool、comments、copyright、source data

その他 なし

備考

それぞれの子要素は、<authoring_tool>、<comments>、<copyright>、<source data>の順番となります。

例

以下は、アセットのための<contributor>要素の例です。

controller

概要

<controller>要素は、汎用的な制御情報の宣言をカテゴリ化するためのものです。

コンセプト

コントローラというのは、別のオブジェクトの操作を制御管理するためのデバイス、つまりメカニズム

属性

<controller>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName

id はオプションの属性で、<controller>要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この 値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

<controller>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 library controllers

子要素 asset, skin, morph, extra

その他 なし

備者

<controller>要素には、制御データを表す要素が含まれます。データの実際の型と複雑度の詳細を 表すのは、子要素に任せられています。

<asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。

<skin>または<morph>の要素は1つだけ指定できますが、どちらか片方しか指定できません。

<extra>要素は、任意の数だけ指定できます。

それぞれの子要素は、<asset>、<skin>または<morph>、<extra>の順番となります。

例

以下は、指定可能な属性を持った空の<controller>要素の例です。

```
library controllers>
 <controller name="skinner" id="skinner456">
    <skin/>
 </controller>
</library controllers>
```

directional

概要

<directional>要素は、方向性光源を表すためのものです。

コンセプト

<directional>要素は、方向性光源を表すために必要なパラメータを宣言します。方向性光源というのは、位置に関係なく、同じ方向からすべてを照らす光源のことです。

ローカル座標での光源のデフォルトの方向ベクトルは[0, 0, -1]で、Z 軸へ進みます。光源の実際の方向は、光源がインスタンス化されたノードの変換で定義されます。

属性

<directional>要素に属性はありません。

関連要素

<directional>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 technique_common

子要素 color その他 なし

備考

<directional>要素は、dight>要素の下で<technique_common>の子としてだけ指定できます。
<color>要素を 1 つだけ指定しなければなりません。この<color>要素には、光源のカラーを指定する 3 つの浮動小数点を含めておきます。sid 属性を指定することもできます。

例

以下は、<directional>要素の例です。

extra

概要

<extra>要素は、親要素に関係した追加情報を宣言するためのものです。

コンセプト

スキーマに拡張性を持たせるには、ユーザが任意の情報を指定できる方法が必要となります。この <extra>要素を利用すると、アプリケーションへの実際の補足データやセマンティックス(メタ)デ ータを表現することが可能です。

COLLADA では、この<extra>要素の追加情報を、任意の XML 要素やデータを含んだテクニック (technique) として表現するようになっています。

属性

<extra>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName xs:NMTOKEN type

id はオプションの属性で、<extra>要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値は、 インスタンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

type はオプションの属性で、データ値の型を表します。このテキスト文字列は、アプリケーションが 理解できるものでなければなりません。

関連要素

<extra>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 COLLADA、scene、library_animations、library_animation_clips、

library_cameras, library_controllers, library_effects,
library force fields, library geometries, library images,

library_lights, library_materials, library_nodes,
library physics materials, library physics models,

library_physics_scenes, library_visual_scenes, animation, animation_clip, instance_animation, camera, optics, imager, controller, skin, morph, joints, vertex_weights, targets,

convex mesh, mesh, spline, profile COMMON,

profile COMMON::technique, texture, force field, image, light,

material, instance effect, node, instance camera,

instance_controller, instance_geometry, instance_light, instance_node, physics_material, physics_model, rigid_body, rigid_constraint, instance_physics_model, physics_scene, instance_force_field, visual_scene, instance_physics_scene,

instance visual scene

子要素 technique

その他 なし

備考

<technique>要素は任意の数だけ利用でき、まったく指定しなくてもかまいません。

例

以下は、構造化された追加コンテンツと構造化されていないものの両方をアウトライン化した <extra>要素の例です。

<geometry>

<extra>

<max:someElement>defined in the Max schema and
validated.</max:someElement>

</technique>

</extra>

<geometry>

float_array

概要

<float array>要素は、浮動小数点の値を含んだ同種の配列用の保存場所を宣言するためのものです。

コンセプト

<float array>要素は、COLLADA スキーマで汎用的に利用されるデータ値を保存します。配列そのも のは強く型付けされますが、セマンティックスをともないません。単純に、浮動小数点の並びを記述し ます。

属性

<float array>要素には、以下の属性があります。

count xs:unsignedLong

id xs:ID xs:NCName name digits xs:short magnitude xs:short

count は必須の属性で、配列中の値の数を表します。

id はオプションの属性で、この要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値はインス タンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

digits はオプションの属性で、配列中に含めることが可能な浮動小数点の有効桁数(10 進数)を表 します。デフォルト値は6です。

magnitude はオプションの属性で、配列中に含めることが可能な浮動小数点の最大指数を表します。 デフォルト値は38です。

関連要素

<float array>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 source

子要素はありません 子要素

その他 なし

備考

<float array>要素には、浮動小数点の値のリストが含まれます。これらの値は、<source>要素へ のデータのリポジトリとして利用されます。

例

以下は、9つの浮動小数点の並びを表した<float array>要素の例です。

<float array id="floats" name="myFloats" count="9">

 $1.0 \ 0.0 \ 0.0$

0.0 0.0 0.0

1.0 1.0 0.0

</float array>

geometry

概要

<geometry>要素は、ジオメトリ情報の宣言をカテゴリ化するためのものです。ジオメトリというのは、 点、線、角度、面、立体などの計測やプロパティや関係などを扱うための一連の数学です。 <geometry> 要素には、メッシュや凸状メッシュやスプラインの宣言が含まれます。

コンセプト

ジオメトリの記述には、さまざまな形式があります。基本的に、コンピュータグラフィックスのハードウェアは、さまざまな属性(カラーや法線など)を持った頂点の情報を受け付けるように標準化されています。ジオメトリの記述は、この頂点データを直接的で効率的に表現するための方法です。以下に、一般的なジオメトリ形式の一部を挙げておきます。

- スプライン
- ・ベジェ
- メッシュ
- NURBS
- パッチ

もちろん、これですべてというわけではありません。現時点では、COLLADA はポリゴンメッシュとスプラインだけをサポートしています。

属性

<geometry>要素には、以下の属性があります。

id はオプションの属性で、<geometry>要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値はインスタンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、<geometry>要素の名前を含むテキスト文字列です。

関連要素

<geometry>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数スキーマ中に定義された要素の数

親要素 library_geometries

子要素 asset、mesh、convex mesh、extra、spline

その他 なし

備考

<geometry>要素には、ジオメトリデータを表す要素が含まれます。データの実際の型と複雑度の詳細を表すのは、子要素に任せられています。

<asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。

<convex_mesh>、<mesh>、または<spline>の要素は、1 つだけ記述しなければなりません。いずれか1つだけが記述できます。

<extra>要素は、任意の数だけ指定してかまいません。

例

以下は、指定可能な属性を持った空の<geometry>要素の例です。

```
library_geometries>
  <geometry name="cube" id="cube123">
    <mesh/>
  </geometry>
</library_geometries>
```

IDREF_array

概要

<IDREF array>要素は、ID参照値を含んだ同種の配列の保存場所を宣言するためのものです。

コンセプト

<IDREF array>要素は、インスタンス文書中の ID を参照する文字列値を保存します。

属性

<IDREF array>要素には、以下の属性があります。

count xs:unsignedLong

count は必須の属性で、配列中の値の数を表します。

id はオプションの属性で、この要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値はインスタンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

<IDREF array>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 source

子要素 子要素はありません

その他なし

備考

<IDREF_array>要素には、XML IDREF の値のリストが含まれます。これらの値は、<source>要素 へのデータのレポジトリとして利用されます。

例

以下は、ドキュメント中の<node>要素を参照する<IDREF array>要素の例です。

```
<IDREF_array id="refs" name="myRefs" count="4">
  Node1 Node2 Joint3 WristJoint
</IDREF_array>
```

image

概要

<image>要素は、オブジェクトのグラフィカルな表現用の保存場所を宣言するためのものです。 <image>要素は、ラスター画像データの記述に最も適していますが、それ以外の画像形式を処理する こともできます。

コンセプト

デジタル画像データは、大きく分けて、ラスター、ベクトル、ハイブリッドの3種類の形式があります。 ラスター画像は、画素 (ピクセル) と呼ばれ輝度やカラー値の並びから構成され、このピクセルが集ま って1つのピクチャーを構成しています。またベクトル画像では、曲線、直線、形状など、数学的な式 を利用して、ピクチャーや図を記述します。さらにハイブリッド画像は、ラスター情報とベクトル情報 のそれぞれの長所を組み合わせることでピクチャーを記述します。

ラスター画像データは、N 次元の配列として構成されます。テクスチャの参照を行う関数を利用するこ とで、変位、法線、高さなどのフィールド値といった、カラー以外の値にもアクセスでき、この配列構 造を有効に利用することが可能です。

属性

<image>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName format xs:string

height xs:nonNegativeInteger width xs:nonNegativeInteger depth xs:nonNegativeInteger

id はオプションの属性で、<image>要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値はイ ンスタンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

format はオプションの属性で、画像形式を表す文字列値です。

height はオプションの属性で、ピクセルを単位として画像の高さを表す整数値です。

width はオプションの属性で、ピクセルを単位として画像の幅を表す整数値です。

depth はオプションの属性で、ピクセルを単位として画像の深さを表す整数値です。2次元の画像の場 合、深さは1です。これがデフォルト値となっています。

関連要素

<image>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 library images, effect, profile CG, profile GLSL,

profile COMMON, profile GLES, technique

子要素 asset, data, init from, extra

その他 なし

備考

<image>要素では、<init_from>を指定するか、もしくは<data>で画像データを埋め込むことで、外部の画像ファイルを指定することもできます。

<data>子要素には、埋め込まれた画像データを表す16進数の符号化されたバイナリオクテットの並びが含まれます。

例

以下は、外部の PNG アセットを参照する <image>要素の例です。

imager

概要

<imager>要素は、たとえば、フィルムや CCD といったカメラの画像センサーを表すためのものです。

コンセプト

カメラの光学系は、画像を(通常は平面の)センサーに投影します。<imager>要素は、このセンサー が光のカラーと強度をどのように数値化するのかを定義するためのものです。

実際の光の強度は、極めて広いダイナミックレンジを持つことがあります。たとえば、野外のシーンで は、太陽の明るさは、木陰よりも桁違いに明るくなります。また、無限に多様化した波長の光子を含む こともあります。これに対して表示装置は、非常に限定されたダイナミックレンジを利用するようにな っており、普通、可視範囲内の 3 つの波長、つまり、赤 (Red) 、緑 (Green)、青 (Blue) の 3 原色し か考慮しません。これらは、一般に3つの8ビット値として表されます。

したがって、画像センサーは、以下の2つの処理を行うようになっています。

- スペクトルサンプリング
- ダイナミックレンジのリマップ

この 2 つの処理の組み合わせはトーンマッピングと呼ばれ、画像合成の最後のステップ(レンダリン グ)として実行されます。レイトレーサなどの高品質のレンダラは、スペクトルの強度を内部的に浮動 小数点数として表し、実際のピクセルのカラーを float3s または float の配列(マルチスペクト ル・レンダラ)として保存するようになっており、その後、グラフィックスハードウェアやモニタで表 示可能な 24 ビットの RGB 画像を作成するために、トーンマッピングを実行します。なお、多くのレン ダラは、ハイダイナミックレンジ(HDR)のオリジナル画像を後で「再露光」できるように保存するこ ともできます。

関連要素

<imager>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 camera

technique, extra 子要素

その他 なし

備者

<imager>要素は、オプションです。共通プロファイルでは省略されており、デフォルトの解釈は、以 下のようになっています。

- 輝度の線形マッピング
- 0..1 の範囲へのクランプ (コンポーネントのフレームバッファごとに 8 ビットという条件で、 0..255 にマッピングされる)
- R、G、Bのスペクトルサンプリング

マルチスペクトル・レンダラは、少なくともスペクトルサンプリングを定義するために、<imager>要 素を指定する必要があります。

以下は、CCD センサ付きの本物そっくりのカメラを記述する<camera>要素の例です。

```
<camera name="eyepoint">
  <optics>
    <technique common>....</technique common>
    <technique profile="MyFancyGIRenderer">
      <param name="FocalLength" type="float">180.0</param>
      <param name="Aperture" type="float">5.6</param>
    </technique>
  </optics>
  <imager>
    <technique profile="MyFancyGIRenderer">
      <param name="ShutterSpeed" type="float">200.0</param>
      <!- "White-balance"
                           -->
      <param name="RedGain" type="float">0.2</param>
      <param name="GreenGain" type="float">0.22</param>
      <param name="BlueGain" type="float">0.25</param>
      <param name="RedGamma" type="float">2.2</param>
      <param name="GreenGamma" type="float">2.1</param>
      <param name="BlueGamma" type="float">2.17</param>
      <param name="BloomPixelLeak" type="float">0.17</param>
      <param name="BloomFalloff" type="Name">InvSquare</param>
    </technique>
  </imager>
</camera>
```

input

概要

<input>要素は、データソースの入力セマンティクスを宣言するためのものです。

コンセプト

<input>要素では、コンシューマが必要とする入力の結び付きを宣言します。

属性

<input>要素には、以下の属性があります。

offset xs:unsignedLong

semantic xs:NMTOKEN source xs:anyURL

set xs:unsignedLong

offset 属性は、インデックスのリストへのオフセットを表します。2 つの<input>要素が同じオフセ ットを共有している場合、同じ値にインデックス化されます。これは、インデックスリスト用の簡単な 圧縮形式として機能すると同時に、インデックスの利用される順番を定義することになります。 <input>要素が<lines>、<linestrips>、<polygons>、<polylist>、<triangles>、 <trifans>、<tristrips>のいずれかの要素の子の場合、offset は必須の属性となります。 semantic は必須の属性で、入力の結び付きの意味をユーザ定義するものです。 source は必須の属性で、データソースの場所を表します。 set 属性は、どの入力を単一セットとしてグループ化すべきなのかを表します。これは、複数の入力が 同じセマンティックスを共有する場合に役立ちます。

関連要素

<input>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 joints, lines, linestrips, polygons, polylist, sampler, targets,

triangles, trifans, tristrips, vertex weights, vertices

子要素はありません 子要素

その他 なし

備考

それぞれの入力は、親要素の範囲内で idx 属性によってユニークに識別されます。

<input>要素には、値が COLOR の semantic 属性を指定できます。それらのカラー入力は RGB (float3) です。

<extra>要素は、任意の数だけ指定できます。

以下は、頂点の位置と法線、それに<polygon>要素のテクスチャ空間接線とともに、テクスチャ座標の2つのセットを表す6つの<input>要素の例です。

```
<mesh>
 <source name="grid-Position"/>
 <source name="grid-0-Normal"/>
 <source name="texCoords1"/>
 <source name="grid-texTangents1"/>
 <source name="texCoords2"/>
 <source name="grid-texTangents2"/>
 <vertices id="grid-Verts">
   <input semantic="POSITION" source="#grid-Position"/>
 <vertices>
  <polygons count="1" material="#Bricks">
   <input semantic="VERTEX" source="#grid-Verts" offset="0"/>
   <input semantic="NORMAL" source="#grid-Normal" offset="1"/>
   <input semantic="TEXCOORD" source="#texCoords1" offset="2" set="0"/>
   <input semantic="TEXCOORD" source="#texCoords2" offset="2" set="1"/>
   <input semantic="TEXTANGENT" source="#texTangents1" offset="2" set="0"/>
   <input semantic="TEXTANGENT" source="#texTangents2" offset="2" set="1"/>
   0 0 0 2 1 1 3 2 2 1 3 3
  </polygons>
</mesh>
```

instance animation

概要

<instance animation>要素は、COLLADA アニメーションリソースのインスタンス化を宣言するため のものです。

コンセプト

オブジェクトの実際のデータ表現を一度しか保存しない場合もありますが、オブジェクトはシーン中で 複数表すことができます。オブジェクトは、表示されるたびに、さまざまな方法で変形される場合があ ります。シーン中での個々の表示は、オブジェクトのインスタンスと呼ばれます。

それぞれのオブジェクトのインスタンスは、ユニークであったり、他のインスタンスと同じデータを共 有する場合があります。ユニークなインスタンスはオブジェクトデータの独自のコピーを持ち、独立し て操作することが可能です。ユニークではない(共有されている)インスタンスは、そのオブジェクト の他のインスタンスとデータの一部またはすべてを共有します。ある共有されたインスタンスに変更を 加えると、そのデータを共有している他のすべてのインスタンスに影響を及ぼすことになります。

この効果を生み出すメカニズムが現在のシーンやリソースにとってローカルな場合には、これはインス タンス化と呼ばれます。現在のシーンやリソースにとって外部のものである場合には、外部参照と呼ば れます。

属性

<instance animation>要素には、以下の属性があります。

url xs:anyURL

url は必須の属性で、インスタンス化するオブジェクトの場所を URL で表します。

関連要素

<instance animation>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 animation clip

子要素 extra その他 なし

備者

url 属性は、#文字で始まる相対 URL の断片的な識別子を利用してローカルなインスタンスへの参照を 表します。断片的な識別子は、インスタンス化する要素の ID で構成された XPointer のショートハン ド・ポインタです。

url 属性で他のリソースへのパスを含む外部参照を行う際には、絶対 URL もしくは相対 URL を使います。 COLLADA では、インスタンス同士でデータを共有する方法を規定していません。このデータ共有の方法 は、ランタイム時のアプリケーションに任されています。

以下は、「anim」という ID で識別されたローカル定義の<animation>要素を参照する<instance_animation>要素の例です。このインスタンスは、オリジナルのオブジェクトの位置から少し平行移動されたものとなります。

instance_camera

概要

<instance camera>要素は、COLLADAカメラリソースのインスタンス化を宣言するためのものです。

コンセプト

オブジェクトの実際のデータ表現が一度しか保存されない場合もありますが、オブジェクトを複数シー ン中で表すことができます。オブジェクトは、表示されるたびに、さまざまな方法で変形される場合が あります。シーン中での個々の表示は、オブジェクトのインスタンスと呼ばれます。

それぞれのオブジェクトのインスタンスは、ユニークであったり、他のインスタンスと同じデータを共 有する場合があります。ユニークなインスタンスはオブジェクトデータの独自のコピーを持ち、独立し て操作することが可能です。ユニークではない(共有されている)インスタンスは、そのオブジェクト の他のインスタンスとデータの一部またはすべてを共有します。ある共有されたインスタンスに変更を 加えると、そのデータを共有している他のすべてのインスタンスに影響を及ぼすことになります。

この効果を生み出すメカニズムが現在のシーンやリソースにとってローカルな場合には、これはインス タンス化と呼ばれます。現在のシーンやリソースにとって外部のものである場合には、外部参照と呼ば れます。

属性

<instance camera>要素には、以下の属性があります。

url xs:anyURL

url は必須の属性で、インスタンス化するオブジェクトの場所を URL で表します。

関連要素

<instance camera>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 node 子要素 extra なし その他

備考

url 属性は、#文字で始まる相対 URL の断片的な識別子を利用してローカルなインスタンスへの参照を 表します。断片的な識別子は、インスタンス化する要素の ID で構成された XPointer のショートハン ド・ポインタです。

ur1 属性で他のリソースへのパスを含む外部参照を行う際には、絶対 URL もしくは相対 URL を使います。 COLLADA では、インスタンス同士でデータを共有する方法を規定していません。このデータ共有の方法 は、ランタイム時のアプリケーションに任されています。

以下は、「cam」という ID で識別されたローカル定義の <camera>要素を参照する <instance_camera>要素の例です。このインスタンスは、オリジナルのオブジェクトの位置から少し平行移動されたものとなります。

instance controller

概要

<instance controller>要素は、COLLADA コントローラリソースのインスタンス化を宣言するため のものです。

コンセプト

オブジェクトの実際のデータ表現が一度しか保存されない場合もありますが、オブジェクトを複数シー ン中で表すことができます。オブジェクトは、表示されるたびに、さまざまな方法で変形される場合が あります。シーン中での個々の表示は、オブジェクトのインスタンスと呼ばれます。 それぞれのオブジェクトのインスタンスは、ユニークであったり、他のインスタンスと同じデータを共 有する場合があります。ユニークなインスタンスはオブジェクトデータの独自のコピーを持ち、独立し て操作することが可能です。ユニークではない(共有されている)インスタンスは、そのオブジェクト の他のインスタンスとデータの一部またはすべてを共有します。ある共有されたインスタンスに変更を 加えると、そのデータを共有している他のすべてのインスタンスに影響を及ぼすことになります。 この効果を生み出すメカニズムが現在のシーンやリソースにとってローカルな場合には、これはインス タンス化と呼ばれます。現在のシーンやリソースにとって外部のものである場合には、外部参照と呼ば れます。

属性

<instance controller>要素には、以下の属性があります。

url xs:anyURL

url は必須の属性で、インスタンス化するオブジェクトの場所を URL で表します。

関連要素

<instance controller>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 node

bind material, skeleton, extra 子要素

その他 なし

備者

url 属性は、#文字で始まる相対 URL の断片的な識別子を利用してローカルなインスタンスへの参照を 表します。断片的な識別子は、インスタンス化する要素の ID で構成された XPointer のショートハン ド・ポインタです。

url 属性で他のリソースへのパスを含む外部参照を行う際には、絶対 URL もしくは相対 URL を使います。 <skeleton>要素は、必要な joint ノードの検索を開始するために、スキンコントローラのある場所 を表すのに利用されます。この要素は、モーフィングコントローラでは意味がありません。 <extra>要素は、任意の数だけ利用できます。

以下は、「skin」と識別されたローカル定義の <controller>要素を参照する $<instance_controller>$ 要素の例です。このインスタンスは、オリジナルのオブジェクトの位置から少し平行移動されたものとなります。

また以下は、2つの<instance_controller>要素で、skin と識別された同じくローカルに定義された<controller>要素を参照する例です。この 2 つの skin インスタンスは、<skeleton>要素を使ってスケルトンの別々のインスタンスにバインドされます。

```
library controllers>
  <controller id="skin">
    <skin source="#base mesh">
      <source id="Joints">
        <Name array count="4"> Root Spine1 Spine2 Head </Name array>
        . . .
     </source>
     <source id="Weights"/>
     <source id="Inv bind mats"/>
     <joints>
       <input source="#Joints" semantic="JOINT"/>
     </joints>
     <vertex weights/>
    </skin>
  </controller>
</library controllers>
library_nodes>
  <node id="Skeleton1" sid="Root">
    <node sid="Spine1">
     <node sid="Spine2">
       <node sid="Head"/>
     </node>
    </node>
  </node>
<node id="skel01">
   <instance node url="#Skeleton1"/>
</node>
<node id="skel02">
  <instance node url="#Skeleton1"/>
</node>
<node>
```

```
<instance_controller url="#skin"/>
   <skeleton>#skel01</skeleton>
  </instance_controller>
</node>
<node>
  <instance_controller url="#skin"/>
   <skeleton>#skel02</skeleton>
 </instance_controller>
</node>
```

instance_geometry

概要

<instance_geometry>要素は、COLLADA ジオメトリリソースのインスタンス化を宣言するためのも のです。

コンセプト

オブジェクトの実際のデータ表現が一度しか保存されない場合もありますが、オブジェクトを複数シーン中で表すことができます。オブジェクトは、表示されるたびに、さまざまな方法で変形される場合があります。シーン中での個々の表示は、オブジェクトのインスタンスと呼ばれます。それぞれのオブジェクトのインスタンスは、ユニークであったり、他のインスタンスと同じデータを共有する場合があります。ユニークなインスタンスはオブジェクトデータの独自のコピーを持ち、独立して操作することが可能です。ユニークではない(共有されている)インスタンスは、そのオブジェクトの他のインスタンスとデータの一部またはすべてを共有します。ある共有されたインスタンスに変更を加えると、そのデータを共有している他のすべてのインスタンスに影響を及ぼすことになります。この効果を生み出すメカニズムが現在のシーンやリソースにとってローカルな場合には、これはインスタンス化と呼ばれます。現在のシーンやリソースにとって外部のものである場合には、外部参照と呼ばれます。

属性

<instance geometry>要素には、以下の属性があります。

url xs:anyURL

url は必須の属性で、インスタンス化するオブジェクトの場所を URL で表します。

関連要素

<instance geometry>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 node

子要素 bind material、extra

その他 なし

備者

url 属性は、#文字で始まる相対 URL の断片的な識別子を利用してローカルなインスタンスへの参照を表します。断片的な識別子は、インスタンス化する要素の ID で構成された XPointer のショートハンド・ポインタです。

url 属性で他のリソースへのパスを含む外部参照を行う際には、絶対 URL もしくは相対 URL を使います。 <bind_material>要素は、マテリアルシンボルをマテリアルインスタンスにバインドするのに利用します。この要素で、単一のジオメトリを、毎回、異なった表示でシーン中に複数インスタンス化することができます。

以下は、「cube」という ID で識別されたローカル定義の<geometry>要素を参照する<instance_geometry>要素の例です。このインスタンスは、オリジナルのオブジェクトの位置から少し平行移動されたものとなります。

instance_light

概要

<instance light>要素は、COLLADA 光源リソースのインスタンス化を宣言するためのものです。

コンセプト

オブジェクトの実際のデータ表現が一度しか保存されない場合もありますが、オブジェクトを複数シーン中で表すことができます。オブジェクトは、表示されるたびに、さまざまな方法で変形される場合があります。シーン中での個々の表示は、オブジェクトのインスタンスと呼ばれます。 それぞれのオブジェクトのインスタンスは、ユニークであったり、他のインスタンスと同じデータを共有する場合があります。ユニークなインスタンスはオブジェクトデータの独自のコピーを持ち、独立して操作することが可能です。ユニークではない(共有されている)インスタンスは、そのオブジェクトの他のインスタンスとデータの一部またはすべてを共有します。ある共有されたインスタンスに変更を

加えると、そのデータを共有している他のすべてのインスタンスに影響を及ぼすことになります。 この効果を生み出すメカニズムが現在のシーンやリソースにとってローカルな場合には、これはインスタンス化と呼ばれます。現在のシーンやリソースにとって外部のものである場合には、外部参照と呼ばれます。

属性

<instance light>要素には、以下の属性があります。

url xs:anyURL

url は必須の属性で、インスタンス化するオブジェクトの場所を URL で表します。

関連要素

<instance light>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数スキーマ中に定義された要素の数

親要素 node 子要素 extra その他 なし

備考

url 属性は、#文字で始まる相対 URL の断片的な識別子を利用してローカルなインスタンスへの参照を表します。断片的な識別子は、インスタンス化する要素の ID で構成された XPointer のショートハンド・ポインタです。

url 属性で他のリソースへのパスを含む外部参照を行う際には、絶対 URL もしくは相対 URL を使います。 COLLADA では、インスタンス同士でデータを共有する方法を規定していません。このデータ共有の方法 は、ランタイム時のアプリケーションに任されています。

以下は、「light」という ID で識別されたローカル定義の clight>要素を参照する <instance_light>要素の例です。このインスタンスは、オリジナルのオブジェクトの位置から少し 平行移動されたものとなります。

instance_node

概要

<instance node>要素は、COLLADA ノードリソースのインスタンス化を宣言するためのものです。

コンセプト

オブジェクトの実際のデータ表現が一度しか保存されない場合もありますが、オブジェクトを複数シーン中で表すことができます。オブジェクトは、表示されるたびに、さまざまな方法で変形される場合があります。シーン中での個々の表示は、オブジェクトのインスタンスと呼ばれます。 それぞれのオブジェクトのインスタンスは、ユニークであったり、他のインスタンスと同じデータを共有する場合があります。ユニークなインスタンスはオブジェクトデータの独自のコピーを持ち、独立して操作することが可能です。ユニークではない(共有されている)インスタンスは、そのオブジェクトの他のインスタンスとデータの一部またはすべてを共有します。ある共有されたインスタンスに変更を加えると、そのデータを共有している他のすべてのインスタンスに影響を及ぼすことになります。

この効果を生み出すメカニズムが現在のシーンやリソースにとってローカルな場合には、これはインスタンス化と呼ばれます。現在のシーンやリソースにとって外部のものである場合には、外部参照と呼ばれます。

属性

<instance node>要素には、以下の属性があります。

url xs:anyURL

url は必須の属性で、インスタンス化するオブジェクトの場所を URL で表します。

関連要素

<instance node>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数スキーマ中に定義された要素の数

親要素 node 子要素 extra その他 なし

備考

url 属性は、#文字で始まる相対 URL の断片的な識別子を利用してローカルなインスタンスへの参照を表します。断片的な識別子は、インスタンス化する要素の ID で構成された XPointer のショートハンド・ポインタです。

url 属性で他のリソースへのパスを含む外部参照を行う際には、絶対 URL もしくは相対 URL を使います。 <extra>要素は、任意の数だけ利用できます。

以下は、「myNode」という ID で識別されたローカル定義の< node>要素を参照する $< instance_node>$ 要素の例です。このインスタンスは、オリジナルのオブジェクトの位置から少し平行移動されたものとなります。

instance_visual_scene

概要

<instance_visual_scene>要素は、COLLADA の visual_scene リソースのインスタンス化を宣言 するためのものです。

コンセプト

オブジェクトの実際のデータ表現が一度しか保存されない場合もありますが、オブジェクトを複数シーン中で表すことができます。オブジェクトは、表示されるたびに、さまざまな方法で変形される場合があります。シーン中での個々の表示は、オブジェクトのインスタンスと呼ばれます。それぞれのオブジェクトのインスタンスは、ユニークであったり、他のインスタンスと同じデータを共有する場合があります。ユニークなインスタンスはオブジェクトデータの独自のコピーを持ち、独立して操作することが可能です。ユニークではない(共有されている)インスタンスは、そのオブジェクトの他のインスタンスとデータの一部またはすべてを共有します。ある共有されたインスタンスに変更を加えると、そのデータを共有している他のすべてのインスタンスに影響を及ぼすことになります。この効果を生み出すメカニズムが現在のシーンやリソースにとってローカルな場合には、これはインスタンス化と呼ばれます。現在のシーンやリソースにとって外部のものである場合には、外部参照と呼ばれます。

属性

<instance visual scene>要素には、以下の属性があります。

url xs:anyURL

url は必須の属性で、インスタンス化するオブジェクトの場所を URL で表します。

関連要素

<instance visual scene>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 scene 子要素 extra その他 なし

備者

url 属性は、#文字で始まる相対 URL の断片的な識別子を利用してローカルなインスタンスへの参照を表します。断片的な識別子は、インスタンス化する要素の ID で構成された XPointer のショートハンド・ポインタです。

url 属性で他のリソースへのパスを含む外部参照を行う際には、絶対 URL もしくは相対 URL を使います。

以下は、「vis_scene」という ID で識別されたローカル定義の<visual_scene>要素を参照する <instance_visual_scene>要素の例です。

```
<library_visual_scenes>
  <visual_scene id="vis_scene"/>
</library_visual_scenes>
<scene>
  <instance_visual_scene url="#vis_scene"/>
</scene>
```

int_array

概要

<int array>要素は、整数値を保持する同種の配列用の保存場所を宣言するためのものです。

コンセプト

<int_array>要素は、COLLADA スキーマで汎用的に利用されるデータ値を保存します。配列そのものは強く型付けされますが、セマンティックスをともないません。単純に、整数値の並びを記述します。

属性

<int array>要素には、以下の属性があります。

count xs:nonNegativeLong

count は必須の属性で、配列中の値の数を表します。

id はオプションの属性で、この要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値はインスタンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

minInclusive はオプションの属性で、配列に保持可能な最も小さい整数値を表します。デフォルト値は-2147483648です。

maxInclusive はオプションの属性で、配列に保持可能な最も大きい整数値を表します。デフォルト値は 2147483647 です。

関連要素

<int array>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 source

子要素 子要素はありません

その他なし

備考

<int_array>要素には、整数値のリストが含まれます。これらの値は、<source>要素へのデータのレポジトリとして利用されます。

例

以下は、5つの整数値の並びを表した<int array>要素の例です。

```
<int_array id="integers" name="myInts" count="5">
    1 2 3 4 5
</int array>
```

joints

概要

<joints>要素は、ジョイントノードと属性データとの関連付けを宣言するためのものです。

コンセプト

<joints>要素は、ジョイント、スケルトン、ノードを属性データと関連付けます。COLLADA では、ス ケルトン中の各ジョイントのバインド逆行列(影響力)で指定します。

属性

<joints>要素に属性はありません。

関連要素

<joints>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 skin

子要素 input, extra

その他 なし

備考

<input>要素は、少なくとも2つ指定しなければならず、その1つでは JOINT セマンティックスを指 定していなければなりません。

JOINT セマンティックスが指定された入力で参照されている<source>には、ジョイントノードを識別 するための sid が指定された<Name array>が含まれているべきです。この sid は、個々のインスタ ンスが個別にアニメーション化される際に、スキンコントローラが複数回インスタンス化されるように、 IDREF の代わりに利用されます。

<input>要素が<joints>要素の子である場合、<input>要素にidx 属性を指定してはなりません。 <extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 子要素の順番は、<input>、<extra>でなければなりません。

例

以下は、ジョイントとそれぞれのバインド位置を関連付ける<joints>要素の例です。

```
<skin>
  <joints>
   <input semantic="JOINT" source="#joints"/>
   <input semantic="INV BIND MATRIX" source="#inv-bind-matrices"/>
 </joints>
</skin>
```

library_animations

概要

は animations>要素は、animation 要素のモジュールを宣言するためのものです。

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなります。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中に保存しておくことができます。

属性

は、以下の属性があります。

id はオプションの属性で、colibrary_animation>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。
name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

library animations>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 COLLADA

子要素 asset、animation、extra

その他 なし

備考

<asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。
<asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。
<extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。

以下は、は、くlibrary animations>要素の例です。

library_animations>
 <animation/>

</library animations>

library_animation_clips

概要

</l></l></l></l><

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなり ます。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジ ュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中 に保存しておくことができます。

属性

は、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName

id はオプションの属性で、<library animation clips>要素のユニークな識別子を含んだテキス ト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

clibrary animation clips>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 COLLADA

子要素 asset, animation clip, extra

その他 なし

備考

d animation clip>要素には、1つ以上の<animation clip>要素が記述できます。 <asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 <extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。

例

以下は、は、くlibrary animation clips>要素の例です。

```
library animation clips>
  <animation clip/>
</library animation clips>
```

library_cameras

概要

camera 要素のモジュールを宣言するためのものです。

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなります。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中に保存しておくことができます。

属性

cameras>要素には、以下の属性があります。

id はオプションの属性で、cameras>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

cameras>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 COLLADA

子要素 asset、camera、extra

その他 なし

備考

例

以下は、は、cameras>要素の例です。

library controllers

概要

torary controllers>要素は、controller要素のモジュールを宣言するためのものです。

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなり ます。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジ ュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中 に保存しておくことができます。

属性

clibrary controllers>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName

id はオプションの属性で、<library controllers>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字 列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

controllers>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 COLLADA

子要素 asset, controller, extra

その他 なし

備考

controllers>要素には、1つ以上の<controller>要素が記述できます。 <asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 <extra>要素は、まったく指定しないか、任意の数だけ記述できます。

例

以下は、は、くlibrary controllers>要素の例です。

library controllers> <controller/> </library_controllers>

library_effects

概要

clibrary effects>要素は、effect 要素のモジュールを宣言するためのものです。

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなります。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中に保存しておくことができます。

属性

clibrary effects>要素には、以下の属性があります。

id はオプションの属性で、clibrary_effects>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

clibrary effects>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 COLLADA

子要素 asset、effect、extra

その他 なし

備考

例

以下は、は、くlibrary effects>要素の例です。

<library_effects>
 <effect/>
</library_effects>

library_force_fields

概要

d 要素のモジュールを宣言するためのものです。

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなり ます。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジ ュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中 に保存しておくことができます。

属性

clibrary force fields>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName

id はオプションの属性で、<library force fields>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文 字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

library force fields>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素

子要素 asset, force field, extra

その他 なし

備考

library force field>要素には、1つ以上の<force field>要素が記述できます。 <asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 <extra>要素は、まったく指定しないか、任意の数だけ記述できます。

例

以下は、は、くlibrary force fields>要素の例です。

```
library_force_fields>
  <force field/>
</library_force_fields>
```

library_geometries

概要

description of the control of th

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなります。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中に保存しておくことができます。

属性

library geometries>要素には、以下の属性があります。

id はオプションの属性で、clibrary_geometries>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。
name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 COLLADA

子要素 asset、geometry、extra

その他 なし

備考

geometries>要素には、1つ以上の<geometry>要素が記述できます。<asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。<extra>要素は、まったく指定しないか、任意の数だけ記述できます。

例

以下は、は、くlibrary geometries>要素の例です。

library_images

概要

するためのものです。

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなり ます。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジ ュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中 に保存しておくことができます。

属性

clibrary images>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName

id はオプションの属性で、clibrary images>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。 この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

clibrary images>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 COLLADA

子要素 asset, image, extra

その他 なし

備考

library images>要素には、1つ以上の<image>要素が記述できます。 <asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 <extra>要素は、まったく指定しないか、任意の数だけ記述できます。

例

以下は、は、はmages>要素の例です。

```
library images>
  <image/>
</library images>
```

library_lights

概要

library lights>要素は、light 要素のモジュールを宣言するためのものです。

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなります。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中に保存しておくことができます。

属性

は、以下の属性があります。

id はオプションの属性で、colibrary_lights>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。
name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

library lights>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 COLLADA

子要素 asset、light、extra

その他 なし

備考

例

以下は、は、はghts>要素の例です。

```
<library_lights>
    lights/>
</library_lights>
```

library_materials

概要

するためのものです。

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなり ます。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジ ュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中 に保存しておくことができます。

属性

clibrary materials>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName

id はオプションの属性で、<library materials>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列 です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

は materials>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 COLLADA

子要素 asset, material, extra

その他 なし

備考

library materials>要素には、1つ以上の<material>要素が記述できます。 <asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 <extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。

例

以下は、は、くlibrary materials>要素の例です。

library materials> <material/> </library materials>

library_nodes

概要

library nodes>要素は、node 要素のモジュールを宣言するためのものです。

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなります。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中に保存しておくことができます。

属性

くlibrary nodes>要素には、以下の属性があります。

id はオプションの属性で、clibrary_nodes>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。
name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

library nodes>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 COLLADA

子要素 asset、node、extra

その他 なし

備考

例

以下は、は、nodes>要素の例です。

```
library_nodes>
  <node/>
</library_nodes>
```

library_physics_models

概要

library physics models>要素は、physics model 要素のモジュールを宣言するためのもので

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなり ます。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジ ュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中 に保存しておくことができます。

属性

clibrary physics models>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName

id はオプションの属性で、<library physics models>要素のユニークな識別子を含んだテキスト 文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

library physics models>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 COLLADA

子要素 asset, physics model, extra

その他 なし

備考

library physics models>要素には、1つ以上の<physics model>要素が記述できます。 <asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 <extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。例 以下は、は、くlibrary physics models>要素の例です。

library physics models> <physics model/> </library physics models>

library_physics_scenes

概要

zoenes>要素は、physics_scene 要素のモジュールを宣言するためのものです。

コンセプト

データセットがより大きくなり複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなります。そういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジュールセットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中に保存しておくことができます。

属性

clibrary physics scenes>要素には、以下の属性があります。

id はオプションの属性で、clibrary_physics_scenes>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。
name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

library physics scenes>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 COLLADA

子要素 asset、physics scene、extra

その他なし

備考

library_physics_scenes>要素には、1つ以上の<physics_scene>要素が記述できます。
<asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。
<extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。例以下は、library physics scenes>要素の例です。

```
clibrary_physics_scenes>
    <physics_scene/>
</library_physics_scenes>
```

library visual scenes

概要

library visual scenes>要素は、visual scene 要素のモジュールを宣言するためのものです。

コンセプト

データセットが大きく複雑化するのにともない、単一のコンテナ中で操作するのが難しくなります。そ ういった複雑さに対処するための1つの方法は、何らかの条件でデータをいくつか小さなモジュールセ ットに分割することです。そういったモジュールセットを、ライブラリとして別のリソース中に保存し ておくことができます。

属性

clibrary visual scenes>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName

id はオプションの属性で、<library visual scenes>要素のユニークな識別子を含んだテキスト 文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

library visual scenes>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素

子要素 asset, visual scene, extra

その他 なし

備考

visual scenes>要素には、1つ以上の<visual scene>要素が記述できます。 <asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 <extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。

例

以下は、は、くlibrary visual scenes>要素の例です。

```
library visual scenes>
  <visual scene/>
</library visual scenes>
```

light

概要

すきまするためのものです。

コンセプト

光源は、視覚的なシーンを照らす照明の源を表します。

光源は、シーン内に配置することも、無限に遠くに設定することもできます。

光源にはさまざまな属性があり、各種のパターンや周波数で光を放射します。

環境光源は、あらゆる方向から光を放射します。環境光源の輝度は減衰しません。

ポイント光源は、空間中の既存の位置から全方向に光を放射します。ポイント光源の輝度は、光源までの距離が大きくなるのにともなって減衰します。

平行光源は、空間中の無限に遠くにある既存の方向から特定の方向に光を放射します。平行光源の輝度は減衰しません。

スポット光源は、空間中の既存の位置から特定の方向に光を放射します。スポット光源からの光は、円 錐形に放射されます。放射角が光源の方向から広がるのにともなって、輝度が減衰します。また、スポット光源の輝度は、光源からの距離が大きくなるのにともなって減衰します。

属性

は、以下の属性があります。

id はオプションの属性で、clight>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

は対します。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 library_lights

子要素 asset、technique common、technique、extra

その他なし

備考

<asset>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。

<technique_common>要素が 1 つだけ含まれていなければなりません。また<light>の子として、<technique_common>要素には、<ambient>、<directional>、<point>、または<spot>の要素が 1 つだけ含まれていなければなりません。

<technique>要素は任意の数だけ指定できます。

<extra>要素は任意の数だけ指定できます。

例

以下は、夕暮れを描写するためにシーン中にインスタンス化され、さらに回転される平行光源を表す

```
<library_lights>
  d="sun" name="the-sun">
   <technique_common>
     <directional>
       <color>1.0 1.0 1.0</color>
     </directional>
   </technique_common>
 </light>
</library lights>
<library_visual_scenes>
  <visual_scene>
   <node>
     <instance_light url="#sun"/>
     <rotate>1 0 0 -10</rotate>
   </node>
  </visual_scene>
</library_visual_scenes>
```

lines

概要

コンセプト

<1ines>要素は、頂点の属性を結び付けて個々の直線にするために必要な情報を提供します。頂点配列の情報は<mesh>要素の属性配列として別に提供され、<1ines>要素でインデックス参照します。メッシュで記述された各直線には、頂点が2つずつあります。最初の直線は1番目と2番目の頂点から作成され、2番目の直線は、3番目と4番目の頂点から作成されます。

属性

要素には、以下の属性があります。

name xs:NCName

material xs:NCName

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

count は必須の属性で、線のプリミティブの数を表します。

material はオプションの属性で、マテリアルのシンボルを宣言します。シンボルは、インスタンス化の時点でマテリアルとバインドされます。material 属性を指定しなかった場合、ライティングやシェーディングの結果はアプリケーションに依存します。

関連要素

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 mesh、convex_mesh 子要素 input、p、extra

その他 なし

備考

素の最初のインデックスは、それぞれの順番に応じて別の入力を参照することになります。素の最初のインデックスは、オフセットが0のすべての入力を参照し、2番目のインデックスはオフセットが1のすべての入力を参照します。線の各頂点は、それぞれの入力への1つのインデックスで構成されます。それぞれの入力を利用した後、その次のインデックスはオフセットが0の入力を再度参照し、新しい頂点を開始することになります。

<input>要素は、全く指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。

>要素は、最大でも1つだけしか記述することができません。

子要素の並びは、<input>、、<extra>の順番でなければなりません。

<extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。

例

以下は、syspanの表表の例です。3 つの<input>要素を 1 つにまとめてあり、最後 2 つの入力では同 じオフセットを利用しています。

```
<mesh>
 <source id="position"/>
 <source id="texcoord"/>
 <vertices id="verts">
   <input semantic="POSITION" source="#position"/>
 </vertices>
  <lines count="1">
   <input semantic="VERTEX" source="#verts" offset="0"/>
     <input semantic="TEXCOORD" source="#texcoord" offset="1"/>
     <input semantic="TEXCOORD" source="#texcoord" offset="1"/>
   0 0 1 1
  </lines>
</mesh>
```

linestrips

概要

コンセプト

<1inestrips>要素は、頂点属性を結び付けて折れ線(ラインストリップ)形式にするために必要な情報を提供します。頂点配列の情報は<mesh>要素の属性配列として別に提供され、<1inestrips>要素でインデックス参照します。メッシュで記述された各ラインストリップは、任意の数の頂点を持ちます。ラインストリップ中の個々の線分は、現在の頂点とその前の頂点から作成されます。

属性

の属性があります。

name xs:NCName

count xs:nonNegativeInteger

material xs:anyURL

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

count は必須の属性で、ラインストリップのプリミティブの数を表します。

material はオプションの属性で、マテリアルのシンボルを宣言します。シンボルは、インスタンス化の時点でマテリアルとバインドされます。material 属性を指定しなかった場合、ライティングやシェーディングの結果はアプリケーションに依存します。

関連要素

s大は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 mesh、convex_mesh 子要素 input、p、extra

備考

とは、p 要素の並び (p は primitive の頭文字です) が含まれます。それぞれの p 要素は、任意の数の折れ線の線分の頂点属性を記述します。

<要素中の各インデックスは、それぞれの順番に応じて別の入力を参照することになります。<p>素の最初のインデックスは、オフセットが0のすべての入力を参照し、2番目のインデックスはオフセットが1のすべての入力を参照します。線の各頂点は、それぞれの入力への1つのインデックスで構成されます。それぞれの入力を利用した後、その次のインデックスはオフセットが0の入力を再度参照し、新しい頂点を開始することになります。

<input>要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。

<要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。

子要素の並びは、<input>、、<extra>の順番でなければなりません。

<extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。

例

以下は、3 つの頂点属性を持ち、すべての入力で同じオフセットを利用している 2 つの線分を表した

lookat

概要

<lookat>要素には、カメラの照準を定めるのに適した位置や方向の変換情報が含まれます。<lookat>要素には、以下を記述する3つの数学的なベクトルが含まれます。

- 1. オブジェクトの位置
- 2. 注視点の位置
- 3. 上方向

コンセプト

シーン中のカメラやオブジェクトの位置・方向を行列で指定すると、煩雑になりがちです。そのため、lookat 変換を利用すれば、視点や注視点や方向を直観的に指定することができます。

属性

<lookat>要素には、以下の属性があります。

sid xs:NCName

sid はオプションの属性で、この要素のサブ識別子を含んだテキスト文字列値です。この値は、親要素の範囲内でユニークでなければなりません。

関連要素

<lookat>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 node

子要素 子要素はありません

その他なし

備考

<lookat>要素には、9 個の浮動小数点の値のリストが含まれます。OpenGL®ユーティリティ(GLU)の実装と同じく、これらの値で以下の3つのベクトルを構成します。

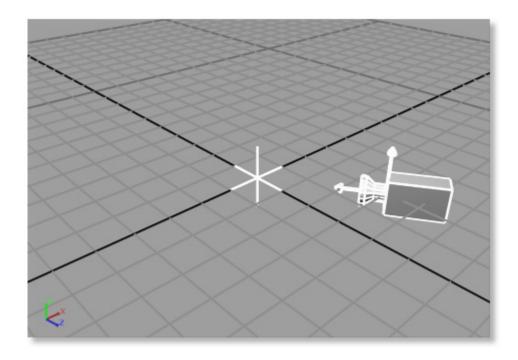
- 1. 視点を指定する: Px、Py、Pz
- 2. 注視点を指定する: Ix、Iy、Iz
- 3. 上方向を指定する: UPx、UPy、UPz

等価ビュー行列を計算する際、視点は原点、注視点は Z 軸のマイナス方向に割りあてられます。また、上方向の軸は、視平面 Y 軸のプラス方向に割り当てられます。 値はどれもローカルのオブジェクト座標で指定します。

例

以下は、[10,20,30]にローカル座標の原点をおき、Y軸方向を上とする<lookat>要素の例です。

図 3-1 <lookat>要素:3次元の十字線で注視点の位置を表しています。



material

概要

<material>要素は、ジオメトリオブジェクトの視覚的な外観を記述するためのものです。

コンセプト

コンピュータグラフィックスでは、ジオメトリオブジェクトに対して、そのマテリアル (材料) のプロパティを記述する各種のパラメータを指定することができます。このマテリアルのプロパティが、最終的に作成される物体の視覚的な外観を表すレンダリング時のパラメータになります。

実際のマテリアルのパラメータは、利用するグラフィックス・レンダリングシステムに依存します。固定機能のグラフィックスパイプラインでは、Phong シェーディングのような定義済みの照明モデルを行うためのパラメータが必要となります。これらのパラメータには、環境光、拡散反射、正反射率などが含まれます。

これに対して、プログラマブル・グラフィックスパイプラインでは、マテリアルのパラメータをプログラマが定義します。これらのパラメータで、頂点プログラムやピクセルプログラムで定義されているレンダリングアルゴリズムに情報を与えることになります。

属性

<material>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID name xs:NCName

id はオプションの属性で、<material>要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。
name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

<material>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 library materials

子要素 asset、instance effect、extra

その他 なし

備考

 $\langle asset \rangle$ 要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 $\langle instance\ effect \rangle$ 要素を1つだけ記述できます。

<extra>要素は任意の数だけ指定できます。

子要素の並びは、<asset>、<instance effect>、<extra>でなければなりません。

例

以下は、<material>要素の例です。このマテリアルは、library_materials>要素に含まれています。

```
type="MATERIAL">
  <material name="Blue" id=" Blue">
   <instance_effect url="#phongEffect">
     <setparam ref="AMBIENT">
       <float3>0.0 0.0 0.1</float3>
     </setparam>
     <setparam ref="DIFFUSE">
       <float3>0.15 0.15 0.1</float3>
     </setparam>
     <setparam ref="SPECULAR">
       <float3>0.5 0.5 </float3>
     </setparam>
     <setparam ref="SHININESS">
       <float3>16.0</float3>
     </setparam>
      </instance_effect>
  </material>
</library>
```

matrix

行列変換は、座標系中の各点、もしくは座標系そのものに対する数学的な変更を具体化するものです。

概要

<matrix>要素には、浮動小数点値の4×4行列が含まれています。

コンセプト

コンピュータグラフィックスでは、データの変換に線形代数のテクニックを利用します。3次元座標系の一般的な形式は、 4×4 の行列式で表します。これらの行列式は、基準座標系のつながりを表すために、シーングラフを介して階層構造化することが可能です。

COLLADA での行列は、数学的には「列行列」です。これらの行列は、人間が読みやすいように行優先順序で表します。詳しくは、以下の例を参照してください。

属性

<matrix>要素には、以下の属性があります。

sid xs:NCName

sid はオプションの属性で、この要素のサブ識別子を含んだテキスト文字列値です。この値は、親要素の範囲内でユニークでなければなりません。

関連要素

<matrix>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 node

子要素 子要素はありません

その他 なし

備考

<matrix>要素には、16 個の浮動小数点値のリストが含まれています。これらの値は、行列合成に適した4×4の列順の行列に構成されます。

例

以下は、X 軸方向に 2 単位、Y 軸方向に 3 単位、Z 軸方向に 4 単位の平行移動を行う変換行列を表した <matrix>要素の例です。

<matrix>

1.0 0.0 0.0 2.0 0.0 1.0 0.0 3.0 0.0 0.0 1.0 4.0 0.0 0.0 0.0 1.0

</matrix>

mesh

概要

<mesh>要素には、基本的なメッシュのジオメトリを記述するのに必要な頂点とプリミティブの情報が 含まれています。

コンセプト

メッシュは、主に頂点とプリミティブの情報を含んだジオメトリを記述する際の一般的な形式です。 頂点情報というのは、メッシュ面上の特定の点に結び付けられた属性の集合です。それぞれの頂点には、 以下のような属性データが含まれます。

- 頂点の位置
- 頂点のカラー
- 頂点の法線
- 頂点のテクスチャ座標

またメッシュには、メッシュの幾何学的な形状を作成するために頂点をどのように組織化するのかとい う情報も含まれます。メッシュの頂点は、ジオメトリプリミティブ(polygons、triangles、 lines など)の集合として組織化されます。

属性

<mesh>要素には、属性はありません。

関連要素

<mesh>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素

子要素 source, vertices, lines, linestrips, polygons, polylist,

triangles, trifans, tristrips

その他 なし

備考

<source>要素は、<mesh>の最初の要素として、1 つ以上記述されていなければなりません。 <source>要素は、メッシュの頂点データの集合を提供することになります。

<vertices>要素は、1 つだけ記述されていなければなりません。<vertices>要素は、メッシュの頂 点属性を記述して、その固有のトポロジーを確立することになります。

頂点データから形成されるジオメトリプリミティブを記述するために、<mesh>要素には、以下のプリ ミティブ要素をまったく指定しないか、もしくは任意の数だけ記述することができます。

- 直線プリミティブを含む1ines>要素
- ラインストリップ・プリミティブを含む<linestrips>要素
- 穴を持つことが出来るポリゴン・プリミティブを含む<polygons>要素
- 穴を持てないポリゴン・プリミティブを含む<polylist>要素
- 三角形プリミティブを含む<triangles>要素

- 三角形ファン・プリミティブを含む<trifans>要素
- 三角形ストリップ・プリミティブを含む<tristrips>要素

<mesh>要素中の<vertices>要素は、メッシュの頂点を記述するために利用されます。ポリゴンや三角形などは、直接位置を記述するのではなく、頂点に対するインデックスを持ちます。メッシュの頂点は、semantic 属性の値が POSITION である<input>要素を最低でも1つは含んでいなければなりません。

テクスチャ座標に対しては、COLLADA の右手座標系が適用されます。したがって、[0,0]の ST 座標は、テキスチャ画像が 2 次元テクスチャ・ビュアー/エディタにロードされた際に、テキスチャ画像の左下のテクセルにマッピングされます。

<extra>要素は、0個以上記述することができます。

子要素の並びは、<source>、<vertices>、プリミティブ要素、<extra>という順番でなければなりません(プリミティブ要素の箇所は、<lines>、<linestrips>、<polygons>、<polylist>、<triangles>、<trifans>、<tristrips>の任意の組み合わせを意味します)。

例

以下は、指定可能な属性を持った空の<mesh>要素の例です。

<mesh> <source id="box-Pos"/> <vertices id="box-Vtx"/> </mesh>

morph

概要

<morph>要素は、固定メッシュの複数セットをブレンドするのに必要なデータを記述するためのもの です。ブレンド可能な個々のメッシュ(モーフィングのターゲット)を指定する必要があります。また、 それらのメッシュをどのように組み合わせるのか指定するには、method 属性を利用します。さらに、 ブレンド操作の基準、あるいは参照用として、いくつかの方式で利用される「ベースメッシュ」もあり ます(詳しくは、以下の説明を参照してください)。

コンセプト

一般に、メッシュをモーフィングした結果は、それぞれのメッシュ(静的メッシュやスキニングなど) を線形に組み合わせたものとなります。これらの入力メッシュは、モーフィングターゲットと呼ばれま す。大きな制約として、これらのモーフィングターゲットは(モーフィングターゲットが違う位置にあ る場合でも)、どれも同じ頂点セットを持たなければなりません。モーフィングターゲットを組み合わ せた場合、それらの<vertices>要素にあるデータだけが補間されます。したがって、すべてのモーフ ィングターゲットの<vertices>要素は、同じ構造でなければなりません。<vertices>要素の中にな い頂点属性に対しては、ベースメッシュの頂点属性がそのまま利用され、他のモーフィングターゲット 中の頂点属性は無視されます。

<morph>要素は、ベースメッシュ、他のメッシュのセット、ウェイトのセット、さらに、これらを組 み合わせる方法として指定します。モーフィングターゲットを組み合わせるための方法か各種あり、ど れを利用するのかを method 属性で指定します。以下の 2 つの方法が一般的です。

• NORMALIZED

```
(Target1, Target2, ...) * (w1, w2, ...) = (1-w1-w2-...) * BaseMesh + w1*Target1
+ w2*Target2 + ...
```

• RELATIVE

```
(Target1, Target2, ...) + (w1, w2, ...) = BaseMesh + w1 * Target1 + w2 *
Target2 + ...
```

属性

<morph>要素には、以下の属性があります。

source xs:anyURL

method MorphMethodType

source は必須の属性で、ベースメッシュを表します。

method 属性では、どのブレンド方法を利用するのかを指定します。指定可能な値は、NORMALIZED と RELATIVE です。method 属性を指定しなかった場合のデフォルト値は NORMALIZED です。

関連要素

<morph>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 controller

子要素 source、targets、extra

その他 なし

備考

<source>要素は、少なくとも2つ記述しなければなりません。 <targets>要素は、1つだけ記述しなければなりません。 <extra>要素は、任意の数だけ記述できます。

例

以下は、空の<morph>要素の例です。

Name_array

概要

<Name array>要素は、シンボル名の同質の配列の保存場所を宣言するためのものです。

コンセプト

<Name array>要素は、COLLADA スキーマで汎用的に利用されるデータ値を保存します。配列そのもの は強く型付けされますが、セマンティックスをともないません。単純に、XML の名前値の並びとして記 述します。

属性

<Name array>要素には、以下の属性があります。

count xs:unsignedLong

id xs:ID name xs:NCName

count は必須の属性で、配列中の値の数を表します。

id はオプションの属性で、この要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値はインス タンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

<Name array>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 source

子要素 子要素はありません

その他 なし

備考

<Name array>要素には、XML の名前値のリストが含まれます。これらの値は<source>要素へのデー タのレポジトリとして利用されます。

例

以下は、4つの名前値の並びを表した<Name array>要素の例です。

```
<Name array id="names" name="myNames" count="4">
 Nodel Node2 Joint3 WristJoint
</Name_array>
```

node

ノードは、シーン中の各要素の階層構造的な関係を具体化するものです。

概要

<node>要素は、シーン中の一部を表すために利用します。1 つのノードは、シーングラフの枝上にある特定の点を表しています。実際には、<node>要素はシーングラフ全体の部分グラフのルートとなります。

コンセプト

シーングラフの概念には、アーク(弧)とノード(節)があります。ノードはグラフ中にある情報のポイントで、アークはノードを他のノードと結び付けます。さらに、ノードは内部ノード(枝)と外部ノード(葉)に分かれます。本ドキュメントでは、内部ノードを表す場合に「ノード」という用語を利用しています。また、アークはパス(路)とも呼ばれます。

属性

<node>要素には、以下の属性があります。

type JOINT **** tit** NODE layer ListOfNames

id はオプションの属性で、<node>要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。この値はインスタンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、<node>要素の名前を含んだテキスト文字列です。

sid はオプションの属性で、この要素のサブ識別子を含んだテキスト文字列値です。この値は、親要素の範囲内でユニークでなければなりません。

type はオプションの属性で、<node>要素のタイプを表します。デフォルト値は NODE です。

layer はオプションの属性で、そのノードが属しているレイヤの名前を表します。たとえば、「foreground glowing」という値は、ノードが「foreground」レイヤと「glowing」レイヤの両方に属していることを意味します。デフォルト値は空で、ノードがどのレイヤにも属していないことを意味します。

関連要素

<node>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 library nodes、node、visual scene

子要素 asset、lookat、matrix、rotate、scale、skew、translate、

instance camera, instance controller, instance geometry,

instance light, instance node, node, extra

その他 なし

備考

<node>要素は、シーングラフ・トポロジーの基礎となります。そのため、<node>要素には、<node> 要素自身を含め、さまざまな子要素が記述できます。

要素	解説
node	階層構造を再帰的に定義できます
extra	補足情報が定義できます
asset	アセット管理情報を表現できます
instance camera	カメラオブジェクトをインスタンス化することができます
instance_controller	コントローラオブジェクトをインスタンス化することができます
instance_geometry	ジオメトリオブジェクトをインスタンス化することができます
instance light	光源オブジェクトをインスタンス化することができます
instance_node	他のノードの階層構造をインスタンス化することができます

<node>要素は、それぞれの変換子要素が記述されている順番で合成されるコンテキストを表します。 他の子要素には、<node>要素の範囲内で累積された変換が等しく適用されます。つまり、変換要素は <node>要素の座標系を変換することになります。数学的に言うと、変換要素はそれぞれ行列に変換さ れ、指定された順序で右から掛け合わされ、その積によって座標系が変換されることになります。 それぞれの子要素の並びは、<asset>、変換要素の任意の組み合わせ、<instance camera>、 <instance controller>, <instance geometry>, <instance light>, <instance node>, <node>、<extra>の順番でなければなりません(変換要素というのは、<lookat>、<matrix>、 <rotate>、<scale>、<skew>、<translate>です)。

例

以下は、2 つの<node>要素を持った<scene>要素のアウトラインを示した例です。2 つのノードの名 前は、それぞれ「earth」と「sky」です。

```
<scene>
  <node name="earth">
  </node>
  <node name="sky">
  </node>
</scene>
```

optics

概要

<optics>要素は、画像を画像センサの上に投影するカメラに付いた装置を表すためのものです。

コンセプト

光学系(optics)は、1つ以上の光学系要素で構成されます。光学系要素は、通常、光の経路をどのように変更するのかによってカテゴリ化されます。

- 反射要素:鏡など(ニュートン式望遠鏡の凹面主鏡やクロム・ボールなどで、環境マップを取り 込むために利用されます)。
- 屈折要素:レンズやプリズムなど。

特定のカメラ光学系では、これらを複雑に組合せたものが内蔵されることがあります。たとえば、シュミット式望遠鏡には凹面レンズと凹面主鏡の両方と、さらに接眼部のレンズも含まれています。可変焦点の「ズームレンズ」には、実際には 11 枚以上のレンズと可変絞り(アイリス絞り)が含まれることがあります。

コンピュータグラフィックスで一般に利用されている「透視投影」カメラモデルは、「ズームレンズ」 の単純な近似で、無限に小さな絞りと(レンズ関連の値である焦点距離の代わりに)直接指定された視 野を持ちます。

関連要素

<optics>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 camera

子要素 technique common、technique、extra

その他 なし

備考

共通プロファイルでは<perspective>と<orthographic>の光学タイプを定義しており、それ以外のoptics>要素のタイプは、プロファイル固有のテクニックで指定されていなければなりません。

例

以下は、視野角 45 度でのシーンの透視図を記述した<camera>要素の例です。

orthographic

概要

<orthographic>要素は、正投影カメラの視野を記述するためのものです。

コンセプト

正投影というのは、2 次元の面上に 3 次元シーンを描画するための方法です。正投影では、オブジェク トの明確なサイズはカメラからの距離に依存しません。

属性

<orthographic>要素に属性はありません。

関連要素

<orthographic>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 technique common

子要素 xmag, ymag, aspect ratio, znear, zfar

その他 なし

備考

<orthographic>要素は<camera><optics>の下の<technique common>の中にだけ記述できます。 <orthographic>要素には、1 つの<xmag>要素、1 つの<ymag>要素、<xmag>と<ymag>の両方の要 素、もしくは<xmag>と<ymag>のどちらかと、もしくは<aspect ratio>要素が含まれていなければ なりません。これらの要素は、カメラの視野を記述するためのものです。

<aspect ratio>要素が指定されていない場合、アスペクト比は、<xmag>または<ymag>の要素と、 現在のビューポートから計算されます。

<mag>要素には、ビューの水平倍率を表す浮動小数点の値が含まれます。また、sid が含まれる場合 もあります。

<ymaq>要素には、ビューの垂直倍率を表す浮動小数点の値が含まれます。また、sid が含まれる場合 もあります。

<aspect ratio>要素には、視野のアスペクト比を表す浮動小数点の値が含まれます。また、sid が 含まれる場合もあります。

<znear>要素は、1 つだけ記述されていなければなりません。<znear>要素には、近方クリッピング プレーンへの距離を表す浮動小数点の値が含まれます。また、sid が含まれる場合もあります。

<zfar>要素は、1 つだけ記述されていなければなりません。<zfar>要素には、遠方クリッピングプレ ーンへの距離を表す浮動小数点の値が含まれます。また、sid が含まれる場合もあります。

例

以下は、標準的なビュー(拡大・縮小なし、標準のアスペクト比)を指定している<orthographic> 要素の例です。

<orthographic>

<xmag sid="animated zoom">1.0</xmag> <aspect ratio>0.1</aspect ratio> $\langle znear \rangle 0.1 \langle znear \rangle$ <zfar>1000.0</zfar>

</orthographic>

param

概要

<param>要素は、親要素のパラメータに関する情報を宣言するためのものです。

コンセプト

関数形式やプログラム形式では、ユーザが何らかの方法でパラメータ情報を指定できなければなりません。この情報は、関数のパラメータ(引数)データを表します。

マテリアル・シェーダプログラムには、頂点プログラムやピクセルプログラムを表すコードが含まれる場合があります。これらのプログラムでは、状態情報の一部としてパラメータを必要とします。パラメータの基本的な宣言では、パラメータの名前、データ型、値となるデータを記述します。パラメータ名で特定の関数やプログラムを識別することなり、パラメータの型で値の符号化方法を表します。さらに、パラメータの値が実際のデータとなります。

属性

<param>要素には、以下の属性があります。

name xs:NCName
semantic xs:token
type xs:NMTOKEN
sid xs:NCName

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

semantic はオプションの属性で、パラメータの意味をユーザ定義するためのものです。

type は必須の属性で、データ値の型を表します。このテキスト文字列は、アプリケーションで理解可能な形式でなければなりません。

sid はオプションの属性で、この要素のサブ識別子を含むテキスト文字列です。この値は、親要素の範囲内でユニークでなければなりません。

関連要素

<param>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数スキーマ中に定義された要素の数親要素accessor、bind_materialス要素ス要素

子要素 子要素はありません

その他 なし

備考

〈param>要素は、汎用的なデータ制御のためのパラメータを記述します。

例

perspective

概要

<perspective>要素は、透視カメラの視野を記述するためのものです。

コンセプト

透視図というのは、見る人から距離によって決まる物体の相対的な大きさの関係を表します。コンピュ ータグラフィックスでは、3 次元物体を 2 次元の平面上にレンダリングして表示モニタ上に適切な比率 の像を生成するために、透視投影の技法を使います。

属性

<perspective>要素に属性はありません。

関連要素

<perspective>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 technique common

子要素 xfov, yfov, aspect ratio, znear, zfar

その他 なし

備考

<perspective>要素は<camera><optics>の下の<technique common>の中にだけ記述できます。 <perspective>要素には、1 つの<xfov>要素、1 つの<yfov>要素、<xfov>と<yfov>の両方の要素、 もしくは<xfov>と<yfov>のどちらかと<aspect ratio>要素が含まれていなければなりません。こ れらの要素は、カメラの視野を記述するためのものです。

<aspect ratio>要素が指定されていない場合、アスペクト比は、<xfov>または<yfov>の要素と、 現在のビューポートから計算されます。

<ymag>要素には、ビューの垂直倍率を表す浮動小数点の値が含まれます。また、sid が含まれる場合 もあります。

<aspect ratio>要素には、視野のアスペクト比を表す浮動小数点の値が含まれます。また、sid が 含まれる場合もあります。

<znear>要素は、1 つだけ記述されていなければなりません。<znear>要素には、近方クリッピング プレーンへの距離を表す浮動小数点の値が含まれます。また、sid が含まれる場合もあります。

<zfar>要素は、1 つだけ記述されていなければなりません。<zfar>要素には、遠方クリッピングプレ ーンへの距離を表す浮動小数点の値が含まれます。また、sid が含まれる場合もあります。

例

以下は、水平視野角 90 度を指定する<perspective>要素の例です。

<perspective>

<xfov sid="animated zoom">1.0</xfov> <aspect ratio>1.333</aspect ratio> <znear>0.1</znear> <zfar>1000.0</zfar>

</perspective>

point

概要

<point>要素は、ポイント光源を記述するためのものです。

コンセプト

<point>要素は、ポイント光源を記述するために必要なパラメータを宣言します。ポイント光源は、空間中の既存の位置から全方向に光を放射します。ポイント光源の輝度は、光源までの距離が大きくなるのにともなって減衰します。光源の位置は、インスタンス化されるノードの変換によって定義されます。

属性

<point>要素に属性はありません。

関連要素

<point>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 technique common

子要素 color、constant attenuation、linear attenuation、

quadratic attenuation

その他 なし

備考

<point>要素は、<light>要素の下の<technique_common>の子としてだけ指定できます。
<color>要素は、1 つだけ指定しなければなりません。<color>要素には、光源のカラーを指定する 3 つの浮動小数点が含まれます。また、sid 属性が含まれる場合もあります。

特定の距離での光の全体の減衰は、<constant_attenuation>、<quadratic_attenuation>を利用して計算されます。その際、以下の公式が利用されます。

```
\label{eq:alpha} A = {\tt constant\_attenuation} + {\tt Dist} * {\tt linear\_attenuation} + {\tt Dist}^2 * {\tt quadratic\_attenuation}
```

例

以下は、<point>要素の例です。

polygons

概要

<polygons>要素は、<mesh>要素のジオメトリプリミティブと頂点属性の結び付きを宣言するための ものです。

コンセプト

<polygons>要素は、頂点の属性を結び付けて個々のポリゴンを作成するために必要な情報を提供しま す。頂点配列の情報は<mesh>要素の属性配列として別に提供され、<polygons>要素でインデックス 参照します。

記述されたポリゴンは、任意の数の頂点を持ちます。ポリゴンは凸図形であることが理想ですが、凹図 形であってもかまいません。ポリゴンには穴を含めることも可能です。

さまざまな操作で、表面のポイントの正確な方向が必要となります。法線ベクトルでこの方向を部分的 に定義できますが、法線自体の周りの「回転」については不明瞭のままです。この曖昧な回転をなくす 1 つの方法は、同じポイントでの表面の接線を指定することです。座標系の種類がすでにわかっている と仮定すると(たとえば、右手系)、この方法で表面の方向を完全に指定できます。つまり、オブジェ クト空間と表面空間との間の変換を行う 3×3 行列が定義できることになります。

接線と法線で、表面座標系の2つの座標軸(行列の2つの列)を指定します。従法線と呼ばれる3番目 の座標軸は、接線と法線の外積として計算できます。2 つの異なる種類の接線は、以下のようにドキュ メント中で異なる用途と論理的な配置を持つので、COLLADA では、それら 2 つの接線をサポートしてい ます。

- テクスチャ空間の接線: semantic 属性として TEXTANGENT と TEXBINORMAL を記述した <input>要素で指定します。
- 標準の (幾何学的) 接線: semantic 属性として TANGENT と BINORMAL を記述した<input>要 素で指定します。

属性

<polygons>要素には、以下の属性があります。

xs:nonNegativeInteger count

material xs:anyURL

count は必須の属性で、ポリゴンプリミティブの数を表します。

material はオプションの属性で、マテリアルのシンボルを宣言します。シンボルはインスタンス化の 際にマテリアルにバインドされます。material 属性を指定しなかった場合、ライティングやシェーデ ィングの結果はアプリケーションに依存します。

関連要素

<polygons>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 mesh, convex mesh 子要素 input, p, ph, extra

その他 なし

備考

<polygons>要素には、p 要素の並び(p は primitive の頭文字です)が含まれます。それぞれの p 要素で、個々のポリゴンの頂点属性を記述します。

1 つまたは複数の穴を持ったポリゴンは、<ph>要素として指定します。それぞれの<ph>要素には、1 つの要素と、1 つまたは複数の<h>要素が含まれていなければなりません。その場合、要素でポリゴンのインデックスを指定し、個々の<h>要素で穴のインデックスを表します。

<要素(または<h>>要素)の中のインデックスは、それぞれの順番に依存して異なる入力を参照します。>要素中の最初のインデックスは、オフセットが0のすべての入力を参照します。2番目のインデックスはオフセットが1のすべての入力を参照することになります。ポリゴンの個々の頂点は、それぞれの入力への1つのインデックスで構成されます。すべての入力を利用した後、その次のインデックスは、またオフセットが0の入力を再度参照し、新しい頂点を開始することになります。

生成される頂点の順番は反時計回りで、それぞれのポリゴンの表面を記述することになります。 プリミティブが頂点法線を持たずに構成される場合には、ライティングを有効にするために、プリミティブごとの法線をアプリケーションが生成する場合もあります。

<input>要素は、任意の数だけ含めることができます。なくてもかまいません。 要素は、任意の数だけ含めることができます。なくてもかまいません。

例

以下は、1つの正方形を記述した<polygons>要素の例です。<polygons>要素には2つの<source>要素が含まれており、それぞれには<input>要素のセマンティックスに依存して位置と法線データが含まれています。要素のインデックス値は、入力値を利用する順番を表しています。

以下は、どのようにジオメトリ接線を指定するのかを示した例です(法線と接線の入力は、どちらもオフセットが1であるため、マラマットが1であるため、できなり、であるため、

以下は、どのようにテクスチャ空間の接線を指定するのかを示した例です(テクスチャ空間の接線は、 入力へのオフセットや順番ではなく、set 属性によって、特定のテクスチャ座標セットと関連付けられ ている点に注意してください)。

```
<mesh>
 <source id="position"/>
 <source id="normal"/>
 <source id="tex-coord"/>
 <source id="tex-tangent"/>
  </vertices>
   <input semantic="POSITION" source="#position"/>
  </re>
  <polygons count="1" material="#Bricks">
   <input semantic="VERTEX" source="#verts" offset="0"/>
   <input semantic="NORMAL" source="#normal" offset="1"/>
   <input semantic="TEXCOORD" source="#tex-coord" offset="2" set="0"/>
   <input semantic="TEXTANGENT" source="#tex-tangent" offset="3" set="0"/>
   0 0 0 1 2 1 2 0 3 2 1 2 1 3 3 3
  </polygons>
</mesh>
```

polylist

概要

<polylist>要素は、<mesh>要素のジオメトリプリミティブと頂点属性のバインドを宣言するためのものです。

コンセプト

<polylist>要素は、複数の頂点属性を1つにまとめ、それらの頂点を個々のポリゴンに体系化するために必要な情報を指定するためのものです。

頂点配列の情報は<mesh>要素の属性配列として別に提供され、<polylist>要素でインデックス参照します。

<polylist>に記述されているポリゴンには、任意の数の頂点を含めることができます。

さまざまな操作で、表面のポイントの正確な方向が必要となります。この方向を法線ベクトルで部分的に定義できますが、法線自体の周りの「回転」については不明瞭のままです。この曖昧な余分の回転をなくす1つの方法は、同じポイントでの表面の接線を指定することです。座標系の種類がすでにわかっていると仮定すると(たとえば、右手系)、この方法で表面の方向を完全に指定できます。つまり、オブジェクト空間と表面空間との間の変換を行う3×3行列が定義できることになります。

接線と法線で、表面座標系の2つの座標軸(行列の2つの列)を指定します。従法線と呼ばれる3番目の座標軸は、接線と法線の外積として計算できます。2つの異なる種類の接線は、以下のようにドキュメント中で異なる用途と論理的な配置を持つので、COLLADAでは、それら2つの接線をサポートしています。

- テクスチャ空間の接線: semantic 属性として TEXTANGENT と TEXBINORMAL を記述した <input>要素で指定します。
- 標準の (幾何学的) 接線: semantic 属性として TANGENT と BINORMAL を記述した<input>要素で指定します。

属性

<polylist>要素には、以下の属性があります。

name xs:NCName

count xs:nonNegativeInteger

material xs:NCName

count は必須の属性で、ポリゴンプリミティブの数を表します。

material はオプションの属性で、マテリアルのシンボルを宣言します。シンボルはインスタンス化の際にマテリアルにバインドされます。material 属性を指定しなかった場合、ライティングやシェーディングの結果はアプリケーションに依存します。

関連要素

<polylist>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 mesh

個要素 input、vcount、p、extra

その他 なし

備考

<vcount>要素には、<polylist>要素で記述されている各ポリゴンの辺の数を表す整数値のリストが 含まれます。

生成される頂点の順番は反時計回りで、それぞれのポリゴンの表面を記述することになります。 プリミティブが頂点法線を持たずに構成される場合には、ライティングを有効にするために、プリミティブごとの法線をアプリケーションが生成する場合もあります。 <input>要素は、まったく指定しないか、もしくは複数記述することができます。 <vcount>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 <extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。

例

以下は、2つの四角形と1つの三角形を表した<polylist>要素の例です。<polylist>要素には2つの<polylist>要素が含まれており、これらの<polylist>要素には、<input>要素の semantic 属性にしたがって位置データと法線データが含まれます。要素のインデックス値は、利用される入力値の順番を示しています。

rotate

概要

<rotate>要素には、回転角度と回転軸を表す数学的なベクトルが含まれています。

コンセプト

回転は、平行移動を行わずに、座標系の中の物体の向きだけを変更します。コンピュータグラフィックスでは、座標系に対して方向を変えたり、座標値を入れ替えたりするために、回転変換を利用します。つまり、回転は、ローカル座標の原点に対する座標軸の変換を意味します。

属性

<rotate>要素には、以下の属性があります。

sid xs:NCName

sid はオプションの属性で、この要素のサブ識別子を含んだテキスト文字列値です。この値は、親要素の範囲内でユニークでなければなりません。

関連要素

<rotate>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 node

子要素 子要素はありません

その他 なし

備考

<rotate>要素には、OpenGL®や RenderMan®の回転仕様と同様に、4 つの浮動小数点値のリストが含まれています。これらの値は、回転軸を指定する列ベクトル [X, Y, Z]、および度数で表された角度を表します。

例

以下は、Y軸を基軸として90度の回転を表す<rotate>要素の例です。

<rotate>
 0.0 1.0 0.0 90.0 </rotate>

sampler

概要

<sampler>要素は、N次元の関数を宣言するためのものです。

コンセプト

COLLADA では、アニメーションの関数曲線は 1 次元の<sampler>要素で表し、サンプリングポイント と、それらの補間方法を定義します。アニメーション・チャンネルの値の計算に利用する際には、アニ メーションのキーフレームがサンプリングポイントとなります。つまり、サンプリングポイント(キー フレーム)が、サンプラの入力データソースになります。アニメーション・チャンネルは、サンプラの 出力データ値をターゲットに出力します。

属性

<sampler>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID

id はオプションの属性で、<sampler>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値 は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。

関連要素

<sampler>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 animation 子要素 input その他 なし

備考

<input>要素を、1つまたはそれ以上指定しなければなりません。

サンプリングポイントは、source 要素を参照する<input>要素で記述します。<input>要素の semantic 属性には、INPUT、INTERPOLATION、IN TANGENT、OUT TANGENT、OUTPUT のいずれ かを指定するか、ほしくは他のものを指定する場合もあります。

COLLADA では、補間の種類として、LINEAR、BEZIER、CARDINAL、HERMITE、BSPLINE、STEP が認 識できます。

完全な<sampler>要素には、semantic 属性が INTERPOLATION の<input>要素を1つ含まれていな ければなりません。COLLADA では、デフォルトの補間方式が指定されていません。つまり、補間の種類 を指定しなかった場合、<sampler>の動作はアプリケーションの定義したものとなります。

例

以下は、「Box-Trans-X」というid のキーフレームの source 要素の X 軸の値を求める<sampler> 要素の例です。

scale

概要

<scale>要素には、座標系の X 軸、Y 軸、Z 軸の相対的な比率を表す数学的なベクトルが含まれていま

コンセプト

スケーリングは、回転や平行移動を行わずに、座標系内の物体の大きさを変更します。コンピュータグ ラフィックスでは、座標系軸に対する値の大きさや比率を変更するために、スケール変換を利用します。

属性

<scale>要素には、以下の属性があります。

sid xs:NCName

sid はオプションの属性で、この要素のサブ識別子を含んだテキスト文字列値です。この値は、親要素 の範囲内でユニークでなければなりません。

関連要素

<scale>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 node

子要素はありません 子要素

その他 なし

備考

<scale>要素には、3 つの浮動小数点値のリストが含まれています。これらの値は、行列合成に適した 列ベクトルに編成されます。

例

以下は、物体(座標系)の大きさを一律に2倍に増やす変換を記述するための<scale>要素の例です。

<scale> 2.0 2.0 2.0 </scale>

scene

シーンは、特定の COLLADA リソースのコンテンツで視覚化可能な情報セット全体を表します。

概要

<scene>要素は、シーン階層(シーングラフ)のベースを宣言するためのものです。オーサリング・ツールで作成された視覚的情報や変換情報コンテンツの大部分は、シーンに含まれます。

コンセプト

シーンの階層構造は、シーングラフで構成されます。シーングラフは、視覚情報と関連したデータをノードとして含む閉路なし有向グラフ(DAG)、つまりツリー構造のデータです。シーングラフ構造は、データの最適処理やレンダリングに役立つため、コンピュータグラフィックスでは幅広く利用されています。

属性

<scene>要素に属性はありません。

関連要素

<scene>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 0回、または1回

親要素 COLLADA

子要素 instance physics scene、instance visual scene、extra

その他 なし

備考

<COLLADA>文書要素 (ルート要素) の中には、<scene>要素が最大 1 つ宣言されます。シーングラフは、〈scene〉の基でインスタンス化された<visual_scene>要素から構成されます。インスタンス化された<physics_scene>要素は、シーンに適用される任意のフィジックス (物理) を表します。

<instance_physics_scene>要素は任意の数だけ指定できます。

<instance_visual_scene>要素は任意の数だけ指定できます。

<extra>要素は任意の数だけ指定できます。

それぞれの要素の順番は、<instance_physics_scene>、<instance_visual_scene>、<extra>であるべきです。

例

以下は、idが「world」の視覚的シーンをインスタンス化する単純な<scene>要素の例です。

skeleton

概要

<skeleton>要素は、スキンコントローラで必要となるジョイントノードの検索をスキンコントローラ がどこから始めるのかを指定するためのものです。

コンセプト

シーングラフが複雑になるにともなって、シーン中に同じオブジェクトを何度も表示しなければならな い場合があります。そのため、スペースを節約するために、オブジェクトの実際のデータ表現を一度保 存しておき、複数の場所で参照することが可能です。しかしながら、シーンに毎回表示する際に、さま ざまにオブジェクトを変形したい状況も発生します。スキンコントローラの場合、オブジェクトの変形 は外部のノードセットから派生されます。

また、同じスキンコントローラの複数のインスタンスに、ノードセットの別々のインスタンスを参照さ せたい場合も発生するでしょう。その場合、個々のコントローラを個別にアニメーション化する必要が あります。スキンコントローラをアニメーション化するためには、それに影響を及ぼすノードをアニメ ーション化しなければならないからです。

さらに、別々のスキンコントローラのインスタンスに、同じノードセットを参照させる必要が出てくる 場合もあります。たとえば、キャラクタに衣装や防護具をアタッチする場合です。そうした場合には、 単一セットのノードの操作によって両方のコントローラの変形が行えます。

属性

<skeleton>要素に属性はありません。

関連要素

<skeleton>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数 親要素 instance controller

子要素はありません 子要素

その他 なし

備考

例

以下は、<skeleton>要素がどのようにして、skin と識別された同一のローカル定義された <controller>要素を参照する 2 つのコントローラインスタンスを一つのスケルトンの異なったイン スタンスにバインドするのかを示した例です。

```
library_controllers>
  <controller id="skin">
    <skin source="#base mesh">
      <source id="Joints">
        <Name array count="4"> Root Spine1 Spine2 Head </Name array>
        . . .
      </source>
      <source id="Weights"/>
      <source id="Inv bind mats"/>
      <joints>
```

```
<input source="#Joints" semantic="JOINT"/>
      </joints>
      <vertex weights/>
    </skin>
  </controller>
</library_controllers>
library nodes>
  <node id="Skeleton1" sid="Root">
   <node sid="Spine1">
     <node sid="Spine2">
       <node sid="Head"/>
      </node>
    </node>
  </node>
</library_nodes>
<node id="skel01">
  <instance_node url="#Skeleton1"/>
</node>
<node id="skel02">
  <instance node url="#Skeleton1"/>
</node>
<node>
  <instance_controller url="#skin"/>
   <skeleton>#skel01</skeleton>
  </instance_controller>
</node>
<node>
 <instance_controller url="#skin"/>
   <skeleton>#skel02</skeleton>
  </instance controller>
</node>
```

skew

概要

<skew>要素には、角度と、回転軸と平行移動の軸を表す2つ数学的なベクトルが含まれています。

コンセプト

スキュー処理(剪断変形)というのは、特定の座標軸に沿って物体を変形させることで、変形軸成分の 値を変形軸に対して平行移動させます。コンピュータグラフィックスでは、物体を変形させたり、画像 の歪みを補正したりするために、この剪断変形変換を利用します。

属性

<skew>要素には、以下の属性があります。

sid xs:NCName

sid はオプションの属性で、この要素のサブ識別子を含んだテキスト文字列値です。この値は、親要素 の範囲内でユニークでなければなりません。

関連要素

<skew>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 node

子要素はありません 子要素

その他 なし

備考

RenderMan®の仕様と同様に、<skew>要素には 7 つの浮動小数点値のリストが含まれます。これらの値 は、度数で表された角度と、回転軸と平行移動軸を指定する2つの列ベクトルを表します。

例

以下は、Y軸に対して45度回転させ、X軸に沿ったポイントの変位を表す<skew>要素の例です。

<skew> 45.0 0.0 1.0 0.0 1.0 0.0 0.0 </skew>

skin

概要

<skin>要素には、重み付きブレンド・スキニングを記述するのに必要となる頂点とプリミティブの情報が含まれています。

コンセプト

キャラクタ・スキニングの場合、アニメーションエンジンは、スキニングされたキャラクタの関節(骨格)を動かします。スキンのトポロジーを構成している関節とメッシュの頂点との関連を記述するのが、スキン・メッシュです。関節は、制御アルゴリズムにしたがって、スキン・メッシュ頂点の変換に影響を与えることになります。

一般的なスキニング・アルゴリズムでは、隣接する関節の影響を重みの値に応じて混在させます。 古典的なスキニング・アルゴリズムでは、ノード(関節とも呼ばれます)の行列でジオメトリの点(メッシュの頂点など)を変換し、スカラー加重を利用して、その結果の加重平均を計算します。 スキニングの影響を受けるジオメトリは「スキン」と呼ばれ、変換(ノード)と、それに対応する重みの組合せは「インフルエンス(影響力)」と呼ばれます。さらに、影響を与えるノードの集合(一般に階層構造を持つ)は、「骨格(スケルトン)」と呼ばれます。 スキニング処理には、以下の2つのステップが必要となります。

- 骨格とスキンのバインドと呼ばれる前処理
- 骨格のポーズの変化に応じてスキン形状を変更するスキニング・アルゴリズムの実行

前処理の結果、つまり「スキニング情報」は、以下の情報から構成されています。

- バインド形状:「デフォルトの形状」とも呼ばれます。これは、スキンが骨格にバインドされた時点でのスキンの形状です。バインド形状には、対応する <mesh>頂点の位置(必須)と、オプションでさらに頂点の属性を含むことができます。
- インフルエンス: <mesh>の各頂点に対応する、ノードと重みの対の可変長リストです。
- バインド・ポーズ:バインド時点での各インフルエンスの座標変換を表します。通常、このノードごとの情報は「バインド行列」で表現されます。バインド行列というのは、バインド時のノードのローカル座標からワールド座標への変換行列です。

スキニング・アルゴリズムの変換は、すべてバインド・ポーズと関連して行われます。この相対変換は、通常、骨格中の各ノードについて事前に計算され、スキニング行列として保存されます。 頂点の新しい(スキングされた)位置を導き出すために、それぞれのインフルエンス・ノードのスキニ

頂点の新しい(スキングされた)位置を導き出すために、それぞれのインフルエンス・ノードのスキニ ング行列で、頂点のバインド位置を変換し、その結果に対してブレンド加重を利用して加重平均を取り ます。

スキニング行列を導き出す最も簡単な方法は、ノードの現在のローカル座標からワールドへの変換行列に、ノードのバインド行列の逆行列を掛け合わせることです。この操作で、各ノードのバインド・ポーズ変換が事実上打ち消され、スキン共通のオブジェクト空間で作業することが可能になります。 通常、バインド処理では、以下の操作が必要となります。

- スキンの現在の形状をバインド形状として保存する。
- バインド行列を計算して保存する。
- フォールオフ機能をいくつか備えたデフォルトのバインド加重値を生成する。特定の頂点から関節が遠いほど、インフルエンが少なくなります。また、加重値が 0 のインフルエンスは無視してかまいません。

したがって、アーチストは、通常、メッシュ上に「ペイント」することで、自分で加重値を変更できるようになります。

属性

<skin>要素には、以下の属性があります。

source xs:anyURL

source は必須の属性で、ベースメッシュ(ベースメッシュまたはモーフィングメッシュ)を参照する URI を含みます。スキンメッシュのバインド形状も表します。

関連要素

<skin>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 controller

子要素 bind shape matrix、source、joints、vertex weights、extra

その他 なし

備考

<bind_shape_matrix>要素は、まったく指定しないか、もしくは 1 つだけ記述することができます。
バインド前のベースメッシュの位置と方向に関して追加情報を指示します。<bind_shape_matrix>
要素が指定されていない場合、<bind_shape_matrix>として単位行列が利用されます。

<source>要素は、3回またはそれ以上指定しなければなりません。<source>要素で、特定のベースメッシュのスキニングに必要なほとんどのデータを指定します。

<joints>要素は、1 つだけ指定しなければなりません。この要素は、このスキンに必要なジョイントごとの情報を集めたものです。

<vertex_weights>要素は、1 つだけ指定しなければなりません。スキンで利用される関節と重み付けの頂点ごとの組み合わせを表します。<vertex_weights>では、関節の配列に対して-1 というインデックスはバインド形状を参照することになります。重み付けは、利用する前に正常にしておくべきです。

<extra>要素は任意の数だけ指定できます。

子要素の並びは、<bind_source_matrix>、<source>、<joints>、<vertex_weights>、<extra>の順番でなければなりません。

例

以下は、指定可能な属性を持った<skin>要素の例です。

<controller id="skin">

source

概要

<source>要素は、参照する<input>要素のセマンティクスにしたがって値を提供するデータのリポジ トリを宣言するためのものです。

コンセプト

データソースは、確立された通信チャネルを介してアクセス可能な既知の情報源のことです。 データソースには、情報へのアクセス方式が用意されています。このアクセス方式は、情報の表現に応 じて各種のものが実装されています。情報は、データの配列、またはデータを生成するプログラムとし て、ローカルに保存することができます。

属性

<source>要素には、以下の属性があります。

id xs:ID xs:NCName name

id はオプションの属性で、<source>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値 は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

<source>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 morph, animation, mesh, convex mesh, skin

子要素 IDREF array, Name array, bool array, float array, int array,

technique common, technique

その他 なし

備考

配列要素(<bool array> 、 <float array> 、 <int_array> 、 <Name_array> 、 <IDREF array>) のいずれか一つは、まったく指定しないか、もしくは 1 つだけ記述することができ ます。指定する場合には、いずれか1つしか指定できません。

<technique common>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 <source>の子として、<technique common>要素には<accessor>要素が 1 つだけ含まれていなけ ればなりません。

<technique>要素は、まったく指定しないか、もしくは複数記述することができます。

例

以下は、1 つの RGB カラーを構成する浮動小数点値の配列を含んだ<source>要素の例です。

```
<source id="color source" name="Colors">
 <float array id="values" count="3">
   0.8 0.8 0.8
 </float array>
 <technique common>
```

spline

概要

<spline>要素には、制御頂点(CV)とセグメント情報を持つ複数のセグメントスプラインを表すため の十分な情報が含まれています。

コンセプト

制御頂点ごととセグメントごとのどちらの情報も、制御頂点に対して保存されます。セグメントごとの データは、特定の制御頂点から始まるスプラインセグメントに対して適用されます。

それぞれの制御頂点には任意の数の属性が指定できますが、属性の数と種類は、1 つのスプライン中で 個々の制御頂点に対して一定でなければなりません。

制御頂点ごととセグメントごとの情報としては、以下のものがあります。

- 制御頂点の位置 (2d、3d、または4d: NURBS)
- セグメントの曲率を制御する接線
- 2つの隣接するセグメントの連続性を制御する接線
- セグメントの種類:1 つのスプライン中の各セグメントで別々の補間方法(リニアやベジエな ど)が利用できます。
- 断片ごとの線形近似(テッセレーション)のステップ数
- カスタムの制御頂点ごとのデータ

<spline>の構成は、<mesh>と非常によく似ています。<spline>には、属性ストリームを組み立て るために、属性と<control vertices>要素を提供する<source>要素が含まれます。

属性

<spline>要素には、以下の属性があります。

closed bool

closed はオプションの属性で、最初と最後の制御頂点を結び付けているセグメントがあるかどうかを 表します。デフォルト値は「false」で、スプラインがオープンであることを意味します。

関連要素

<spline>要素は、以下の要素と関連性があります。

スキーマ中に定義された要素の数 出現回数

親要素 geometry

子要素 source, control vertices, extra

その他 なし

備考

<source>要素は、1 つまたはそれ以上指定されなければなりません。<source>要素では、スプライ ンの制御頂点とセグメントのための値を提供します。

<control vertices>要素は、1 つだけ指定されなければなりません。スプラインの制御頂点を表す のに利用します。

それぞれの制御頂点は、semantic 属性が POSITION の<input>要素を少なくと 1 つの持たなければ なりません。

共通プロファイルでは、<control_vertices>スプライン用に以下の<input>セマンティックスが定義されています。

名前	種類	解説	デフォルト値
POSITION	<pre>float2, float3, float4</pre>	制御頂点の位置	なし
INTERPOLATION	Name	制御頂点から始まるセグメントを表す多項式 の種類。共通プロファイルでの種類は、以下 の通りです:LINEAR, BEZIER, HERMITE, CARDINAL, BSPLINE, NURBS	LINEAR
IN_TANGENT	float2, float3	制御頂点の前に位置するセグメント図形を制 御する接線(BEZIER または HERMITE)	なし
OUT_TANGENT	float2, float3	制御頂点の後に位置するセグメント図形を制 御する接線(BEZIER または HERMITE)	なし
CONTINUITY	Name	制御頂点での連続性制限を定義します (BEZIER や HERMITE などの分割可能な接線を持ったセグメントに適用されます)。共通プロファイルでの種類は、以下の通りです:CO,C1,G1	C1
LINEAR_STEPS	int	制御頂点に続くスプラインセグメントで利用 される断片ごとの線形近似のステップ数 (UNIFORM_LINEAR_STEPS が FALSE であ ると想定した場合)	なし

例

以下は、指定可能な属性を持った空の<spline>要素の例です。

spot

概要

<spot>要素は、スポット光源を表すためのものです。

コンセプト

<spot>要素では、スポット光源を表すのに必要なパラメータを宣言します。スポット光源は、空間中の既存の位置から特定の方向に光を放射します。スポット光源からの光は、円錐形に放射されます。放射角が光源の方向から広がるのにともなって、輝度が減衰します。また、スポット光源の輝度は、光源からの距離が大きくなるのにともなって減衰します。

光源の位置は、インスタンス化されるノードの変形で定義されます。ローカル座標での光源のデフォルトの方向ベクトルは[0,0,-1]で、-Z 軸方向に下がることになります。光源の実際の方向は、光源がインスタンス化されるノードの変形として定義されます。

属性

<spot>要素に属性はありません。

関連要素

<spot>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 technique common

子要素 color、constant attenuation、linear attenuation、

quadratic_attenuation, falloff_angle, falloff_exponent

その他 なし

備考

<spot>要素は、dht>要素の下の<technique_common>の子としてだけ指定できます。<color>要素は、1 つだけ指定しなければなりません。<color>要素には、光源のカラーを指定する 3 つの浮動小数点のスポット値が含まれます。sid 属性を指定することも可能です。

特定の距離での光の全体の減衰は、<constant_attenuation>、<quadratic attenuation>を利用して計算されます。その際、以下の公式が利用されます。

```
A = constant_attenuation + Dist * linear_attenuation + Dist^2 * quadratic attenuation
```

光の方向を基準にした減衰量を指定するには、<falloff_angle>と<falloff_exponent>を利用します。

例

以下は、<spot>要素の例です。

targets

概要

<targets>要素は、モーフィングターゲットと、その重み付け、さらに関連したユーザ定義属性を宣言するためのものです。

コンセプト

<targets>要素では、モーフィングターゲットとモーフィングの重み付けを宣言します。<input>要素で、ブレンドするメッシュセットを定義し、さらにブレンド時に利用される重み付けの配列も定義します。モーフィングターゲットに関連付ける詳細な情報を指定するのにも利用できます。

属性

<targets>要素に属性はありません。

関連要素

<targets>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 morph

子要素 input、extra

その他 なし

備考

<input>要素は、少なくとも2つ指定しなければなりません。1つはMORPH_TARGET の semantic 属性を持ったもの、もう1つはMORPH_WEIGHT の semantic 属性を持ったものです。
<input>要素が<targets>の子の場合、offset 属性を指定してはなりません。
<extra>要素は任意の数だけ指定できます。

例

以下は、<targets>要素の完全な例です。

```
<targets>
    <input source="#morph-targets" semantic="MORPH_TARGET">
    <input source="#morph-weights" semantic="MORPH_WEIGHT">
    </targets>
```

technique

概要

<technique>要素は、コンテンツの一部の処理するために使われる情報を宣言するためのものです。 各テクニックは、対応するプロファイルに適合させておく必要があります。

コンセプト

テクニックというのは、特定のぷラットフォームやプログラムで必要となる情報を記述するためのもの で、これはプロファイルで表されています。テクニックのコンテキストは2つの情報で定義します。つ まり、プロファイルと、インスタンス文書中のその親要素です。通常、テクニックは「スイッチ」とし て機能します。コンテンツ中の特定の部分に対して1つ以上指定されている場合、インポート時に、両 方ではなく、どちらか一方が選ばれます。インポートを行うアプリケーションがどのプロファイルをサ ポートしているのかを基準にして選ばれます。テクニックにはアプリケーションデータとプログラムが 含まれ、1つの単位として管理可能なアセットとすることができます。

属性

<technique>要素には、以下の属性があります。

profile xs:NMTOKEN

profile は必須の属性で、プロファイルの種類を表します。テクニック用のプラットフォームや機能 の対象を表したベンダ定義された文字列です。

<technique>要素には、コンテンツ検証に利用する追加スキーマを表すために、xmlns 属性が (XML Schema Language として) 指定できます。

関連要素

<technique>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 extra, source, light, optics, imager, force field,

physics material, physics scene, rigid body, rigid constraint,

instance rigid body

子要素 以下を参照

その他 なし

備考

<technique>要素には、任意の整形式の XML データが記述できます。整形式の任意のデータは、 COLLADA スキーマに対して検証されます。データ検証に別のスキーマを利用するように指定することも 可能です。それ以外も正しいものとみなされますが、実際の検証は行われません。

例

以下は、1つの<technique>で行える別々の処理を示した例です。

<technique profile="Max" xmlns:max="some/max/schema">

<param name="wow" sid="animated" type="string">a validated string parameter from the COLLADA schema.</param>

<max:someElement>defined in the Max schema and validated./max:someElement> <uhoh>something well-formed and legal, but that can't be validated because there is no schema for it!</uhoh>

</technique>

translate

概要

<translate>要素には、X 軸方向、Y 軸方向、Z 軸方向への距離を表す数学的なベクトルが含まれます。

コンセプト

平行移動は、回転を行うことなく、座標系中の物体の位置を変更します。コンピュータグラフィックスでは、座標系に対する位置を決めたり、値を移動したりするために、平行移動変換を利用します。つまり、平行移動は、ローカルな座標系の原点の移動を意味します。

属性

<translate>要素には、以下の属性があります。

sid xs:NCName

sid はオプションの属性で、この要素のサブ識別子を含んだテキスト文字列値です。この値は、親要素の範囲内でユニークでなければなりません。

関連要素

<translate>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 node

子要素 子要素はありません

その他 なし

備考

<translate>要素には、3 つの浮動小数点の値が含まれます。これらの値は、行列合成に適した列ベクトルの形式に構成されます。

例

以下は、X軸方向にそって10単位の移動を表す<translate>要素の例です。

<translate>
10.0 0.0 0.0
</translate>

triangles

概要

<triangles>要素は、<mesh>要素のジオメトリプリミティブと頂点属性の結び付きを宣言するため のものです。

コンセプト

<triangles>要素は、頂点の属性を結び付けて、個別の三角形を構成するために必要な情報を提供し ます。頂点配列の情報は属性配列として別に提供され、<triangles>要素でインデックス参照します。 メッシュによって記述される三角形には、頂点が 3 つずつあります。1 番目の三角形は、1 番目、2 番 目、3番目の頂点から構成され、2番目の三角形は、4番目、5番目、6番目の頂点から構成されること になります。

属性

<triangles>要素には、以下の属性があります。

name xs:NCName

xs:nonNegativeInteger count

material xs:NCName

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

count は必須の属性で、三角形プリミティブの数を表します。

material はオプションの属性で、マテリアルのシンボルを宣言します。シンボルは、インスタンス化 の時点でマテリアルとバインドされます。material 属性を指定しなかった場合、ライティングやシェ ーディングの結果はアプリケーションに依存します。

関連要素

<triangles>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 mesh, convex mesh 子要素 input, p, extra

その他 なし

備考

<triangles>要素には、p 要素 (p は primitive の頭文字です) の並びが含まれます。p 要素は、 個々の三角形の頂点属性を表します。

>要素中の各インデックスは、それぞれの順番に応じて異なる入力を参照することになります。 要素の最初のインデックスは、オフセットが 0 のすべての入力を参照し、2 番目のインデックスはオフ セットが1のすべての入力を参照します。線の各頂点は、それぞれの入力への1つのインデックスで構 成されます。それぞれの入力を利用した後、その次のインデックスはオフセットが0の入力を再度参照 し、新しい頂点を開始することになります。

生成される頂点の順番は反時計回りで、それぞれの三角形の表面を記述することになります。 プリミティブが頂点法線を持たずに構成される場合には、ライティングを可能にするために、プリミテ ィブごとの法線をアプリケーションが生成する場合もあります。

<input>要素は、まったく指定しないか、もしくは複数記述することができます。

>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。

<extra>要素は、0個以上記述することができます。

子要素の並びは、<input>、、<extra>の順番でなければなりません。

例

以下は、2 つの三角形を記述する<triangles>要素の例です。位置および法線のデータを含む 2 つの <source>要素があり、そのセマンティクスは<input>要素によって指定されています。要素のインデックス値は、入力値が利用される順序を表します。

trifans

概要

<trifans>要素は、<mesh>要素のジオメトリプリミティブと頂点属性の結び付きを宣言するためのも のです。

コンセプト

<trifans>要素は、頂点の属性を結び付けて、連結した三角形を作成するために必要な情報を提供し

頂点配列の情報は<mesh>要素の属性配列として別に提供され、<trifans>要素でインデックス参照し

メッシュによって記述された各三角形には、頂点が3つずつあります。最初の三角形は、1番目、2番 目、3 番目の頂点から構成されます。それ以降の三角形は、現在の頂点と、最初の頂点と直前の頂点を 再利用して構成されます。

属性

<trifans>要素には、以下の属性があります。

xs:NCName name

count xs:nonNegativeInteger

material xs:NCName

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

count は必須の属性で、三角形ファンプリミティブの数を表します。

material はオプションの属性で、マテリアルのシンボルを宣言します。シンボルは、インスタンス化 の時点でマテリアルとバインドされます。material 属性を指定しなかった場合、ライティングやシェ ーディングの結果はアプリケーションに依存します。

関連要素

<trifans>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数 スキーマ中に定義された要素の数

親要素 mesh, convex mesh 子要素 input, p, extra

その他 なし

備考

<trifans>要素には、p 要素(p は primitive の頭文字です)の並びが含まれます。p 要素は、任意の 数の連結した三角形の頂点属性を表します。

>要素中の各インデックスは、それぞれの順番に応じて異なる入力を参照することになります。 要素の最初のインデックスは、オフセットが 0 のすべての入力を参照し、2 番目のインデックスはオフ セットが1のすべての入力を参照します。線の各頂点は、それぞれの入力への1つのインデックスで構 成されます。それぞれの入力を利用した後、その次のインデックスはオフセットが0の入力を再度参照 し、新しい頂点を開始することになります。

生成される頂点の順番は反時計回りで、それぞれの三角形の表面を記述することになります。

プリミティブが頂点法線を持たずに構成される場合には、ライティングを可能にするために、プリミテ ィブごとの法線をアプリケーションが生成する場合もあります。

<input>要素は、まったく指定しないか、もしくは複数記述することができます。

要素は、まったく指定しないか、もしくは複数記述することができます。 <extra>要素は、まったく指定しないか、もしくは1つだけ記述することができます。 子要素の並びは、<input>、、<extra>でなければなりません。

例

以下は、2 つの三角形を記述する<trifans>要素の例です。位置および法線のデータを含む 2 つの <source>要素があり、そのセマンティクスは<input>要素によって指定されています。要素のインデックス値は、入力値が利用される順序を表します。

tristrips

概要

<tristrips>要素は、<mesh>要素のジオメトリプリミティブと頂点属性の結び付きを宣言するため のものです。

コンセプト

<tristrips>要素は、頂点の属性を結び付けて、連結した三角形を作成するために必要な情報を提供

頂点配列の情報は<mesh>要素の属性配列として別に提供され、<tristrips>要素でインデックス参 照します。

メッシュによって記述された各三角形には、頂点が3つずつあります。最初の三角形は、1番目、2番 目、3 番目の頂点から構成されます。それ以降の三角形は、現在の頂点と、最初の頂点と直前の頂点を 再利用して構成されます。

属性

<tristrips>要素には、以下の属性があります。

name	xs:NCName
count	xs:nonNegativeInteger
material	xs:NCName

name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

count は必須の属性で、三角形ストリッププリミティブの数を表します。

material はオプションの属性で、マテリアルのシンボルを宣言します。シンボルは、インスタンス化 の時点でマテリアルとバインドされます。material 属性を指定しなかった場合、ライティングやシェ ーディングの結果はアプリケーションに依存します。

関連要素

<tristrips>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	mesh, convex mesh
子要素	input, p, extra
その他	なし

備者

<tristrips>要素には、p 要素(p は primitive の頭文字です)の並びが含まれます。p 要素は、任 意の数の連結した三角形の頂点属性を表します。

>要素中の各インデックスは、それぞれの順番に応じて別の入力を参照することになります。要 素の最初のインデックスは、オフセットが 0 のすべての入力を参照し、2 番目のインデックスはオフセ ットが1のすべての入力を参照します。線の各頂点は、それぞれの入力への1つのインデックスで構成 されます。それぞれの入力を利用した後、その次のインデックスはオフセットが 0 の入力を再度参照し、 新しい頂点を開始することになります。

生成される頂点の順番は、最初(と3番目と5番目...)の三角形では反時計回りで、2番目(と4番 目と6番目...) の三角形では時計回りとなり、それぞれの三角形の表面を記述することになります。 プリミティブが頂点法線を持たずに構成される場合には、ライティングを可能にするために、プリミテ ィブごとの法線をアプリケーションが生成する場合もあります。

<input>要素は、まったく指定しないか、もしくは複数記述することができます。 要素は、まったく指定しないか、もしくは複数記述することができます。 <extra>要素は、0個以上記述することができます。 子要素の並びは、<input>、、<extra>でなければなりません。

例

以下は、2 つの三角形を記述する<tristrips>要素の例です。位置および法線のデータを含む 2 つの <source>要素があり、そのセマンティクスは<input>要素によって指定されています。要素のインデックス値は、入力値が利用される順序を表します。

vertex_weights

概要

<vertex weights>要素は、スキン処理で利用される関節と重み付けの組み合わせを記述するための ものです。

コンセプト

<vertex weights>要素は、ベースメッシュ中の各頂点に対して、それぞれの関節と重み付けを関連 付けます。

属性

<vertex weights>要素には、以下の属性があります。

count	uint

count は必須の属性で、ベースメッシュ中の頂点の数を表します。

関連要素

<vertex weights>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	skin
子要素	input, vcount, v, extra
その他	なし

備考

<input>要素は、2 つまたはそれ以上指定しなければなりません。<input>要素の 1 つは、 <vertex weights>の子として、JOINT という semantic 属性を持っていなければなりません。 <input>要素は、関連付ける関節と属性を表します。

<vcount>は、まったく指定しないか、もしくは 1 つ指定しなければなりません。<vcount>要素は、 個々の頂点に関連付けられた骨の数を表します。

<v>要素は、まったく指定しないか、もしくは 1 つ指定しなければなりません。<v>要素は、個々の頂 点に関連付けられた骨と属性を表します。関節の配列への-1というインデックスは、バインド形状を 参照します。重み付けは、利用する前に正規化するべきです。

<extra>要素は、0個以上記述することができます。

子要素の順番は、<input>、<vcount>、<v>、<extra>でなければなりません。

例

以下は、空の<vertex weights>要素の例です。

```
<skin>
 <vertex_weights count="">
   <input semantic="JOINT"/>
   <input/>
   <vcount/>
   < />
   <extra/>
 </re>
```

</skin>

以下は、もっと具体的な<vertex_weights>要素の例です。<vcount>要素で、最初の頂点には骨が3つあり、2番目の頂点には2つあるといったことを指定している点に注意してください。また、最初の頂点の重み付けがバインド形状へのweights[0]で、weights[1]は骨0、weights[2]は骨1であることも指定しています。

vertices

概要

<vertices>要素は、メッシュ頂点の属性や識別情報を宣言します

コンセプト

<vertices>要素は、メッシュ中のメッシュ頂点を記述します。メッシュ頂点は、メッシュを構成して いる頂点の識別情報、およびテッセレーションに対して不変な他の頂点属性を表します。

属性

<vertices>要素には、以下の属性があります。

id	xs:ID
name	xs:NCName

id はオプションの属性で、<vertices>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この 値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、この要素のテキスト文字列名です。

関連要素

<vertices>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	mesh, convex mesh
子要素	input, extra
その他	なし

備考

<input>要素は、1 つまたは複数指定しなければなりません。1 つの<input>要素は、メッシュ中の各 頂点のトポロジー的な位置を確立するために、semantic 属性が POSITION でなければなりません。 <input>要素は、<vertices>要素の子のばあい、offset 属性を指定してはなりません。 <extra>要素は、0個以上記述することができます。

例

以下は、メッシュ頂点を表す<vertices>要素の例です。

```
<mesh>
 <source id="position"/>
  <vertices id="verts">
   <input semantic="POSITION" source="#position"/>
 </re>
</mesh>
```

visual scene

概要

<visual scene>は、COLLADA リソースのコンテンツで視覚化可能な情報セット全体を表します。

コンセプト

visual_scene の階層構造は、シーングラフにまとめられます。シーングラフは、視覚情報と関連したデータをノードとして含む閉路なし有向グラフ (DAG) 、つまりツリー構造のデータです。シーングラフ構造は、データの最適処理やレンダリングに役立つため、コンピュータグラフィックスでは幅広く利用されています。

属性

<visual scene>要素には、以下の属性があります。

id	xs:ID
name	xs:NCName

id はオプションの属性で、<visual_scene>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。 この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、<visual scene>要素の名前を含んだテキスト文字列です。

関連要素

<visual scene>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	library visual scenes
子要素	asset, node, evaluate scene, extra
その他	なし

備考

1 つの1 つのlibrary_visual_scene>要素の中に<visual_scene>要素を複数記述してもかまいません。
<scene>要素の中の<instance_visual_scene>要素ー<COLLADA>ルート要素の下に宣言されているもの一は、どの<visual_scene>要素をドキュメントで利用するのかを宣言します。
(visual_scene)要素をドキュメントで利用するのかを宣言します。

<visual_scene>要素には、任意の数の子要素を含めることができます。<visual_scene>要素は、シーングラフのトポロジーのルートを構成することになります。

例

以下は、子要素を持たない<visual_scene>要素を含んだ COLLADA リソースの簡単な例です。シーンの名前は「world」です。

<instance_visual_scene url="#world"/> </scene> </COLLADA>

4章 共通プロファイル

このページは空白です。

概要

COLLADA スキーマでは、設定プロファイルに準拠した情報表現のコンテクストを設定する technique 要素を定義しています。このプロファイル情報そのものは、現時点では COLLADA スキーマの範囲外ですが、スキーマ中で扱えるようにする方法もあります。

COLLADA デザインの 1 つの特徴として、共通プロファイル用のテクニックが存在します。 <technique_common>とcommon>とcommon>とcommon>とcommon>の要素が、このプロファイルを明示的に起動します。
collada コンテンツを解析するツールはすべて、この共通プロファイルを認識できなければなりません。したがって、スキーマの拡張にともなって、COLLADA では共通プロファイルの定義も提供する必要があります。

命名規則

COLLADA 共通プロファイルでは、正規の名前を定める規則として以下のような命名規則を採用しています。

• パラメータの名前は大文字にします。つまり、<param>要素の name 属性の値は、すべて大文字でなければなりません。以下に例を示しておきます。

```
<param name="X" type="float" />
```

• パラメータの型が COLLADA スキーマ、XML Schema、C/C++言語のいずれかの基本型に対応する場合には、小文字にします。それ以外の型名は、名前を構成する単語単位で頭文字を大文字にします。つまり、<param>要素の type 属性の値は、この規則にしたがわなくてはなりません。以下に例を示しておきます。

```
<param name="X" type="float" />
```

• 入力とパラメータのセマンティックス名は大文字にします。つまり、<input>と<newparam>の要素の semantic 属性の値は、すべて大文字にしなければなりません。以下に例を示しておきます。

共通プロファイル

COLLADA 共通プロファイルは、<technique_common>またはcommon>の要素で宣言します。以下に例を示しておきます。

```
<technique_common>
<!-- この範囲は共通プロファイルです -->
</technique_common>
```

¹ XML Schema 言語では、制約された値セットを定義するための<xs:key>と<xs:keyref>という要素が定義されています。 この制約セットで、XPath 言語 1.0 のサブセットを利用して、指示されている要素と属性に特定の範囲内で値が正しく該 当するかどうか検証できます。

<technique_common>要素の範囲外にある要素は、共通プロファイルはもちろん、いかなるプロファイルにも含まれません。たとえば、<polygons>要素の範囲内に存在する<input>要素は共通プロファイルには含まれず、テクニックによって変わりません。

インタフェースとしてのパラメータ

COLLADA の<param>要素または<newparam>要素は、name または semantics を指定して、特定の範囲内でバインディング可能なパラメータを形成するシンボルを宣言します。したがって、正規のパラメータは、名前とセマンティクスの両方で規定することになります。つまり、共通プロファイル中のパラメータは標準的なものであり、既知のものとなります。

パラメータの型は、C/C++言語と同じようにオーバーロードすることができます。つまり、パラメータの型がかならずしも厳密に一致しなくてもバインドすることが可能です。ただし、この場合のパラメータの型は、integer から float、float3 から float4、bool から int といった簡単(でアプリケーションにとって意味のある)な変換やキャストで互換性を維持する必要があります。

共通用語集

このセクションでは、共通プロファイル中にあるパラメータやセマンティクスの正規名の一覧を記載しておきます。また、target 属性での参照に利用されるメンバを指定するシンボル名の一覧も記載しておきます。

共通プロファイル中の<param>要素の name 属性と<newparam>要素の semantic 属性の値は、以下の通りです。

名前	型	代表的なコンテクスト	説明	デフォルト値
A	float	<material>,</material>	アルファカラー成分	なし
		<texture></texture>		
ANGLE	float	<animation>,</animation>	オイラー角	なし
		dight>		
В	float	<material>,</material>	青カラー成分	なし
		<texture></texture>		
DOUBLE SIDED	float	<material></material>	レンダリングの状態	なし
G	float	<material>,</material>	緑カラー成分	なし
		<texture></texture>		
P	float	<geometry></geometry>	3番目のテクスチャ座標	なし
Q	float	<geometry></geometry>	4番目のテクスチャ座標	なし
R	float	<material>,</material>	赤カラー成分	なし
		<texture></texture>		
S	float	<geometry></geometry>	1番目のテクスチャ座標	なし
T	float	<geometry></geometry>	2番目のテクスチャ座標	なし
TIME	float	<animation></animation>	時間(秒)	なし
U	float	<geometry></geometry>	1番目の汎用パラメータ	なし
V	float	<geometry></geometry>	2番目の汎用パラメータ	なし
W	float	<animation>,</animation>	4番目のデカルト座標	なし
		<controller>,</controller>		
		<geometry></geometry>		
X	float	<animation>,</animation>	1番目のデカルト座標	なし
		<controller>,</controller>		
		<geometry></geometry>		
Y	float	<animation>,</animation>	2番目のデカルト座標	なし
		<controller>,</controller>		

		<geometry></geometry>		
Z	float	<animation>,</animation>	3番目のデカルト座標	なし
		<controller>,</controller>		
		<geometry></geometry>		

共通プロファイル中の<input>要素の semantic 属性の値は、以下の通りです。

セマンティックス	説明
BINORMAL	従法線ベクトル
COLOR	カラー座標ベクトル
INPUT	サンプラ入力
IN TANGENT	先行する制御ポイントの接線ベクトル
INTERPOLATION	サンプラの補間種類
INV BIND MATRIX	ローカル座標からワールド座標への変換行列の逆行列
JOINT	スキンのインフルエンス識別子
MORPH TARGET	メッシュ・モーフィング用のモーフィングターゲット
MORPH WEIGHT	メッシュ・モーフィングの加重値
NORMAL	法線ベクトル
OUTPUT	サンプラ出力
OUT TANGENT	後続の制御ポイントの接線ベクトル
POSITION	ジオメトリの座標ベクトル
TANGENT	接線ベクトル

共通プロファイル中の <channel>要素と<controller>要素の target 属性メンバの値は、以下の通りです。

名前	型	説明
'(' # ')'['(' # ')']	float	行列またはベクトルのフィールド
A	float	アルファカラー成分
ANGLE	float	オイラー角
В	float	青カラー成分
G	float	緑カラー成分
P	float	3番目のテクスチャ座標
Q	float	4番目のテクスチャ座標
R	float	赤カラー成分
S	float	1番目のテクスチャ座標
Т	float	2番目のテクスチャ座標
TIME	float	時間(秒)
U	float	1番目の汎用パラメータ
V	float	2番目の汎用パラメータ
W	float	4番目のデカルト座標
X	float	1番目のデカルト座標
Y	float	2番目のデカルト座標
Z	float	3番目のデカルト座標

対象ベクトルおよび行列のフィールドについては、左右の括弧を使った配列添字の表記を利用できる点 に注意してください。 このページは空白です。

このページは空白です。

概要

COLLADA に完全に準拠したツールはどれも、スキーマによって表現されたあらゆるデータの仕様に対応する必要があります。しかしながら、当然、単純にスキーマ仕様に準拠する以上の要件が求められる場合もあります。たとえば、値の解釈を統一したり、重要なユーザ設定可能なオプションを提供したり、ツールに独自の機能を組み込む方法の詳しい規定といったものです。本章では、こういった問題点に優先順位を付けて解説します。

それぞれの「要件」のセクションでは、個々の対応ツールがかならず実装しなければならないオプションについて詳しく述べてあります。ただし、指定された情報をアプリケーションで利用できない場合は例外です。たとえば、レイヤをサポートしていないツールでは(そういったレイヤ情報をエクスポートするのが通常は必須だと仮定した場合)、レイヤ情報をエクスポートできなくてもかまいません。しかしながら、レイヤをサポートしたツールは、すべてレイヤ情報を適切にエクスポートできなければなりません。

また、「オプション」のセクションでは、かならずしも実装する必要のない(ただし、一部のユーザに とっては重要で高度な)オプション機能などのメカニズムについて述べてあります。

ツールの品質を保証すると同時に、COLLADA の目的に沿っていることを保証するために、以降で解説する要件はどれもツールに組み込んであります。これらの重要なデータ解釈とオプションは、クロスプラットフォームのゲーム開発パイプラインで必要となるインターオペラビリティやカスタマイズ性を生み出すためのものです。解釈が曖昧だったり、必要なオプションを省略した場合、COLLADA を利用することで得られる利益や効用を著しく損なってしまう可能性があります。このセクションは、そういった問題が発生してしまうのを最小限に抑えるために記述されています。

このセクションで必要とされている各機能は、COLLADA 規格適合性試験に用意されている複数のテストケースでチェックしてあります。COLLADA 規格適合性試験というのは、Maya®、XSI、3DS Max のエクスポータとインポータのテストを自動化するツールセットです。それぞれのテストケースは、ツールのCOLLADA インポート/エクスポート用プラグインで得られたコンテンツと、ネイティブのコンテンツを比較するようになっており、比較の結果は HTML ページとスプレッドシートの両方にキャプチャされます。

エクスポータ

範囲

COLLADA エクスポータの役割は、指定されたデータをすべて特定の必須オプションにしたがって書き出 すことです。

要件

階層および変換

データ	エクスポートの可/不可
平行移動	平行移動のエクスポートが可能でなければなりません。
拡大/縮小	拡大/縮小のエクスポートが可能でなければなりません。
回転	回転のエクスポートが可能でなければなりません。
親子関係	親子関係のエクスポートが可能でなければなりません。
静的オブジェクトのインスタンス化	静的オブジェクトのインスタンスのエクスポートが可能でなければ
	なりません。そのようなオブジェクトは複数の変換を持つことがで
	きます。
アニメーションオブジェクトの	アニメーションオブジェクトのインスタンスのエクスポートが可能
インスタンス化	でなければなりません。そのようなオブジェクトは複数の変換を持
	つことができます。
傾斜	傾斜のエクスポートが可能でなければなりません。
透明度/反射率	透明度や反射率の追加マテリアル・パラメータのエクスポートが可
	能でなければなりません。
テクスチャマッピング方式	テクスチャマッピング方式(円筒形や球形など)のエクスポートが
	可能でなければなりません。
ジオメトリなしの変換	ジオメトリのないもの(ロケータや NULL など)を変換できる必要
	があります。

マテリアルとテクスチャ

データ	エクスポートの可/不可
RGB テクスチャ	任意の数の RGB テクスチャのエクスポートが可能でなければなりま
	せん。
RGBA テクスチャ	任意の数の RGBA テクスチャのエクスポートが可能でなければなりま
	せん。
焼付け手続き型テクスチャ座標	焼付け手続き型テクスチャ座標のエクスポートが可能でなければな
	りません。
共通プロファイルのマテリアル	共通プロファイルのマテリアル (PHONG、LAMBERT など) のエクスポ
	ートが可能でなければなりません。
マルチテクスチャリング	マテリアルごとに複数のテクスチャのエクスポートが可能でなけれ
	ばなりません。
面単位のマテリアル	面単位のマテリアルのエクスポートが可能でなければなりません。

頂点属性

データ	エクスポートの可/不可
頂点テクスチャ座標	頂点ごとに任意の数のテクスチャ座標のエクスポートが可能でなければなりま
	せん。
頂点法線	頂点法線のエクスポートが可能でなければなりません。
頂点従法線	頂点従法線のエクスポートが可能でなければなりません。
頂点接線	頂点接線のエクスポートが可能でなければなりません。
頂点 UV 座標	頂点 UV 座標(テクスチャ座標とは別)のエクスポートが可能でなければなりま
	せん。
頂点カラー	頂点カラーのエクスポートが可能でなければなりません。
カスタム頂点属性	カスタム頂点属性のエクスポートが可能でなければなりません。

アニメーション

特に指定がない限り、ユーザが指定したオプションに応じて、以下の種類のアニメーションをすべて、 サンプルもしくはキーフレームを利用してエクスポートできなければなりません。

通常、アプリケーションでは、大雑把なキーフレームと、複雑な制御や制約を利用してアニメーションを表現します。両者は、アニメーションが再生されて最終的な出力を提供する際に、アプリケーションによって組み合わせられます。アプリケーションがエクスポートするアニメーションデータを解析する際、そのアニメーションで利用されている制約やコントローラが全部は実装できず、オリジナルに対して忠実ではないアニメーションが出力されてしまう可能性があります。したがって、個々の変換データを指定された間隔で定期的にエクスポートするオプションが必要となります。サンプルがキーフレームより優先される場合には、ユーザがサンプリングレートを指定できなければなりません。

利用可能なアニメーション用のパラメータは、どれもエクスポートできなければなりません。そのようなパラメータとしては、以下のものがあります。

- マテリアルパラメータ
- テクスチャパラメータ
- UV 位置パラメータ
- 光源パラメータ
- カメラパラメータ
- シェーダパラメータ
- 全体環境パラメータ
- メッシュ構築パラメータ
- ノードパラメータ
- ユーザパラメータ

かならず一定のアニメーションデータがエクスポートできるよう保証するために、アプリケーションは、シーン中に含まれているアニメーションクリップごとに<animation>要素を 1 つエクスポートすべきです。たとえば、走っているアニメーションと歩いているアニメーションの各クリップをユーザが別々に定義した場合、エクスポート用のアプリケーションは、走っているアニメーションに関係したチャンネルをすべて1つのアニメーションオブジェクトにまとめ、また歩いているアニメーションに関係したチャンネルをすべてもう1つのアニメーションオブジェクトにまとめるべきです。1つのシーン中で複数のアニメーションクリップをアプリケーションがサポートしていない場合、アプリケーションのデフォルト動作として、シーン中の全部のアニメーションチャンネルも含め、単一のアニメーションとしてエクスポートすべきです。これらのアニメーションのリファクタリングは、外部ツールで行えます。

データ	エクスポートの可/不可
可変サンプリングレート	可変サンプリングレートを利用したアニメーションのエクスポートが可能でな
	ければなりません。これは、アニメーションの異なる部分に対してユーザが別
	のサンプリングレートを指定してエクスポートを行うことを可能にします。
バインドポーズ法線	バインドポーズ法線のエクスポートが可能でなければなりません。
ボーン	ボーンアニメーションのエクスポートが可能でなければなりません。
骨格アニメーション	骨格アニメーションのエクスポートが可能でなければなりません。
スムーズバインディング	スムーズバインディングによる骨格のアニメーションがエクスポート可能でな
による骨格のアニメーシ	ければなりません。
ョン	
光源パラメータのアニメ	光源パラメータのアニメーションのエクスポートが可能でなければなりませ
ーション	λ_{\circ}
カメラアニメーション	カメラアニメーションのエクスポートが可能でなければなりません。
キーフレーム変換アニメ	キーフレーム変換アニメーションをエクスポートできる必要があります。
ーション	
アニメーション関数曲線	アニメーション関数曲線をエクスポートできる必要があります。

シーンデータ

データ	エクスポートの可/不可
空のノード	空のノードをエクスポートできる必要があります。
カメラ	カメラのエクスポートが可能でなければなりません。
スポットライト	スポット光源のエクスポートが可能でなければなりません。
平行光源	平行光源のエクスポートが可能でなければなりません。
点光源	点光源のエクスポートが可能でなければなりません。
面光源	面光源のエクスポートが可能でなければなりません。
環境光	環境光源のエクスポートが可能でなければなりません。
静止物体のバウンディン	静止物体のバウンディングボックスのエクスポートが可能でなければなりま
グボックス	せん。
アニメーション物体のバ	アニメーション物体のバウンディングボックスのエクスポートが可能でなけ
ウンディングボックス	ればなりません。

エクスポータのユーザインタフェースオプション

データ	エクスポートの可/不可
三角形リストのエクスポートオプション	三角形リストのエクスポートが可能でなければなりません。
ポリゴンリストのエクスポートオプション	ポリゴンリストのエクスポートが可能でなければなりませ
	λ_{\circ}
焼付け行列・オプション	焼付け行列のエクスポートが可能でなければなりません。
単一の〈matrix〉要素オプション	各ノードに〈matrix〉要素を 1 つだけ含んだインスタンス文
	書のエクスポートが可能でなければなりません(詳しくは以
	下のセクションを参照してください)。

単一の〈matrix〉要素オプション

COLLADA では、指定された順序で合成される各類の変換要素のスタックによって「変換」を表現するこ とができます。このような表現は、アプリケーション内部で複数の独立した変換ステージを利用する際 に、変換を正しく保存したり交換したりするのに便利です。ただし、この機能をアプリケーションで実 装する際には、単一の焼付け<matrix>だけを保存する機能を残しながら、ユーザオプションとして提 供すべきです。

この要件には、変換スタック内部の特定の要素を対象としているデータ(アニメーションなど)はどれ も、代わりに、その行列を参照する必要がある、という副作用があります。

コマンドライン操作

エクスポータの機能は、すべて、コマンドラインインタフェースから実行できる必要があります。この 要件の趣旨は、ユーザとのやり取りを必要とするエクスポータを避けることです。もちろん、便利なインタラクティブ・ユーザインターフェースがあるのは良いことですが、そのインタラクティブな機能は (必須ではなく) オプションである必要があります。

オプション

エクスポータは、新規のデータを任意に追加することができます。

シェーダのエクスポート

エクスポータは、シェーダ (Cg、GLSL、HLSL など) をエクスポートしてもかまいません。

インポータ

節囲

COLLADA インポータの役割は、指定された全データを、特定の必須オプションにしたがって読み込むことです。

一般に、インポータは、対応するエクスポータが行う機能すべての完全な逆機能を提供する必要があります。。インポータは、あらゆるエクスポート・オプションの逆の機能をできるだけ提供する必要があります。

このセクションで説明するのは、インポータの要求がエクスポータの逆機能とは異なっていたり、もっと詳しい説明が必要な場合についてだけです。

要件

COLLADA に準拠したデータは、ツールによって認識されず、後でエクスポートされるために保持されるものが含まれていたとしても、すべてインポート可能でなければなりません。エクスポートされたデータ中に同期を必要とするものがあるかどうかを外部のツールで調べるには、<asset>要素を利用します。

オプション

インポータに固有のオプションはありません。

このページは空白です。

6章 COLLADA フィジックス

このページは空白です。

物理的な単位について

それぞれの値が正しく一致する限りにおいては、量子と相対論的な効果を無視してニュートン物理学の シミュレーションを適切に行うことができます。たとえば、距離と長さをメートル単位で指定でき、時 間が秒単位の場合、その影響力はニュートン物理学にしたがうことになるはずです。

こういった理由から、多くのフィジックスエンジンは単位がなく、COLLADA フィジックスも、それ自身で各コンポーネントの単位を指定するよう強制していません。必要であれば、COLLADA ドキュメントの「ベース」から単位を取り出すことができます。

慣性について

物体を加速させるのにどれくらいの力が必要なのかを記述する量は「慣性」と呼ばれ、I という文字で表されます。これと同じ意味で、回転に関しては「慣性モーメント」と呼ばれています。 たとえば、回転の中心から距離 r の位置にある単一の無限に小さな質量 m では(アームとも呼ばれます)、以下のようになります。

 $I=mr^2$

こういった質量の角運動量は、慣性と角運動速度の積として求められます。

任意の形状と分散質量を持った剛体の場合、その物体は、可変の質量を持ったバラバラの粒子セットとみなすことができます。

物体の慣性モーメントは、それぞれの粒子の質量の積と、回転軸からの距離の平方を合計したものとなります。

慣性は、任意のポイントと、剛体への相対的な任意の角度で導き出すことが可能です。しかしながら、質量の中心(重心)で表現する方がもっと簡単です(むしろ、その方がより直感的です。というのも、自由に回転される物体は、常に重心で回転されるからです)。

一般に、慣性は 2 階層目のテンソル(張筋)として表現され、「3×3 行列」の形式で記述されます。 これは、次のようにして計算されます。

$$I_{CM} \equiv \begin{bmatrix} \sum_{i} m_{i} \Box y_{i}^{2} \Box z_{i}^{2} \Box & -\sum_{i} m_{i} x_{i} y_{i} & -\sum_{i} m_{i} x_{i} z_{i} \\ -\sum_{i} m_{i} y_{i} x_{i} & \sum_{i} m_{i} \Box z_{i}^{2} \Box x_{i}^{2} \Box & -\sum_{i} m_{i} y_{i} z_{i} \\ -\sum_{i} m_{i} z_{i} x_{i} & -\sum_{i} m_{i} z_{i} y_{i} & \sum_{i} m_{i} \Box x_{i}^{2} \Box y_{i}^{2} \Box \end{bmatrix}$$

- mは、粒子の質量です。
- (xi, yi, zi)は、粒子の位置を表します。

慣性テンソルの対角線成分は慣性モーメントと呼ばれ、これに対して、非対角線成分は慣性の積を意味 します。

慣性テンソル (CMの位置) は、シンメトリックである点に注意してください。

また、参照フレームが剛体の(ローカルの)主軸に揃えられている場合、非対角線成分は 0 となります。純粋な対角線成分の 3×3 テンソルのようなものは、3 つの値(float3)で表現することになります。そのため、たとえば、「アイソレーション」中の左上の要素を調べると、次のように解釈することができます。つまり、ローカルの X 軸に対する回転の場合、慣性は、それぞれの粒子の質量に「Y-Z プレーン上のアーム」の平方を掛け合わせたものの合計となります。もちろん、これは慣性モーメント($I=mr^2$)の定義です。

また、(質量の)オフセンターの位置でサンプリングする場合には、さらに追加の慣性モーメントがあります。

$$I_{t} \equiv \begin{bmatrix} m \Box y_{0}^{2} \Box z_{0}^{2} \Box & -m x_{0} y_{0} & -m x_{0} z_{0} \\ -m y_{0} x_{0} & m \Box z_{i}^{2} \Box x_{i}^{2} \Box & -m y_{0} z_{0} \\ -m z_{0} x_{0} & -m z_{0} y_{0} & m \Box x_{0}^{2} \Box y_{0}^{2} \Box \end{bmatrix}$$

- mは、物体の質量です。
- (x0, y0, z0)は、慣性が計算されるポイントです。

任意のポイントでの物体の慣性は、慣性テンソル (CM の位置) と、この「オフセット」との合計となります。

新しいジオメトリの種類

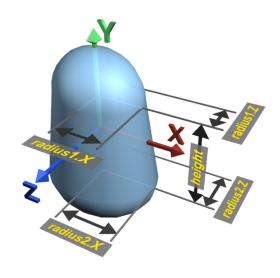
フィジックスエンジンは、任意の形状よりも、解剖学的な形状(プリミティブ)と凸包をコリジョン形状として利用した方がより効率的に処理できます。そのため、COLLADA 1.4.0 では、<convex_mesh>だけでなく、<box>や<sphere>といったプリミティブなジオメトリの種類がいくつか追加されています。これらはレンダリングを意図したものではありません。理由は、メッシュやサブ分割された表面の方が、レンダリング目的にもっと適しているからです。しかしながら、先に述べた表現は、以下の理由から、他のすべてのジオメトリの種類と互換性を持ちます。

- 可能な限り一貫性が得られるように努力するのが一般であるから(コードの重複などを減らすため)。
- フィジックスで利用されるコリジョン形状を視覚化すると役立つアプリケーションもあり、この一貫性があれば、そういったものを通常の方法でインスタンス化/レンダリングできるから。
- コリジョン検出よりも、解剖学的な形状の方が役に立つから。たとえば、一部のモデラーでは、 特定の領域を照らすプリミティブ(球体やディスクなど)が利用できます。これらは、放射マテ リアルを持った(通常はインスタンス化された)ジオメトリプリミティブとして表現することが 可能です。

このシステム(解剖学的な形状+凸状メッシュ)で任意の形状が記述できます。したがって、 <bounding_box>要素はもはや必要ありません。

ジオメトリプリミティブの座標系規則

<cylinder>、<tapered_cylinder>、<capsule>、<tapered_capsule>では、主軸は Y 軸 (右手系で上方向の正の Y) で、以下の例に示したように、X 軸と Z 軸に沿って半径を指定します。



box

概要

軸に沿って中央揃えされたボックスプリミティブ

コンセプト

ジオメトリプリミティブまたは解剖的な形は、フィジックスのコリジョン形状に役立ちます。詳しくは 「新しいジオメトリの種類」を参照してください。

属性

<box>要素に属性はありません。

関連要素

<box>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	shape
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<half extents=""></half>	ボックスの広がりを表す3つの浮動小数点	なし	1

例

<box>

<half_extents> 2.5 1.0 1.0 </half_extents> </box>

capsule

概要

ローカルのY軸に沿って中央揃えされたカプセルプリミティブ

コンセプト

ジオメトリプリミティブまたは解剖的な形は、フィジックスのコリジョン形状に役立ちます。詳しくは「新しいジオメトリの種類」を参照してください。

属性

<capsule>要素に属性はありません。

関連要素

<capsule>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	shape
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<height></height>	半球の中央につながった線セグメントの長さを	なし	1
	表す浮動小数点		
<radius></radius>	カプセル (おそらく楕円形) の半径を表す 2 つ	なし	1
	の浮動小数点		

```
<capsule>
  <height> 2.0 2.0 </height>
  <radius> 1.0 1.0 </radius>
</capsule>
```

convex_mesh

概要

コンセプト

<convex_mesh>の定義は<mesh>と同じですが、完全な記述(<source>、<vertices>、<polygons>など)の代わりに、形状を導き出す別の<geometry>を単に指し示すだけである点が違います。つまり、その<geometry>の凸包を計算すべきであることを意味し、オプションのconvex_hull_of属性で示すことになります。

フィジックスのために(レンダリングに利用される)<mesh>が再利用でき、ドキュメントのサイズを 最小限に抑えることが可能で、オリジナルの<mesh>へのリンクを維持できるため、非常に役立ちます。 <convex_mesh>を記述する最小限の方法は、それぞれの頂点を(<vertices>要素と対応するソース を用いて)指定し、そのポイントクラウドの凸包をインポータに計算させることです。

属性

<convex mesh>要素には、以下の属性があります。

convex hull of	xs:anyURI
----------------	-----------

convex_hull_of はオプションの属性で、その凸包を計算するためのジオメトリの URI 文字列を表します。

関連要素

<convex mesh>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	geometry
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

詳細と子要素のリストに関しては<mesh>の解説を参照してください。

cylinder

概要

シリンダプリミティブは、ローカルのY軸に対して中央に揃えされます。

コンセプト

ジオメトリプリミティブまたは解剖的な形は、フィジックスのコリジョン形状に役立ちます。詳しくは「新しいジオメトリの種類」を参照してください。

属性

<cylinder>要素に属性はありません。

関連要素

<cylinder>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	shape
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<height></height>	Y軸に沿ったシリンダの長さを表す浮動小数点	なし	1
<radius></radius>	シリンダ(楕円形も可能)の半径を表す 2 つの浮動小数点	なし	1

例

<cylinder>

<height> 2.0 </height> <radius> 1.0 1.0 </radius>

</cylinder>

force field

概要

force field は汎用的なコンテナです。現時点では、technique と extra の要素だけを持つこと ができます。

コンセプト

force field は剛体などの物理的なオブジェクトに対して影響を及ぼし、physics scene の基でイ ンスタンス化されるか、もしくは physics model のインスタンスです。

属性

<force field>要素には、以下の属性があります。

_		
Г		
	1 d	xs:1D
	_ 0.	

id はオプションの属性で、<force field>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。 この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。

関連要素

<force field>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	library force fields
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<technique></technique>		なし	1回、またはそれ以上
<extra></extra>		なし	任意

備考

現時点では、<force field>用の共通プロファイル/テクニックはありません。<technique>要素に は、整形式の任意の XML データを含めることができます。

```
library force fields>
 <force field>
   <technique profile="SomePhysicsProfile">
    </param>...
      </param>...
    </technique>
 </force field>
</library_force_fields>
```

instance_physics_model

概要

この要素を利用すると、別のフィジックスモデルを持つフィジックスモデル、またはフィジックスシーン中のフィジックスモデルをインスタンス化することができます。

コンセプト

この要素は、2 つの目的に利用します。つまり、あるフィジックスモデルを定義時に別のフィジックスモデルの中へ階層的に埋め込むためと、フィジックスシーン中の完全なフィジックスモデルをインスタンス化するためです。どちらの場合においても含まれている剛体のパラメータと、制限をオーバーライドすることが可能です。

フィジックスシーンの中でフィジックスモデルをインスタンス化する場合、最低でも、フィジックスモデルに含まれている個々の剛体が、影響を与える視覚的な変換ノードと結び付けられているべきです。さらに、インスタンス化されたフィジックスモデルの親属性を指定することもできます。この親は、フィジックスモデルの最初の位置と方向(その剛体に関しても同様です)を決めることになります。親(または祖父など)は一部のアニメーションコントローラの対象となることも可能で、非ダイナミックな剛体のキーフレーム運動を物理シミュレーションと組み合わせることができます。

属性

<instance physics model>要素には、以下の属性があります。

sid	xs:NCName
url	xs:anyURI
parent	xs:anyURI

url は必須の属性で、どの<physics model>をインスタンス化するのかを表します。

parent 属性は、視覚的シーン中のノードの id を指し示します。この属性を利用することで、フィジックスモデルを特定の変換ノードの基でインスタンス化することができ、最初の位置と方向を決め、剛体の運動に影響を与えるようにアニメーション化することが可能です。この属性はオプションです。デフォルトで、フィジックスモデルは、特定の変換ノードではなく、ワールドの基でインスタンス化されます。このパラメータは、現在の<physics_model>の親要素が<physics_scene>の場合にだけ意味を持ちます。

sid はオプションの属性で、親要素中でのユニークな識別子を指定します。この属性を利用することで、アニメーション用に<instance physics model>インスタンスの要素を対象とすることができます。

関連要素

<instance physics model>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	physics scene, physics model
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<pre><instance_rigid_body target="#SomeNode"></instance_rigid_body></pre>	<pre><rigid_body>要素をイン スタンス化して、プロパティの一部またはすべてをオーバーライドします。 target 属性では、剛体インスタンスで上書きされた変換を持つ<node>要素を定義します。</node></rigid_body></pre>	なし	任意
<pre><instance_rigid_constraint></instance_rigid_constraint></pre>	プロパティの一部をオーバーライドするために、 <rigid_constraint>要素をインスタンス化します。 この要素には target 属性はありません。理由は、 <rigid_constraint>子要素でどの<node>要素を対象とするのか定義するからです。</node></rigid_constraint></rigid_constraint>	なし	任意
<extra></extra>		なし	任意
<pre><instance_force_field></instance_force_field></pre>	フィジックスモデルに影響 を及ぼす <force_field>要 素をインスタンス化しま す。</force_field>	なし	任意

instance_rigid_body

概要

この要素は、<instance physics model>の中の<rigid body>をインスタンス化します。

コンセプト

剛体というのは、突き詰めると、<scene>の中にある<node>の変換セットで、<physics_model>の直下か、もしくは<rigid constraint>の下に位置しています。

<physics_model>をインスタンス化する際、最低でも、<physics_model>に含まれている剛体は、
関連する<node>要素と結び付けらていなければなりません。

この<instance rigid body>要素は、以下の3つの目的に利用します。

- <node>要素へのリンクを指定するため
- オプションで特定のインスタンスで<rigid body>のパラメータをオーバーライドするため
- <rigid_body>インスタンスの最初の状態(線速度と角運動速度)を指定するため

属性

<instance rigid body>要素には、以下の属性があります。

sid	xs:NCName
body	xs:NCName
target	xs:anyURI

sid はオプションの属性で、親要素中でのユニークな識別子を指定します。この属性を利用することで、アニメーション用の<rigid_body>インスタンスの要素を対象とすることができます。body は必須の属性で、どの<rigid_body>をインスタンス化するのかを表します。target は必須の属性で、この<rigid_body>インスタンスでどの<node>が影響を受けるのかを表します。

関連要素

<instance rigid body>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	instance physics model
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

<instance_rigid_body>要素とその technique は<rigid_body>要素の場合と同じ子を持ち、そのテクニック要素は以下を追加します。

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<velocity></velocity>	rigid body インスタンスの初期状態	0, 0, 0	0または1
	の線速度を指定します。		
<angular_velocity></angular_velocity>	rigid_body インスタンスの初期状態の角運動速度を、各軸に対して秒ごとの角度を単位として X-Y-Z オイラー回転の形式で指定します。	0, 0, 0	0または1

```
<physics scene id="ColladaPhysicsScene">
 <instance physics model sid="firstCatapultAndRockInstance"</pre>
                    url="#catapultAndRockModel" parent="#catapult1">
<!- この physics model 中の剛体の属性をオーバーライドして、 -->
<!- rigid_body の初期速度を指定する。
   <instance rigid body body="./rock/rock" target="#rockNode">
     <technique common>
       velocity>0 -1 0/linear velocity> <!-オプションのオーバーライド-->
       <mass>10</mass>
                                              <!-大きくする
     </technique common>
   </instance_rigid_body>
<!- このインスタンスはノードに剛体を割り当てるだけで、オーバーライドはしない。-->
   <instance rigid body body="./catapult/base" target="#baseNode"/>
 </instance physics model>
</physics scene>
```

physics_material

概要

この要素は、オブジェクトの物理的なプロパティを定義します。パラメータを伴ったテクニック/プロファイルが含まれます。共通プロファイルでは、static_friction といった組み込み名を定義しています。

コンセプト

フィジックスのマテリアルは、library_physics_materials>要素の下に保存されてインスタンス化されることが可能です。。

属性

<physics material>要素には、以下の属性があります。

l i d	I vc · ID	
Iu	1 42.10	

id はオプションの属性で、<physics_material>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。

関連要素

<physics material>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	library physics materials
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<technique common=""></technique>	フィジックス・マテリアル用の	なし	1
_	共通テクニックを定義します。		
<technique></technique>	フィジックス・マテリアル用の	なし	1またはそれ以上
	プロファイルを定義します。		

technique_common の子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<static_friction></static_friction>	静的摩擦係数	0	0または1
0.23			
<dynamic friction=""></dynamic>	動的摩擦係数	0	0または1
0.23			
<restitution></restitution>	弾力または弾性とも呼ばれ、衝	0	0または1
0.2	撃に温存される運動エネルギー		
	の比率(通常、0.0~1.0 の範		
	囲)		

physics_model

概要

この要素で、何度もインスタンス化される剛体と制約の複雑な組み合わせを構築することができます。

コンセプト

この要素は、<physics_scene>の基でインスタンス化される物理オブジェクトを定義してグループ化するのに利用します。

フィジックスモデルは、単一の剛体のように単純であるか、もしくは骨と身体のパーツ(つまり、個々の剛体)を持ち、それらを筋肉(つまり、剛体制約)で結び付けている人物のキャラクタで生化学的に表現されたように複雑となります。

また、フィジックスモデルには、事前に定義された他のフィジックスモデルを含めることも可能です。 たとえば、家のフィジックスモデルには、煉瓦で造られた壁など、インスタンス化された数多くのフィ ジックスモデルを含めることができます。

この要素でそういったモデルの構造を定義し、<instance_physics_model>要素で

<physics_model>をインスタンス化して、パラメータの多くをオーバーライドすることができます。フィジックスモデルの中で定義されている各子要素は、id 属性の代わりに、sid 属性を持ちます。この sid 属性は、インスタンス化時にフィジックスモデルのコンポーネントにアクセスしてオーバーライドするのに利用されます。

属性

<physics model>要素には、以下の属性があります。

id	xs:ID
name	xs:NCName

id はオプションの属性で、<physics_model>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。

name はオプションの属性で、<physics model>要素の名前を含んだテキスト文字列です。

関連要素

<physics model>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	library physics models
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<rigid_body sid=""></rigid_body>	<rigid_body>要素を定義し</rigid_body>	なし	任意
	て、デフォルト以外のプロパテ		
	ィを設定します。		
<rigid_constraint< td=""><td><rigid_constraint>要素を</rigid_constraint></td><td>なし</td><td>任意</td></rigid_constraint<>	<rigid_constraint>要素を</rigid_constraint>	なし	任意
sid="">	定義して、一部またはすべての		
	プロパティをオーバーライドし		
	ます。		
<pre><instance_physics_model< pre=""></instance_physics_model<></pre>	指定された URL からフィジック	なし	任意
sid="" url="#">	スモデルをインスタンス化し		
	て、他の子要素と区別するため		
	に、sid を割り当てます。		
<asset></asset>		なし	0または1
<extra></extra>		なし	任意

```
library physics models>
<!-- 他のPhysics model またはphysics scene で再利用したり修正できるように、 -->
<!- カタパルトの physics_model を定義する。
                                                                 -->
  <physics model id="catapultModel">
<!-- カタパルトのベース。インラインを定義 -->
   <rigid body sid="base">
     <technique common>
       <dynamic>FALSE</dynamic">
         <instance geometry url="#catapultBaseConvexMesh"/>
         <physics material url="#catapultBasePhysicsMaterial"/>
       <linear velocity>2 0 0</linear velocity>
<!-- カタパルトのモデルへの相対的なベースのローカル位置 -->
       <translate> 0 -1 0 </translate>
     </technique common>
   </rigid body>
<!-- 同じように、カタパルトの上部を定義する。 -->
   <rigid body sid="top">
   </rigid body>
<!-- カタパルトの動きを制御する角スプリングを定義する。
    オプションで、剛体の制約を他の physics model からコピーするために URL を指定する。-->
   <rigid constraint sid="spring constraint">
       <ref attachment body="./base">
         <translate sid="translate">-2. 1. 0</translate>
       </ref attachment>
       <attachment body="./top">
         <translate sid="translate">1.23205 -1.86603 0</translate>
         <rotate sid="rotateZ">0 0 1 -30.</rotate>
       </attachment>
     <technique common>
       imits>
         <swing cone and twist>
           <min> -180.0 0.0 0.0 0.0 </min>
```

```
<max> 180.0 0.0 0.0 0.0 </max>
         </swing cone and twist>
       </limits>
       <spring>
         <angular>
           <stiffness>500</stiffness>
           <damping>0.3</damping>
           <target value>90</target value>
         </angular>
       </spring>
     </technique_common>
   </rigid constraint>
 </physics_model>
<!-- この physics model は、事前に定義した 2 つのモデルを組み合わせる。 -->
 <physics model id="catapultAndRockModel">
<!-- この石は、事前に定義されている physics model のライブラリから取得する。 -->
   <instance_physics_model sid="rock">
url="http://feelingsoftware.com/models/rocks.dae#rockModels/bigRock">
<!-- catapultAndRockModel 空間のカタパルト上に石を配置する。 -->
     <translate> 0 4 0 </translate>
   </instance physics model>
   <instance_physics_model sid="catapult" url="#catapultModel"/>
 </physics_model>
</library_physics_models>
```

physics_scene

概要

この要素は、フィジックスオブジェクトがインスタンス化/シミュレーション化される環境を指定する ためのものです。

コンセプト

COLLADA では、主に以下の理由で、複数のシミュレーションを同時に実行できるようになっています。

- 複数のシミュレーションで別々のグローバルな設定が必要な場合があり、他のフィジックスエン ジンや別のハードウェア上で実行される場合さえあります。
- 高レベルなグループ化機能があれば、パフォーマンスを最適化するために繰り返し処理を最小限 に抑えることができます。たとえば、あるフィジックスシーンでの剛体は、他のフィジックスシ ーンの剛体とコリジョンしないことがわかっているため、それらの間でコリジョンテストを行う 必要はありません。
- 複数の詳細レベル (LOD) をサポートできます。

<physics scene>要素には、technique と extra の要素と、<instance physics model>要素 のリストを含めることができます。アクティブな<physics scene>は(シミュレートされているもの は)、メインの<scene>の基でインスタンス化することで示されます。

属性

<physics scene>要素には、以下の属性があります。

id	xs:ID
name	xs:NCName

id はオプションの属性で、<physics scene>要素のユニークな識別子を含んだテキスト文字列です。 この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、<physics scene>要素の名前を含んだテキスト文字列です。

関連要素

<physics scene>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	library physics scenes
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<pre><instance_physics_model></instance_physics_model></pre>	<physics_model>要素をイ</physics_model>	なし	任意
	ンスタンス化して、その子の		
	一部または全部をオーバーラ		
	イドすることができます。		
<asset></asset>		なし	0または1
<technique_common></technique_common>	physics_scene の共通テク	なし	1
_	ニックのパラメータを指定し		
	ます。		
<technique></technique>	カスタムのテクニックを指定	なし	任意
	します。		
<extra></extra>		なし	任意

```
library_physics_scenes>
<!-- 通常のphysics scene -->
  <physics scene id="ColladaPhysicsScene">
   <technique common>
     <timestep>3.e-002</timestep>
     <gravity>0 -9.8 0</gravity>
   </technique_common>
  <instance physics model sid="firstCatapultAndRockInstance">
                   url="#catapultAndRockModel" parent"#catapult1">
<!-- オーバーライドした physics model のインスタンス
    現在の変換行列で、ワールド空間中の physics model の初期位置と方向を決める。 -->
     <instance_rigid_body body="./rock/rock" target="#rockNode>
       <technique common>
         <linear_velocity>0 -1 0</linear_velocity> <!--オプションのオーバーライド-->
                                                 <!--大きくする
         <mass>10</mass>
                                                                    -->
       </technique common>
     </instance rigid body>
     <instance_rigid_body body="./catapult/top" target="#catapultTopNode"/>
     <instance rigid body body="./catapult/base" target="#baseNode"/>
   </instance physics model>
  </physics scene>
</library physics scenes>
<!-- 2 つの物理的にシミュレーションされたカタパルトのアームがインスタンス化されるシーン -->
<visual scene id="battlefield">
<node id="catapult1">
 <translate sid="translate">0 -0.9 0</translate>
  <node id="rockNode">
   <instance_geometry url="#someRockVisualGeometry"/>
 </node>
 <node id="catapultTopNode">
   <instance geometry url="#someVisualCatapultTopGeometry"/>
 </node>
 <node id="catapultBaseNode">
   <instance_geometry url="#someVisualCatapultBaseGeometry"/>
 </node>
</node>
<!-- 親ノードの1つをインスタンス化して physics model を複製する。 -->
```

```
<node id="catapult2">
                          <!-- 2 番目のカタパルトの位置を別の場所に位置させる -->
   <translate/>
   <rotate/>
   <instance_node url="#catapultNode1"/> <!-- physics_model と表示を複製 -->
 </node>
</ri>
<scene>
<!-- visual_scene に physics_scene が適用可能であることを示す。 -->
 <instance_physics_scene url="#ColladaPhysicsScene"/>
 <instance_visual_scene url="#battlefield"/>
</scene>
```

plane

概要

この要素は、無限プレーンのプリミティブを表します。

コンセプト

ジオメトリプリミティブまたは解剖的な形は、フィジックスのコリジョン形状に役立ちます。詳しくは「新しいジオメトリの種類」を参照してください。

属性

<plane>要素に属性はありません。

関連要素

<plane>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	shape
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<equation></equation>	プレーンの方程式の係数を表す 4 つの浮動小数点	なし	1
	Ax + By + Cz + D = 0		

例

<plane>

```
<!- //Plane equation: Ax + By + Cz + D = 0 -->
<!- //A, B, C, D coefficients (normal & D) -->
  <equation> 0.0 1.0 0.0 0.0 </equation> // The X-Z plane (ground) -->
</plane>
```

rigid_body

概要

この要素を利用すると、形状を崩さないシミュレーションした物体を記述することができます。それら の物体は、各種の制約(関節やボール管継手など)で結び付けられていたり、また結び付けられていな い場合もあります。複雑なモデルをインスタンス化できるように、剛体や制約などは <physics model>要素にカプセル化されます。

コンセプト

剛体は、コリジョン検出のためのパラメータと形状の階層構造で構成されています。この階層構造中の 各形状は、複雑なコリジョン形状(バウンディング形状)を構築できるように、拡大・縮小、回転、変 形可能となっています。これらの形状は、1つまたは複数の<shape>要素で記述します。

属性

<rigid body>要素には、以下の属性があります。

sid	xs:NCName
name	xs:NCName

sid 属性は、<rigid body>要素の範囲化された識別子を含むテキスト文字列です。この値は、兄弟 関係のあるどの要素に対してもユニークでなければなりません。

sid は必須の属性で、<physics model>がインスタンス化される際に、それぞれの剛体を視覚的な <node>に関連付けるのに利用されます。

name はオプションの属性で、<rigid body>要素の名前を含むテキスト文字列です。

関連要素

<rigid body>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	physics model
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<pre><technique common=""></technique></pre>	剛体のための共通プロファイルの表現を指	なし	1
_	定します。		
<technique></technique>	複数の表現を可能とするために、剛体の対	なし	任意
	象プロファイルを指定します。		
<extra></extra>	〈rigid_body〉に情報を追加する複数表現	なし	任意
	可能なユーザ定義データ(〈technique〉要		
	素のように、ベースデータを切り替えるの		
	とは反対の操作です)		

rigid_body/technique_common の子要素

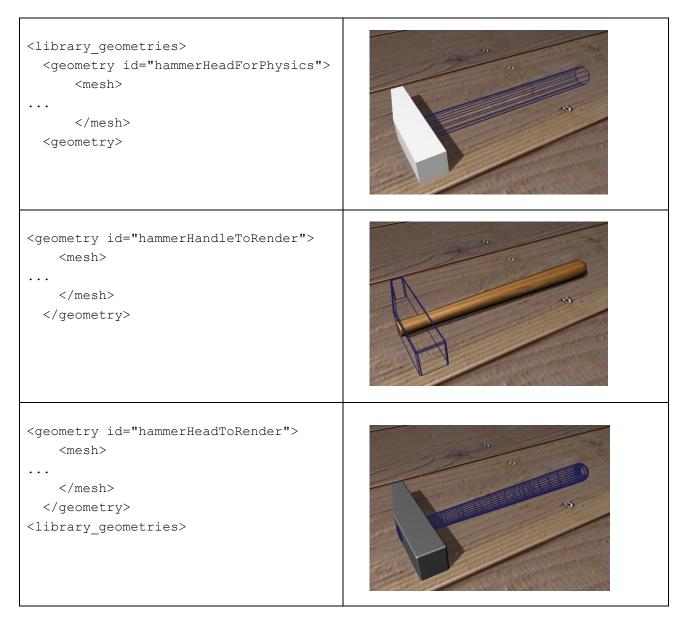
名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<dynamic>FALSE</dynamic>	FALSE の場合、	TRUE	0または1
	rigid_body は動かすこ		
	とができません。		
<mass_frame></mass_frame>	「ルート」図形のローカル	• • •	0または1
<translate></translate>	の原点に対して相対的な剛		
	体の重心と方向を定義しま		
<rotate></rotate>	す。これは、慣性テンソル	軸となります)	
	の非対角成分(慣性の積)		
	をすべて0にし、対角成分		
	(慣性モーメント)だけを		
	保存することができます。		
<inertia></inertia>	float3:慣性テンソル	質量、形状の体積、	0または1
1 1 1	(慣性モーメント)の対角		
	成分で、重心のローカルフ	ます。	
	レームで表現されます(上		
	記を参照)。		
<mass>0.5</mass>	剛体の全体の質量	密度 X の全体の形状	0または1
		の体積から導き出さ	
		れます。	
<pre><param/></pre>	非共通テクニック/プロフ	なし	任意
	ァイルのためのユーザ定義		
	パラメータ		
<physics_material>または</physics_material>	rigid_body のため	なし	1
<pre><instance material<="" physics="" pre=""></instance></pre>	physics_material を定		
>	義または参照します		

密度、質量、慣性(テンソル)の定義規則

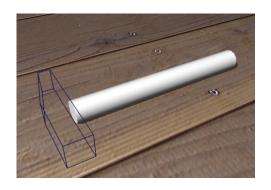
- 剛体とその形状のどちらも、質量または密度を指定してもかまいません。どちらも定義しなかった場合、密度のデフォルトは1.0となり、質量は形状の全体の体積を利用して計算されます。
- 質量を定義した場合、密度は無視されます。
- 体積と全体の質量は、それぞれの形状が単に交差している場合でも、形状の体積と質量の合計として計算されます。和集合や差分といった論理演算(CSG)は行われません。
- 剛体の質量や慣性などは、最終的な定義です。形状の質量の合計がその値にまで加算されなかった場合、剛体の質量まで加算されるように正規化されます。たとえば、質量全体が 6 で、2 つの形状を持つ物体 (mass = 1 と mass = 2) は、全体の質量が(6) = 2+4 とみなされます。

例

以下は、複合化した剛体の例です。形状の違いがフィジックス(シリンダプリミティブと単純な凸包) を意味し、レンダリング対象(テクスチャ化/テーパー化された柄の部分と、傾斜された頭の部分)と なる点に注意してください。



```
library physics models>
  <physics model</p>
id="HammerPhysicsModel">
    <rigid body
sid="HammerHandleRigidBody">
      <technique common>
        <mass> 0.25 </mass>
        <mass_frame> ... </mass frame>
        <inertia> ... </inertia>
        <shape>
        <physics material</p>
url="#WoodPhysMtl"/>
<!- This geometry is small and not
used elsewhere, so it is inlined -->
          <cylinder>
            <height> 8.0 </height>
            <radius> 0.5 </radius>
          </cylinder>
        </shape>
        <shape>
          <mass> 1.0 </mass>
          <!- This geometry is
referenced rather than inlined -->
          <physics material</pre>
url="#SteelPhysMtl"/>
          <instance_geometry</pre>
url="#hammerHeadForPhysics"/>
          <translate> 0.0 4.0 0.0
</translate>
        </shape>
      </technique common>
    </rigid body>
  </physics model>
</library rigid bodies>
```



rigid constraint

概要

この要素で、<riqid body>のようなコンポーネントを、可動パーツを持った複雑なフィジックスモ デルに結び付けることができます。

コンセプト

一般に、バネやボール管継手など、いろいろな種類の制約を利用していくつかの剛体を結び付けると、 面白いフィジックスモデルを組み立てることができます。COLLADA では、2 つの剛体をリンクしたり、 または剛体とシーン階層中(例:ワールド空間)の座標フレームをリンクするための制約をサポートし ています。制約プリミティブ要素の膨大な組み合わせを定義する代わりに、COLLADA では非常に柔軟な 1 つの要素を提供しています。つまり、汎用的なレベル 6 の自由度 (DOF) を持った制約です。この汎 用的な制約を利用して、もっと簡単な制約(たとえば、線形スプリングや角スプリング、ボール管継手、 ヒンジなど)を表現することができます。 制約は、以下のように指定します。

- 剛体のローカル空間、もしくはシーン階層中の座標フレームへの相対的な変形と方向を利用して 定義された 2 つのフレームをアタッチします。COLLADA の他の部分と一貫性を取るために、これ は標準の<translate>要素と<rotate>要素を利用して表現します。
- 自由度 (DOF) で指定します。DOF では、変形の特定の角度または回転の角度に沿って発生する可 変性を、アタッチされたフレームの空間中で表現して指定します。たとえば、ドアのヒンジ部分 は、通常、特定の回転に沿って自由度が 1 です。それとは反対に、スライダのジョイント部分は、 単一の変形軸に沿って自由度が 1 となります。自由度と制限は、非常に柔軟な<limits>要素で 指定します。

属性

<rigid constraint>要素には、以下の属性があります。

sid	xs:NCName
name	xs:NCName

sid 属性は、<rigid constraint>要素の範囲化されたユニークな識別子を含んだテキスト文字列で す。この値は、インスタンス文書中でユニークでなければなりません。 name はオプションの属性で、<riqid body>要素の名前を含むテキスト文字列です。

関連要素

<rigid constraint>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	physics model
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

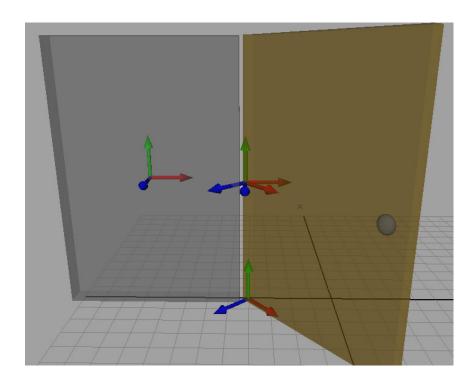
名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<ref_attachment rigid_body="./SomeRigidBody"></ref_attachment>	参照フレームとして利用される (rigid_body または node) アタッチメントを定義します。 rigid_body 属性は、同じphysics_model 中で剛体への相対的な参照です。	なし	1
<attachment rigid_body="./SomeRigidBody"> ></attachment 	rigid_body または node へのアタッチメントを定義します。rigid_body 属性は、同じphysics_model 中で剛体への相対的な参照です。	なし	1
<technique_common></technique_common>	rigid_constraint の対象 となる共通プロファイルを指 定します。	なし	1
<technique></technique>	複数の表現を許可するための rigid_constraint 用の対 象プロファイルを指定しま す。	なし	任意
<extra></extra>	ユーザ定義された複数の表現 が可能なデータ	なし	任意

rigid_constraint と technique_common のための子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<enabled></enabled>	FALSE の場合、 <constraint></constraint>	TRUE	0または1
TRUE	は剛体に対して何の影響力も及		
	ぼしません。		
<pre><interpenetrate></interpenetrate></pre>	アタッチされた剛体が互いに突	0.0 (回転も	0または1
TRUE	き抜けているかどうかを表しま	変形も許可さ	
	す。	れません)	
「揺れる円錐とひねり」の角度制限を	はmits>要素は、制約の上限	0.0 (回転も	0または1
持つ2つの制約:	(自由度と範囲)を指定するた	移動も許可さ	
	めの柔軟な方法です。この要素	れない)	
	には、以下を含めることができ		
	ます。		
<min> 0 0 0 </min>	<pre></pre>		
<max> 0 0 0 </max>	要素と <linear>要素</linear>		
<swing_cone_and_twist></swing_cone_and_twist>	制約の上限を表現する新しい方		
<min></min>	法が標準化されれば、新しく強		
-15.0 -15.0 -INF	く型付けされた子要素が追加さ		
<max></max>	れることになります。具体的な		
15.0 15.0 INF	制約の上限の記述に XML 要素の		
<pre></pre>	ようなものがあるまでは、カス		
	タムの <technique>を利用すべ</technique>		
	きです。		
	を表は、それぞれの軸		
	に沿った線形の(平行移動的		
	な)上限を表します。		
	<pre><swing_cone_and_twist> 要</swing_cone_and_twist></pre>		
	素は、それぞれの回転軸に沿っ		
	た角度を度数で表します。		
	XとYの上限は「揺れる円錐」を		
	表し、Zの上限は「ひねりの角		
	度」の範囲を表します(左側の		
	図を参照)。		
·	INF と-INF の値は無限の+/-に		
	相当し、対象となる軸に沿った		
	上限がないことを意味します。		
	それぞれの上限は、		
	ref_attachment の空間で表現		
	します。		

<spring></spring>	距離(LINEAR)または角度	無限剛度の制	0または1
	(ANGULAR)を基準にしたスプ	約(スプリン	
	リング。剛度(スプリング係数	グなし)	
<stiffness>5.4544</stiffness>	とも呼ばれます)は、威力/距離		
<damping>0.4132</damping>	(または威力/角度)を単位とし	stiffness:	
<target_value>3</target_value>	ます。ref_attachment の空間	1	
	で表現されます。	damping: 0	
		target_val	
		ue: 0	
<spring></spring>			
<angular></angular>			
<pre><stiffness>5.4544</stiffness></pre>			
<pre><damping>0.4132</damping></pre>			
<target_value>90</target_value>			

例



上記は、ヒンジ部分を持ったドアの例です。壁の剛体(グレー部分、右手)では、中央にローカル空間のフレームがあります。ドアはフロア上のローカル空間があり、Y 軸に対して 45 度回転されています。ヒンジ部分の制約は、Y 軸に対して+/-90 度の回転に制限されています。アタッチされた個々のフレームは、剛体のローカル空間で定義された変形と回転を持ちます。

```
clibrary_physics_models>
    <physics_model>
        <rigid_body sid="doorRigidBody"/>
        <rigid_body sid="wallRigidBody"/>
```

```
<ri>d constraint sid="rigidHingeConstraint"></ri>
        <ref attachment body="#wallRigidBody">
         <translate sid="translate">5 0 0</translate>
        </ref attachment>
        <attachment body="#doorRigidBody">
         <translate sid="translate">0 8 0</translate>
          <rotate sid="rotateX">0 1 0 -45.0</rotate>
        </attachment>
<!- sid 属性を追加して、アニメーションからの制限をターゲットとする。-->
      <technique common>
        imits>
         <swing_cone_and_twist>
           <min sid="swing min">0 90 0</min>
           <max sid="swing max">0 -90 0</max>
         </swing cone and twist>
        </limits>
      </technique common>
    </rigid constraint>
  </physics model>
</library physics models>
```

中断可能な制約

以下の図は、3種類の設定で示した2つの剛体を表しています。



赤と青と緑の矢印は、それぞれの剛体に対してアタッチされたフレーム(位置と方向)の X 軸、Y 軸、 Z 軸を表しています。制約が回転の自由度だけであり(たとえば、ボール管継手)、中断不可能な場合、 2 つのアタッチされたフレームのワールド空間の位置は一致するはずです。これと同様に、制約に回転 の自由度がなく、また中断不可能な場合には、アタッチされたフレームのワールド空間の方向は同一の ものとなります。

上記の図に示した制約には、2 つの自由度があります。つまり、中央に示されているように Y 軸に沿っ た回転と、右側に示されているように Y 軸に沿った変形です。左側の例の設定は、この制約が中断可能 であることを示しています。すなわち、Y 軸に沿った影響力が一定の閾値に達すると、制約が中断され、上側の剛体の動きを制限しなくなります。

アタッチされたフレームは個々の剛体のローカル空間で表現されていますが、物理的な影響力とパラメータ(たとえば、制限)は、ワールド空間で表現されて計算されます。

shape

概要

この要素で、<rigid body>のコンポーネントを記述することができます。

コンセプト

剛体には、コリジョン検出用に1つの形状または形状の階層を含めることができます。それぞれの形状 は、複雑なコリジョン形状(バウンディング形状)を構築できるように、拡大/縮小、回転、変形可能 となっています。

これらの形状は<shape>要素で記述し、それぞれに対して以下の情報を含めることができます。

- <physics material>の定義またはインスタンス
- 物理的なプロパティ(質量や慣性など)
- 変換(<scale>、<rotate>、<translate>)
- <geometry>のインスタンスまたはインライン化された定義

形状には、穴が空いていてもかまいません(たとえば、ウサギの形のチョコレート)。これは、体積全 体で質量が分散されているのではなく、表面近くで分散されていることを意味します。それにしたがっ て、質量、慣性、密度、重心の属性を設定すべきです。

COLLADA では形状を拡大・縮小することができますが、一部のフィジックスエンジンでは拡大/縮小さ れた解剖的な形状(たとえば、カプセル)をサポートしていません。

属性

<shape>要素に属性はありません。

関連要素

<shape>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	rigid body ∅ technique common
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<hollow>TRUE</hollow>	TRUE の場合、形状の表面に沿って	TRUE	0または1
	質量が分散されます。		
インライン定義またはイン	この形状に利用される	<shape>でインス</shape>	0または1
スタンス:	<physics_material></physics_material>	タンス化または定	
<physics_material< td=""><td></td><td>義されたジオメト</td><td></td></physics_material<>		義されたジオメト	
id="">		リから導き出され	
		ます。	
または			
<physics_material< td=""><td></td><td></td><td></td></physics_material<>			
url=""/>			

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<mass> 0.5 </mass>	形状の質量	密度 X の形状の体	0または1
		積から導き出され	
		ます。	
<density></density>	形状の密度	質量と体積から導	0または1
0.5		き出されます。	
インライン定義またはイン	形状のジオメトリ。ジオメトリの	なし	1
スタンス:	インライン化と参照の両方が行え		
<box></box>	ます。 <plane>、<box>、</box></plane>		
または	<pre><sphere>、 <cylinder>、</cylinder></sphere></pre>		
<pre><instance_geometry< pre=""></instance_geometry<></pre>	<pre><tapered_cylinder>,</tapered_cylinder></pre>		
url=""/>	<capsule>,</capsule>		
	<tapered_capsule>はインライ</tapered_capsule>		
	ン化され、他の種類のジオメトリ		
	(<mesh>, <convex_mesh>,</convex_mesh></mesh>		
	<spline>など) は、</spline>		
	<pre><instance_geometry>要素で参</instance_geometry></pre>		
	照されます。		
<scale>, <rotate>,</rotate></scale>	<node>の下と同じ</node>	変換は行われませ	任意
<translate></translate>		ん。	
<asset></asset>		なし	0または1
<extra></extra>		なし	任意

備考

詳しくは、<rigid body>要素を参照してください。

例

sphere

概要

中央揃えされた球体プリミティブ

コンセプト

ジオメトリプリミティブまたは解剖的な形は、フィジックスのコリジョン形状に役立ちます。詳しくは 「新しいジオメトリの種類」を参照してください。

属性

<sphere>要素に属性はありません。

関連要素

<sphere>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	shape
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<radius></radius>	球体の半径を表す浮動小数点	なし	1

例

<sphere> <radius> 1.0 </radius> </sphere>

tapered_capsule

概要

ローカルのY軸に沿って中央揃えされたテーパー化されたカプセルプリミティブ

コンセプト

ジオメトリプリミティブまたは解剖的な形は、フィジックスのコリジョン形状に役立ちます。詳しくは「新しいジオメトリの種類」を参照してください。

属性

<tapered capsule>要素に属性はありません。

関連要素

<tapered capsule>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	shape
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<height></height>	半球の中央とつながっている線のセグメントの	なし	1
	長さを表す浮動小数点		
<radius1></radius1>	正(height/2)の Y 値でテーパー化されたカ	なし	1
	プセルの半径を表す 2 つの浮動小数点。テーパ		
	一化されたカプセルの両端は楕円となります。		
<radius2></radius2>	負(height/2)の Y 値でテーパー化されたカ	なし	1
	プセルの半径を表す 2 つの浮動小数点。テーパ		
	一化されたカプセルの両端は楕円となります。		

例

<tapered_capsule>

<height> 2.0 </height>
<radius1> 1.0 1.0 </radius1>
<radius2> 1.0 0.5 </radius2>

</tapered capsule>

tapered_cylinder

概要

ローカルの Y 軸に沿って中央揃えされたテーパー化されたシリンダプリミティブ

コンセプト

ジオメトリプリミティブまたは解剖的な形は、フィジックスのコリジョン形状に役立ちます。詳しくは 「新しいジオメトリの種類」を参照してください。

属性

<tapered cylinder>要素に属性はありません。

関連要素

<tapered cylinder>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	shape
子要素	以下の解説を参照
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<height></height>	Y軸に沿うシリンダの長さを表す浮動小数点	なし	1
<radius1></radius1>	正 (height/2) の Y 値でテーパー化されたシ リンダの半径を表す 2 つの浮動小数点。テーパ ー化されたシリンダの両端は楕円となります。	なし	1
<radius2></radius2>	負 (height/2) の Y 値でテーパー化されたシ リンダの半径を表す 2 つの浮動小数点。テーパ ー化されたシリンダの両端は楕円となります。	なし	1

例

<tapered cylinder>

<height> 2.0 </height> <radius1> 1.0 2.0 </radius1> <radius2> 1.5 1.8 </radius2> </tapered cylinder>

7章 COLLADA FX

このページは空白です。

レンダリング状態

概要

異なる FX プロファイルは、<pass>要素の中で利用可能な別々のレンダリング状態セットを持ちます。 一般に、それぞれのレンダリング状態の要素は、以下の宣言に準拠します。

<render_state value="some_value" param="param_reference"/>

この際、value 属性でレンダリング状態に固有の値が設定でき、また param 属性で、状態用の param 中に保存された値を利用することができます。

これらの状態の詳細に関しては、OpenGL の仕様書を参照してください。

以下の表に、<profile_CG>、<profile_GLSL>、<profile_GLES>のレンダリング状態を示しておきます。それぞれのレンダリング状態は、GLES プロファイル用に明記されている違い以外は基本的に同じです。

状態	値	GLES での違い
alpha func	NEVER, LESS, LEQUAL,	
_ func	EQUAL, GREATER, NOTEQUAL,	
	GEQUAL, ALWAYS	
value		
	float 値の 0.0~1.0 が含まれる	
blend func	[src と dest の両方]	
src	ZERO, ONE, SRC COLOR,	
dest	ONE MINUS SRC COLOR,	
	DEST COLOR,	
	ONE MINUS DEST COLOR,	
	SRC ALPHA,	
	ONE MINUS SRC ALPHA.	
	DEST ALPHA,	
	ONE MINUS DEST ALPHA,	
	CONSTANT COLOR,	
	ONE MINUS CONSTANT COLOR,	
	CONSTANT ALPHA,	
	ONE MINUS CONSTANT ALPHA,	
	SRC ALPHA SATURATE	
blend func separate	blend funcの値と同じ	GLES にはない
src rgb	_	
dest rgb		
src alpha		
dest alpha		
blend equation	FUNC ADD, FUNC SUBTACT,	GLES にはない
	FUNC REVERSE SUBTRACT,	
	MIN, MAX	
blend equation separate	blend_equation の値と同じ	GLES にはない
rgb		
alpha		
color material	FRONT, BACK,	GLES にはない
_ face	FRONT AND BACK	
mode	EMISSION, AMBIENT,	
	DIFFUSE, SPECULAR,	
	AMBIENT AND DIFFUSE	

		Γ
cull_face	FRONT, BACK,	
	FRONT AND BACK	
depth_func	NEVER, LESS, LEQUAL,	
	EQUAL, GREATER, NOTEQUAL,	
	GEQUAL, ALWAYS	
fog mode	LINEAR, EXP, EXP2	
fog_coord_src	FOG_COORDINATE,	GLES にはない
	FRAGMENT DEPTH	
front face	CW, CCW	
light_model_color_control	SINGLE_COLOR,	GLES にはない
	SEPARATE SPECULAR COLOR	
logic_op	CLEAR, AND, AND_REVERSE,	
	COPY, AND_INVERTED, NOOP,	
	XOR, OR, NOR, EQUIV,	
	INVERT, OR_REVERSE,	
	COPY INVERTED, NAND, SET	
polygon_mode	FRONT, BACK,	GLES にはない
Face	FRONT_AND_BACK POINT,	
mode	LINE, FILL	
shade model	FLAT, SMOOTH	
stencil func	NEVER, LESS, LEQUAL,	
- Func	EQUAL, GREATER, NOTEQUAL,	
	GEQUAL, ALWAYS	
Ref		
mask	符号なし byte	
	符号なし byte	
stencil op	[fail、zfail、zpass の場	
Fail	合]	
Zfail	KEEP, ZERO, REPLACE, INCR,	
zpass	DECR, INVERT, INCR_WRAP,	
	DECT WRAP	
stencil func separate	[front & back] NEVER,	GLES にはない
Front	LESS, LEQUAL, EQUAL,	
Back	GREATER, NOTEQUAL,	
	GEQUAL, ALWAYS	
Ref		
mask	符号なし byte	
	符号なし byte	
stencil_mask_separate		GLES にはない
Face	FRONT, BACK,	
mask	FRONT AND BACK	
	符号なし byte	
light enable		enable light
	この要素には、光源を指定する	
	index 属性があります。	
light ambient	float4 値	
	この要素には、光源を指定する	
	index 属性があります。	
light diffuse	float4 値	
	この要素には、光源を指定する	
	index 属性があります。	
		
light specular	float.4 値	
light_specular	float4 値 この要素には、光源を指定する	

12-1	67 4 (店	
light_position	float4 値	
	この要素には、光源を指定する	
	index 属性があります。	
light_constant_attenuation	Float 値	
	この要素には、光源を指定する	
	index 属性があります。	
light linear attenuation	Float 値	
	この要素には、光源を指定する	
	index 属性があります。	
light_quadratic_attenuation	float 値	
quadracio_acconaacion	この要素には、光源を指定する	
	index 属性があります。	
link and out off	float 値	
light_spot_cutoff		
	この要素には、光源を指定する	
	index 属性があります。	
light_spot_direction	float3 値	
	この要素には、光源を指定する	
	index 属性があります。	
light spot exponent	float 値	
	この要素には、光源を指定する	
	index 属性があります。	
texture1D	Sampler1D型	GLES にはない
	この要素には、テクスチャユニッ	
	トを指定する index 属性があり	
	ます。	
texture2D	Sampler2D型	GLES にはない
texture2D		
	この要素には、テクスチャユニッ	
	トを指定する index 属性があり	ine>を参照。
	ます。	
texture3D	Sampler3D型	GLES にはない
	この要素には、テクスチャユニッ	
	トを指定する index 属性があり	
	ます。	
textureCUBE	SamplerCUBE 型	GLES にはない
	この要素には、テクスチャユニッ	
	トを指定する index 属性があり	
	ます。	
textureRECT	SamplerRECT 型	GLES にはない
	この要素には、テクスチャユニッ	0220 (213.81
	トを指定する index 属性があり	
	ます。	
+ ov+vxo DEDMU		GLES にはない
textureDEPTH	SamplerDEPTH型	GTE2 (こ(す)なん,
	この要素には、テクスチャユニッ	
	トを指定する index 属性があり	
	ます。)
texture1D_enable	Boolean 型	GLES にはない
	この要素には、テクスチャユニッ	
	トを指定する index 属性があり	
	ます。	
texture2D enable	Boolean 型	GLES にはない
_	この要素には、テクスチャユニッ	<texture pipel<="" td=""></texture>
	トを指定する index 属性があり	
	ます。	2.5,9
texture3D enable	Boolean 値	GLES にはない
	I DOVITEGII IIB	GTITO (C (な (か () .

	1	
	この要素には、テクスチャユニッ	
	トを指定する index 属性があり	
	ます。	
textureCUBE_enable	Boolean 値	GLES にはない
_	この要素には、テクスチャユニッ	
	トを指定する index 属性があり	
	ます。	
textureRECT_enable	Boolean 値	GLES にはない
_	この要素には、テクスチャユニッ	
	トを指定する index 属性があり	
	ます。	
textureDEPTH enable	Boolean 値	GLES にはない
_	この要素には、テクスチャユニッ	
	トを指定する index 属性があり	
	ます。	
texture_env_color	float4 値	GLES にはない
	この要素には、テクスチャユニッ	<texture pipel<="" td=""></texture>
	トを指定する index 属性があり	ine>を参照。
	ます。	· · · · · · ·
texture_env_mode	String 値	GLES にはない
	この要素には、テクスチャユニッ	<pre><texture pipel<="" pre=""></texture></pre>
	トを指定する index 属性があり	ine>を参照。
	ます。	21101 2 5 7110
clip plane	float4 値	
orrp_prame	この要素にはクリッピングプレー	
	ンを指定する index 属性があり	
	ます。	
clip plane enable	Boolean 値	
orip_prame_endare	この要素にはクリッピングプレー	
	ンを指定する index 属性があり	
	ます。	
blend color	float4 値	
clear color	float4 値	
clear stencil	Int 値	
clear depth	float 値	
color mask	Bool4 値	
depth bounds	float2 値	
depth mask	Boolean 値	
depth mask	float2 値	
	float 値	
fog density	float 値 float 値	
fog start		
fog end	float 値	
fog color	float4 値	
light model ambient	float4 値	
lighting enable	Boolean 値	
line stipple	Int2 値	
line width	float 値	
material ambient	float4 値	
material diffuse	float4 値	
material emission	float4 値	
material shininess	float 値	
material specular	float4 値	
model view matrix	float4x4 値	

point distance attenuation	float3 値	
point distance attenuation point fade threshold size	float 値	
point size	float 値	
point size min	float 値	
point size max	float 値	
polygon offset	float2値	
projection matrix	float4x4 値	
scissor	Int4 値	
stencil mask	Int 値	
	Boolean 値	
alpha_test_enable	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	enable_alpha_t est
auto normal enable	Boolean 値	GLES にはない
blend enable	Boolean 値	enable blend
color_logic_op_enable	Boolean 値	enable_color_l ogic op
cull_face_enable	Boolean 値	enable_cull_fa
depth bounds enable	Boolean 値	GLES にはない
depth bounds enable depth clamp enable	Boolean 値	GLES にはない
depth clamp enable depth test enable	Boolean 値 Boolean 値	enable depth t
depth_test_enable	BOOTESTI IIE	est
dither enable	Boolean 値	enable dither
fog enable	Boolean 値	enable fog
light model local viewer enable	Boolean 値	GLES にはない
_	Boolean 値 Boolean 値	
light_model_two_side_enable	BOOTEGII III	<pre>enable_light _model_two_s ide</pre>
line smooth enable	Boolean 値	GLES にはない
line stipple enable	Boolean 値	GLES にはない
logic op enable	Boolean 値	enable logic o
		р
multisample_enable	Boolean 値	enable_multi sample
normalize_enable	Boolean 値	enable_norma lize
point smooth enable	Boolean 値	GLES にはない
polygon_offset_fill_enable	Boolean 値	enable_polyg on_offset_fi
polygon offset line enable	Boolean 値	11 GLES にはない
	"	
polygon_offset_point_enable	Boolean 値	GLES にはない
polygon_smooth_enable	Boolean 値	GLES にはない
polygon_stipple_enable	Boolean 値	GLES にはない
rescale_normal_enable	Boolean 値	enable_resca le normal
sample_alpha_to_coverage_enable	Boolean 値	enable_sampl e_alpha_to_c overage
sample_alpha_to_one_enable	Boolean 値	enable_sampl e_alpha_to_o ne
sample_coverage_enable	Boolean 値	enable_sampl e coverage

7-8 COLLADA – Digital Asset Schema、リリース 1.4.0

scissor_test_enable	Boolean 値	enable_sciss or test
stencil_test_enable	Boolean 値	enable_stenc il test
gl_hook_abstract	GL 拡張からレンダリング状態を 追加するための要素	GLES にはない
texture_pipeline	String 値 <texture_pipeline>パラメー タの名前</texture_pipeline>	GLES のみ
texture_pipeline_enable	Boolean 値	GLES のみ

alpha

概要

<texture_pipeline>コマンドのアルファ要素を定義します。これは、混合モードのテクスチャ操作です。

コンセプト

割り当てと全体的なコンセプトの詳細に関しては<texture pipeline の解説を参照してください。

属性

<alpha>要素には、以下の属性があります。

operator	REPLACE MODULATE ADD ADD_SIGNED INTERPOLATE SUBTRACT	glTexEnv(TEXTURE_ENV, COMBINE_ALPHA, operator)での利用を想定	
scale	float	glTexEnv(TEXTURE_ENV, ALPHA_SCALE, scale) での利用を想定	

関連要素

<alpha>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	texcombiner
子要素	argument
その他	なし

<argument>要素は、実行する特定の操作に必要な引数を設定します。

備考

例

<texture pipeline>を参照してください。

annotate

概要

強く型付けされた注釈を親オブジェクトに追加します。

コンセプト

注釈というのは SYMBOL=VALUE という形式のオブジェクトで、SYMBOL はユーザ定義された識別子であり、 VALUE は強く型付けされた値です。注釈は、効果ランタイムからアプリケーションに対してメタ情報を 知らせるためだけに利用され、COLLADA ドキュメントでは解釈されません。

属性

<annotate>要素には、以下の属性があります。

1			
	name	xs:NCName	この要素のテキスト文字列名(オプション)

関連要素

<annotate>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	effect, technique, pass, newparam, setparam, generator
子要素	bool, bool2, bool3, bool4, int, int2, int3, int4, float, float2,
	float3、float4、float2x2、float3x3、float4x4、string
その他	なし

備考

現時点では、注釈の標準セットはありません。

例

<annotate name="UIWidget"> <string> slider </string> </annotate> <annotate name="UIMinValue"> <float> 0.0 </float> </annotate> <annotate name="UIMaxValue"> <float> 255.0 </float> </annotate>

array

概要

1次元配列型のパラメータを作成します。

コンセプト

配列型のパラメータは、要素の並びをシェーダに渡すために利用されます。配列型は単一のデータ型の 並びで、多次元配列は配列型の配列として宣言されます。

配列は、サイズを宣言しても、または未サイズのままでもかまいません。未サイズの配列は、シェーダのパラメータとして利用する前に、<setparam>を利用して具体的なサイズ(とデータ)を設定する必要があります。

属性

<array>要素には、以下の属性があります。

length	xs:positiveInteger	配列中の要素数を指定する

length 属性で、配列中の要素の数を指定します。

関連要素

<array>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	newparam, setparam
子要素	VALUE_TYPES, CG_PARAM_TYPE, GLSL_PARAM_TYPE, array, usertype, connect_param
その他	なし

備考

作成した後、配列のインデックス化と構造体の非参照を行う通常の CG シンタックス (例: array[3].element) を利用して、<setparam>の宣言の中で配列要素を直接記述できます。

例

argument

概要

<argument>要素は、テクスチャユニットの混合スタイルのテクスチャコマンドが持つ RGB またはアル ファコンポーネントの引数を定義するためのものです。

コンセプト

割り当てと全体のコンセプトの詳細に関しては、<texture pipeline>の解説を参照してください。 この要素は、親要素を基にしたコンテキストに依存します。

属性

<argument>要素には、以下の属性があります。

idx	int 0-2
source	TEXTURE CONSTANT PRIMARY PREVIOUS
operand	親が RGB の場合:
	SRC_COLOR ONE_MINUS_SRC_COLOR SRC_ALPHA ONE_MINUS_SRC_ALPHA
	親が alpha の場合:
	SRC ALPHA ONE MINUS SRC ALPHA
unit	xs:NCName

注意:以下のリストで、##は結合を意味し、idxと source は値を指定する場所を意味します。 source は、引数のソースデータがどこにあるのかを表します。

- 親が RGB の場合、glTexEnv(TEXTURE ENV, SRC##idx## RGB, source)の呼び出しを暗に 意味します。
- 親が alpha の場合、glTexEnv(TEXTURE ENV, SRC##idx## ALPHA, source)の呼び出しを 暗に意味します。

operand は、ソースから値をどのように読み込むのか詳しい情報を表します。

- 親が RGB の場合の場合、qlTexEnv(TEXTURE ENV, OPERAND##idx## RGB, source)の呼び 出しを暗に意味します。
- 親が alpha の場合、qlTexEnv(TEXTURE ENV, OPERAND##idx## ALPHA, source)の呼び 出しを暗に意味します。

unit は、ソースが読み込まれる元のテクスチャユニットの名前を引数に対して提供します。この属性 は、source="TEXTURE"の場合にだけ利用できます。指定可能な値は、シェーダの設計対象となる OpenGL ES のバージョンに依存します。

- GLES 1.0 の場合、<texenv>要素中のすべての引数は、同じテクスチャユニットを参照しなけれ ばなりません。混合クロスバーがないからです。
- GLES 1.1 の場合、テクスチャの混合クロスバーが利用可能であるため、unit 属性でどのテクス チャユニットの名前をも参照することができます。

関連要素

<argument>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	RGB, alpha
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

<argument>は、特定の操作を実行する際に必要となる引数を設定します。

例

<texture_pipeline>を参照してください。

bind

概要

値をシェーダへの均一の入力にバインドします。もしくは、インスタンス化時に効果パラメータに値を バインドします。

コンセプト

均一パラメータを持ったシェーダは、コンパイル時に個々の入力に対してバインドされた値を持つこと ができ、また実行時には均一の値に割り当てられた値を必要とします。これらの値は、リテラル値、定 数パラメータ、均一パラメータのいずれでもかまいません。定数値の場合、それらの宣言はコンパイラ によって利用され、特定の宣言用に最適化されたシェーダを生成します。

また<bind>要素は、事前に定義されたパラメータを実行時に均一の入力にマッピングするのにも利用 され、事前に定義されたパラメータのプールから FX ランタイムで自動的に値をシェーダに割り当てる ことが可能です。

属性

<bind>要素には、以下の属性があります。

symbol	xs:NCName	シェーダへの均一入力パラメータのための識別子(正式な関数パラメータまたは特定の範囲でのグローバルな識別子)で、外部リソースにバインドされます。 会にだけ有効です。
semantic	xs:NCName	どの効果パラメータをバインドするのか指定します。 <bind>が <instance material="">の子の場合にだけ有効です。</instance></bind>
target	xs:token	指定したセマンティックスにバインドする値の場所を指定します。このテキスト文字列は、「アドレス構文」のセクションに解説されている構文にしたがったパス名です。 <bind>が <instance material="">の子の場合にだけ有効です。</instance></bind>

関連要素

<bind>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	shader, instance material	
子要素	VALUE TYPES, param	
その他	なし	

VALUE TYPES と<param>子要素は、<bind>要素が<shader>要素の子の場合にだけ利用できます。

備者

一部の FX ランタイムコンパイラでは、コンパイルの前にすべての均一入力をバインドしておく必要が あります。それ以外の FX ランタイムでは、バインドされていない入力をチェックできるように、シェ ーダを非実行可能形式のオブジェクトコードに部分コンパイルすることができます。



```
<bind ref="diffusecol">
      <float3> 0.30 .52 0.05 </float3>
</bind>
<bind ref="lightpos">
      <param ref="OverheadLightPos_03">
</bind>
...

<instance_material symbol="RedMat" target="#RedCGEffect">
      <bind semantic="LIGHTPOSO" target="#LightNode/translate"/>
</instance_material>
```

bind material

概要

特定のマテリアルをジオメトリの一部にバインドし、同時に可変パラメータと均一パラメータをバイン ドします。

コンセプト

ジオメトリの一部を宣言する際に、以下のように特定のマテリアルを持つようにリクエストすることが できます。

<polygons name="leftarm" count="2445" material="bluePaint">

この抽象的なシンボルは特定のマテリアルインスタンスにバインドする必要があり、これは <bind material>ブロックを持つ<instance geometry>の最中に行われます。マテリアルのため に名前でリクエストされたジオメトリがスキャンされ、実際のマテリアルは、それらのシンボルにバイ ンドされます。

マテリアルがバインドされていますが、やはりシェーダパラメータも解決する必要があります。たとえ ば、入力として2つの光源の位置が必要な効果で、シーンに8つのユニークな光源が含まれている場合、 どの光源がマテリアルに利用されるのでしょう? また、1 つのオブジェクトに対してテクスチャ座標 のセットが1つ必要な効果で、ジオメトリがテクスチャ座標を2セット定義している場合、どのセット が効果に利用されるのでしょう。そういったシーングラフ中の入力の曖昧さを解消するためのメカニズ ムが<bind material>です。

パラメータにアタッチされたセマンティックスを指定し、また COLLADA の URL シンタックスでシーング ラフ中のノードの個々の要素、最後にはベクトルの個々の要素に結び付けることで、それぞれの入力は シーングラフにバインドされます。

属性

<bind material>要素に属性はありません。

関連要素

<bind material>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	instance geometry, instance controller
子要素	param, technique, technique common
その他	なし

備者

<bind material>の中の<param>オブジェクトは、アニメーションのターゲットに追加されます。 これらのオブジェクトは、<effect>の内部レイアウトを解析するために、アニメーションのターゲッ ト化システムを必要とせずに、通常の方法で入力パラメータにバインドすることが可能です。

例

blinn

概要

cprofile COMMON>効果の中で利用し、環境、拡散、鏡面反射を行うシェーディング処理された表面 を生成する固定機能パイプラインを宣言します。その際、鏡面反射は Blinn BRDF 近似にしたがってシ ェーディング処理されます。

コンセプト

<br/

```
color = emissive + < ambient > * ambient_light + < diffuse > * <math>max(N . L, 0) + color = emissive + < ambient > * color = emissive 
<specular>*max(H . I, 0)<shininess>
```

半角ベクトル H を利用している点に注意してください。たとえば、(I+L)/2 というように、ユニット Eye と Light ベクトルとの間の半分として計算されます。

属性

<bli><bli><bli>

っ

っ

と

っ

に

属性はありません。

関連要素

があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	technique
子要素	emission, ambient, diffuse, reflective, specular, shininess,
	reflectivity, transparent, transparency, index of refraction
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト 値	出現回数
<emission></emission>	<pre><common_color_or_texture_type>を利用 して、このオブジェクトの表面から放射される 光源の量を宣言します。</common_color_or_texture_type></pre>	なし	0または1
<ambient></ambient>	<pre><common_color_or_texture_type>を利用 して、このオブジェクトの表面から放射される 環境光の量を宣言します。</common_color_or_texture_type></pre>	なし	0または1
<diffuse></diffuse>	<pre><common_color_or_texture_type>を利用 して、このオブジェクトの表面から反射される 拡散光の量を宣言します。</common_color_or_texture_type></pre>	なし	0または1
<specular></specular>	<pre><common_color_or_texture_type>を利用 して、このオブジェクトの表面から反射される 鏡面反射光の量を宣言します。</common_color_or_texture_type></pre>	なし	0または1
<shininess></shininess>	<pre><common_float_or_param_type>を利用して、このオブジェクトの表面から鏡面反射突起部分の鏡面度または荒さを宣言します。</common_float_or_param_type></pre>	なし	0または1
<reflective></reflective>	完全鏡面反射のカラーを <common_color_or_texture_type>として</common_color_or_texture_type>	なし	0または1

	宣言します。		
<reflectivity></reflectivity>	<pre><common_float_or_param_type>を利用し て、反射された光に追加する完全鏡面反射の量 (0.0~1.0の値)を宣言します。</common_float_or_param_type></pre>	なし	0または1
<transparent></transparent>	完全鏡面反射のカラーを <common_color_or_texture_type>として 宣言します。</common_color_or_texture_type>	なし	0または1
<transparency></transparency>	<pre><common_float_or_param_type>を利用して、反射されたカラーに追加する完全鏡面反射の量を 0.0~1.0 のスカラー値として宣言します。</common_float_or_param_type></pre>	なし	0または1
<pre><index_of_refraction></index_of_refraction></pre>	<pre><common_float_or_param_type>を利用し て、完全鏡面反射の反射インデックスを単一の スカラーインデックスとして宣言します。</common_float_or_param_type></pre>	なし	0または1

備考

例

code

概要

ソースコードのインラインブロック

コンセプト

ソースコードは<effect>宣言の中にインライン化することができ、シェーダをコンパイルするために 利用できます。

属性

<code>要素には、以下の属性があります。

sid	オプション。この要素のサブ識別子を含んだテキ
	スト文字列。この値は、親要素の範囲内でユニー
	クでなければなりません。他の要素からローカル
	にブロックを参照できるようにするためのソース
	コードの識別子です。

関連要素

<code>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	technique, generator, profile CG, profile GLSL
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

インラインソースコードでは、すべての XML 識別子の文字をエスケープしておく必要があります。た とえば、"<"は"&1t;"としておきます。

例

```
<code sid="lighting_code">
atrix4x4 mat : MODELVIEWMATRIX;
float4 lighting fn( varying float3 pos : POSITION,
</code>
```

color_clear

概要

レンダリングターゲット表面をクリアするかどうか、クリアする場合にはどんな値を利用するのかを指定します。

コンセプト

描画を行う前に、レンダリングターゲット表面を空のキャンバス、つまりデフォルト値にリセットしなければならない場合もあります。一連の<color_clear>宣言では、どの値を利用するのか指定します。クリア文が含まれていない場合、ターゲット表面は、レンダリングが開始しても変更されません。

属性

<color clear>要素には、以下の属性があります。

index	xs:nonNegativeInteger	設定するマルチレンダリングのターゲット
±110021	110 · Homivogaci voincegei	

関連要素

<color clear>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	pass
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

例

<color_clear index="0">0.0 0.0 0.0 0.0/color_clear>

color_target

概要

特定のパスで、カラーの情報を出力から受け取る<surface>を指定します。

コンセプト

複数レンダリングターゲット(MRT)では、フラグメントシェーダに対して、パスごとに 1 つ以上の値 を出力させたり、または標準の深度とステンシルの単位を任意のオフスクリーンバッファに書き込んだ り、そこから読み込んだりするためにリダイレクトさせることが可能です。これらの要素は、FX ラン タイムに対して、事前に定義されているどのサーフィスを利用するのかを伝えることになります。

属性

〈color target〉要素には、以下の属性があります。

index	xs:nonNegativeInteger	マルチレンダリングターゲットの1つのインデックス
slice		ターゲット <surface>中のサブイメージのインデックス。単一 MIP マップレベル、ユニークなキューブ面、または3次元テクスチャのレイヤを含みます。</surface>

関連要素

<color target>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	pass
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

現在のプラットフォーム (Q4 2005) では、MRT の設定がかなり限定されています。たとえば、カラー バッファは4つだけで(すべて同じサイズで同じピクセルフォーマットでなければならない)、すべて のカラーバッファに対して1つの深度バッファとステンシルバッファしかアクティブにすることができ ません。COLLADA FX 宣言は、こういった制約を緩めるように設計されており、FX ランタイムは、実際 に適用する前に<pass>中の特性の MRT の宣言を検証する必要があり、検証に失敗した場合にはエラー のフラグを設定しなければなりません。

<color target>が指定されていない場合、FX ランタイムは、対象とするプラットフォーム用のデフ オルトのバックバッファセットを利用します。

```
<newparam sid="surfaceTex">
  <surface type="2D"/>
</newparam>
<pass>
  <color target>surfaceTex</color target>
</pass>
```

common_color_or_texture_type

概要

common>効果の中の固定機能シェーダのカラー属性を宣言するためのタイプです。

コンセプト

属性

<common color or texture type>に属性はありません。

関連要素

<common color or texture type>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	constant, lambert, phong, blinn
子要素	color, param, texture
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト	出現回数
		値	
<pre><color sid="mySID"></color></pre>	リテラルのカラーを RGBA の順番で 4	なし	1
	つの浮動小数点で指定する。		
<pre><param ref="myParam"/></pre>	<float4>に直接キャスト可能な現在</float4>	なし	1
	の範囲で事前に定義されたパラメータ		
	を参照して値を指定する。		
<pre><texture <="" pre="" texture="myParam"></texture></pre>	セマンティックスによって	なし	1
texcoord="myUVs">	 <bind material="">の中のテクスチャ</bind>		
	座標のストリームに結び付けられる事		
	前に定義された <sampler2d>オブジ</sampler2d>		
	ェクトと <float2>パラメータを参照</float2>		
	して値を指定する。 <texture>宣言</texture>		
	には、プラットフォーム固有の		
	<extra>情報を含めることが可能。</extra>		

備考

common_float_or_param_type

概要

file COMMON>効果の中の固定機能シェーダのスカラー属性を宣言するためのタイプです。

コンセプト

属性

<common float or param type>要素に属性はありません。

関連要素

<common float or param type>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	constant, lambert, phong, blinn
子要素	float, param
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<float sid="mySID"></float>	リテラルの浮動小数点スカラーで値を指定	なし	1
	する (例: <float> 3.14 </float>)		
<param/>	浮動小数点スカラーに直接キャスト可能な	なし	1
	事前に定義されたパラメータを参照して値		
	を指定する。		

備考

compiler_options

概要

シェーダコンパイラ用のコマンドライン操作を含んだ文字列です。

コンセプト

属性

<compiler options>要素に属性はありません。

関連要素

<compiler options>は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	shader
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

例

<compiler_options> -o3 -finlinelevel 6 </compiler_options>

compiler_target

概要

シェーダでコンパイラがどのプロファイルまたはプラットフォームを対象としているのかを宣言した文 字列です。

コンセプト

一部の FX ランタイムコンパイラは、複数のプラットフォームやハードウェア用のコードが生成できま す。この宣言は、コンパイラが対象とするプロファイルを保持します。

属性

<compiler target>要素に属性はありません。

関連要素

<compiler target>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	shader
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

connect_param

概要

事前に定義した2つのパラメータの間にシンボリック接続を作成します。

コンセプト

パラメータ同士を接続すると、1 つのパラメータを多くのシェーダの複数の入力に結び付けることができます。親の値を設定することで、すべての子の参照が自動的に更新されます。 この接続メカニズムのおかげで、共通パラメータの値を一度に設定でき、また何度も再利用できます。 さらに、抽象インタフェースにアタッチする複数のクラスを具体化することも可能となります。たとえば、均一の入力パラメータとして「Light」というタイプの抽象インタフェースをシェーダが持つ場合、

この宣言は、そのパラメータへの具体的な<usertype>構造体のインスタンスを接続することで完全に

解決できます。

属性

<connect param>要素には、以下の属性があります。

ref	xs:NCName	現在のパラメータに結び付けるターゲットパラメータへの参照
-----	-----------	------------------------------

関連要素

<connect param>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	setparam, array, usertype
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

例

<setparam ref="scene.light[2]">
 <connect_param ref="OverheadSpotlight_B"/>
</setparam>

constant

概要

成する固定機能パイプラインを宣言します。

コンセプト

反射カラーは、以下のように計算されます。

color = emission

属性

<constant>要素に属性はありません。

関連要素

<constant>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	technique
子要素	emission, reflective, reflectivity, transparent, transparency,
	index of refraction
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<pre><emission></emission></pre>	<pre><common_color_or_texture_type>を</common_color_or_texture_type></pre>	なし	0または1
	利用して、このオブジェクトの表面から		
	放射される光源の量を宣言します。		
<reflective></reflective>	完全鏡面反射のカラーを	なし	0または1
	<pre><common_color_or_texture_type></common_color_or_texture_type></pre>		
	して宣言します。		
<reflectivity></reflectivity>	<common_float_or_param_type>を利</common_float_or_param_type>	なし	0または1
	用して、反射光源に追加する完全鏡面反		
	射の量(0.0~1.0)を宣言します。		
<transparent></transparent>	完全鏡面反射光源のカラーを	なし	0または1
	<pre><common_color_or_texture_type> として宣言します。</common_color_or_texture_type></pre>		
<transparency></transparency>	<common_float_or_param_type>を利</common_float_or_param_type>	なし	0または1
	用して、反射カラーに追加する完全鏡面		
	反射光源の量 (0.0~1.0) をスカラー値		
	として宣言します。		
<pre><index_of_refraction></index_of_refraction></pre>	<pre><common_float_or_param_type>を利</common_float_or_param_type></pre>	なし	0または1
	用して、単一スカラーインデックスとし		
	て完全鏡面反射光源の反射インデックス		
	を宣言します。		
<float sid="mySID"></float>	リテラルの浮動小数点スカラーで値を指	なし	1
	定します (例: <float> 3.14</float>		
)。		

<pre><param/></pre>	浮動小数点スカラーに直接キャスト可能	なし	1
	な事前に定義されたパラメータを参照し		
	て値を指定します。		

備考

depth_clear

概要

レンダリングターゲットの表面をクリアするかどうか、またクリアする場合にはどの値を利用するのか を指定します。

コンセプト

描画を行う前に、レンダリングターゲットの表面をブランクのキャンバスまたはデフォルト値にリセッ トしなければならない場合もあります。これらの<depth clear>宣言は、リセットする際にどんな値 を利用するのかを指定します。クリアする指示が含まれていない場合には、ターゲットの表面はレンダ リングが始まっても変更されません。

属性

<depth clear>要素には、以下の属性があります。

index	xs:nonNegativeInteger	設定するマルチレンダリングターゲット
±1100021	110 • 1101111 C G G C T V C T 11 C C G C T	

関連要素

<depth clear>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	pass
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

現在のプラットフォーム (Q4 2005) では、MRT の設定がかなり限定されています。たとえば、カラー バッファは4つだけで(すべて同じサイズで同じピクセルフォーマットでなければならない)、すべて のカラーバッファに対して1つの深度バッファとステンシルバッファしかアクティブにすることができ ません。COLLADA FX 宣言は、こういった制約を緩めるように設計されており、FX ランタイムは、実際 に適用する前に<pass>中の特性の MRT の宣言を検証する必要があり、検証に失敗した場合にはエラー のフラグを設定しなければなりません。

例

<depth clear index="0">0.0</depth clear>

depth_target

概要

特定のパスで、カラーと深度とステンシルの各情報を出力から受け取る<surface>を指定します。

コンセプト

複数レンダリングターゲット (MRT) では、フラグメントシェーダに対して、パスごとに 1 つ以上の値を出力させたり、または標準の深度とステンシルの単位を任意のオフスクリーンバッファに書き込んだり、そこから読み込んだりするためにリダイレクトさせることが可能です。これらの要素は、FX ランタイムに対して、事前に定義されているどのサーフェイスを利用するのかを伝えることになります。

属性

<depth target>要素には、以下の属性があります。

index	xs:nonNegativeInteger	マルチレンダリングターゲットの1つのインデックス
slice	xs:nonNegativeInteger	ターゲット <surface>中のサブイメージのインデック</surface>
		ス。単一 MIP マップレベル、ユニークなキューブ面、ま
		たは3次元テクスチャのレイヤを含みます。

関連要素

<depth target>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	pass
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

現在のプラットフォーム(Q4 2005)では、MRT の設定がかなり限定されています。たとえば、カラーバッファは 4 つだけで(すべて同じサイズで同じピクセルフォーマットでなければならない)、すべてのカラーバッファに対して 1 つの深度バッファとステンシルバッファしかアクティブにすることができません。COLLADA FX 宣言は、こういった制約を緩めるように設計されており、FX ランタイムは、実際に適用する前に<pass>中の特性の MRT の宣言を検証する必要があり、検証に失敗した場合にはエラーのフラグを設定しなければなりません。

<depth_target>が指定されていない場合、FX ランタイムは、対象とするプラットフォーム用のデフォルトの深度バッファセットを利用します。

draw

概要

どんな種類のジオメトリを送り出すのかを FX ランタイムに対して指示するユーザ定義文字列を指定し ます。

コンセプト

複数パスのテクニックを実行する場合、それぞれのパスで異なる種類のジオメトリを送り出さなければ ならない場合があります。あるパスはモデルを送り出さなければならず、または別のパスは、オフスク リーンバッファ中の各ピクセルに対してフラグメントシェーダを実行するためにフルスクリーンの四角 形が必要なのに対して、さらに別のパスでは、正面のポリゴンしか必要ない場合があります。<draw> は、どんなジオメトリが特定のパスで想定されているのかを FX ランタイムに対して示すセマンティッ クスとして利用可能なユーザ定義文字列を宣言します。

属性

<draw>要素に属性はありません。

関連要素

<draw>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	pass
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

effect

概要

COLLADA 効果の記述を表します。

コンセプト

プログラマブル・パイプラインでは、高レベルな言語を利用して、3次元パイプラインの各段階をプログラミングすることができます。これらのシェーダでは特定のデータを渡さなければならないことが多く、また正しく機能させるために、3次元パイプラインの残りの部分を特定の方法で設定しておく必要があります。シェーダ効果は、シェーダを表すだけでなく、内部で処理を行う環境を表す方法でもあります。環境では、イメージ、サンプラー、シェーダ、入出力パラメータ、均一パラメータ、レンダリング状態の設定を記述する必要があります。

さらに、一部のアルゴリズムは、効果をレンダリングするために複数のパスを必要とします。これは、パイプラインの記述を順番付けされた<pass>オブジェクトのコレクションに分割することでサポートされています。これらは、効果を生成するための複数の方法の 1 つを記述した<technique>にグループ化されます。

<effect>宣言の中の要素は、シェーダの作成/利用/管理、ソースコード、パラメータなどを処理する基盤となるライブラリコードを利用するものと想定しています。この基盤となるライブラリは「FX ランタイム」と呼ばれています。

<effect>要素の中、しかし<profile_*>要素の外側で宣言されているパラメータは、「<effect>範囲内に位置する」と呼ばれます。<effect>範囲内のパラメータは、基本データ型の制約リストからのみ描画することが可能で、宣言した後、すべてのプロファイルの<shader>と宣言で利用できます。<effect>範囲は、多くのプロファイルとテクニックを単一のパラメータにパラメータ化する簡単な方法です。

属性

<effect>要素には、以下の属性があります。

id	xs:ID	オブジェクトのグローバルな識別子
name	xs:NCName	効果の名称

関連要素

<effect>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	library effects
子要素	<pre>asset, annotate, image, newparam, profile_CG, profile_GLSL, profile COMMON</pre>
その他	なし

備考

generator

概要

手続き型の表面ジェネレータです。

コンセプト

属性

<generator>要素に属性はありません。

関連要素

<generator>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	surface (CG と GLSL の範囲のみ)
子要素	annotate, blinn, include, name, setparam
その他	なし

備考

include

概要

外部リソースを参照して、ソースコードまたは事前にコンパイルされたバイナリシェーダを FX ランタイムにインポートします。

コンセプト

属性

<include>要素には、以下の属性があります。

sid	xs:NCName	ソースコードブロックまたはバイナリシェーダの識別子
url	xs:anyURI	リソースがある場所

関連要素

<include>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	technique, generator, profile CG, profile GLSL
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

例

<include sid="ShinyShader" url="file://assets/source/shader.glsl"/>

instance effect

概要

<instance effect>要素は、COLLADA マテリアルリソースのインスタンス化を宣言するためのもので

コンセプト

オブジェクトの実際のデータ表現は一度しか格納できません。しかしオブジェクトはシーン中で複数表 すことができます。オブジェクトは、表示されるたびに、さまざまな方法で変形される場合があります。 シーン中での個々の表示は、オブジェクトのインスタンスと呼ばれます。 それぞれのオブジェクトのインスタンスは、ユニークであったり、他のインスタンスと同じデータを共 有する場合があります。ユニークなインスタンスはオブジェクトデータの独自のコピーを持ち、独立し て操作することが可能です。ユニークではない(共有されている)インスタンスは、そのオブジェクト の他のインスタンスとデータの一部またはすべてを共有します。ある共有されたインスタンスに変更を 加えると、そのデータを共有している他のすべてのインスタンスに影響を及ぼすことになります。

この効果を生み出すメカニズムが現在のシーンやリソースにとってローカルな場合には、これはインス タンス化と呼ばれます。現在のシーンやリソースにとって外部のものである場合には、外部参照と呼ば れます。

属性

<instance effect>要素には、以下の属性があります。

url	xs:anyURI	必須。インスタンス化するオブジェクトの場所の URL。
-----	-----------	-----------------------------

関連要素

<instance effect>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	material, render
子要素	technique hint, setparam, extra
その他	なし

備考

```
<material id="BlueCarPaint" name="Light blue car paint">
 <instance effect ref="CarPaint">
   <technique_hint platform="Xbox360" sid="precalc texture">
    <setparam ref="diffuse color">
      <float3> 0.3 0.25 0.85 </float3>
      </setparam>
  </instance effect>
</material>
```

instance material

概要

<instance_material>要素は、COLLADA マテリアルリソースのインスタンス化を宣言するためのものです。

コンセプト

オブジェクトの実際のデータ表現を一度しか格納できません。しかしオブジェクトはシーン中で複数表すことができます。オブジェクトは、表示されるたびに、さまざまな方法で変形される場合があります。シーン中での個々の表示は、オブジェクトのインスタンスと呼ばれます。

それぞれのオブジェクトのインスタンスは、ユニークであったり、他のインスタンスと同じデータを共有する場合があります。ユニークなインスタンスはオブジェクトデータの独自のコピーを持ち、独立して操作することが可能です。ユニークではない(共有されている)インスタンスは、そのオブジェクトの他のインスタンスとデータの一部またはすべてを共有します。ある共有されたインスタンスに変更を加えると、そのデータを共有している他のすべてのインスタンスに影響を及ぼすことになります。この効果を生み出すメカニズムが現在のシーンやリソースにとってローカルな場合には、これはインスタンス化と呼ばれます。現在のシーンやリソースにとって外部のものである場合には、外部参照と呼ばれます。

属性

<instance material>要素には、以下の属性があります。

target	xs:anyURL	必須。インスタンス化するオブジェクトの場所の URL。
symbol	xs:NCName	このマテリアルでバインドしているジオメトリ内から定義されている
		シンボル。

関連要素

<instance material>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	technique common
子要素	bind, extra
その他	なし

備考

lambert

概要

file COMMON>効果の中で利用して、光源とは関係なく、シェーディング処理した表面を常に生 成する固定機能パイプラインを宣言します。

コンセプト

反射カラーは、以下のように計算します。

color = emission

属性

<lambert>要素に属性はありません。

関連要素

<lambert>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	technique	
子要素	emission, reflective, reflectivity, transparent, transparency,	
	index of refraction	
その他)他 なし	

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<emission></emission>	<common_color_or_texture_type>を利</common_color_or_texture_type>	なし	0または1
	用して、このオブジェクトの表面から放射さ		
	れる光源の量を宣言します。		
<reflective></reflective>	完全鏡面反射のカラーを	なし	0または1
	<pre><common_color_or_texture_type> とし</common_color_or_texture_type></pre>		
	て宣言します。		
<reflectivity></reflectivity>	<common_float_or_param_type>を利用し</common_float_or_param_type>	なし	0または1
	て、反射光源に追加する完全鏡面反射の量		
	(0.0~1.0) を宣言します。		
<transparent></transparent>	完全鏡面反射光源のカラーを	なし	0または1
	<pre><common_color_or_texture_type> とし</common_color_or_texture_type></pre>		
	て宣言します。		
<transparency></transparency>	<common_float_or_param_type>を利用し</common_float_or_param_type>	なし	0または1
	て、反射カラーに追加する完全鏡面反射光源		
	の量(0.0~1.0)をスカラー値として宣言し		
	ます。		
<pre><index_of_refraction></index_of_refraction></pre>	<pre><common_float_or_param_type>を利用し</common_float_or_param_type></pre>	なし	0または1
	て、単一スカラーインデックスとして完全鏡		
	面反射光源の反射インデックスを宣言しま		
	す。		
<float sid="mySID"></float>	リテラルの浮動小数点スカラーで値を指定し	なし	1
	ます(例: <float> 3.14 </float>)。		
<pre><param/></pre>	浮動小数点スカラーに直接キャスト可能な事	なし	1
	前に定義されたパラメータを参照して値を指		
	定します。		

備考

modifier

概要

<newparam>宣言の可変性またはリンクに関する追加情報を指定します。

コンセプト

COLLADA FX パラメータ宣言で、定数、外部または均一パラメータを指定することができます。

属性

<modifier>要素に属性はありません。

関連要素

<modifier>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	newparam
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

どのFX ランタイムでもすべてのリンク修飾子がサポートされているわけではありません。

```
<newparam sid="diffuseColor">
 <annotate name="UIWidget"><string>none</string></annotate>
 <semantic>DIFFUSE</semantic>
  <modifier>EXTERN</modifier>
  <float3> 0.30 0.56 0.12 </float>
</newparam>
```

name

概要

シェーダ関数のエントリシンボルを指定します。

コンセプト

シェーダコンパイラは、シェーダオブジェクトまたはバイナリコードにコンパイルする関数名を必要とします。翻訳ユニットというパラダイムを利用する FX ランタイムでは、オプションで、内部シンボルを検索するために翻訳ユニットまたはシンボルテーブルを指定することができます。

属性

<name>要素には、以下の属性があります。

0011800	xs:NCName	シンボルがある <code>または<include>ブロックのオプションの sid</include></code>
source	xs:NCName	V V M/V/H &) @ CCOde/ I /C (ICCIUDE/) H Y Y V V/A / V H V V/ SID

関連要素

<name>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	shader, generator
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

newparam

概要

FX ランタイム中に新しい名前付きの<param>オブジェクトを作成して、宣言時に型と初期値と追加属 性を割り当てます。

コンセプト

パラメータは、FX ランタイム中に作成された型付けされたデータオブジェクトで、ランタイム時にコ ンパイラや関数で利用することができます。

属性

<newparam>要素には、以下の属性があります。

sid	xs:NCName	パラメータの識別子(つまり変数名)

関連要素

<newparam>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	effect, technique, profile CG, profile COMMON, profile GLSL	
子要素	annotate, semantic, modifier, VALUE TYPES	
その他	なし	

備考

例

<newparam sid="diffuseColor">

<annotate name="UIWidget"><string>none</string></annotate> <semantic>DIFFUSE</semantic> <modifier>EXTERN</modifier> <float3> 0.30 0.56 0.12 </float>

</newparam>

param

概要

シェーダバインディング宣言で事前に定義されたパラメータを参照します。

コンセプト

属性

<param>要素には、以下の属性があります。

name	xs:NCName
sid	xs:NCName
semantic	ns:NMTOKEN
type	ns:NMTOKEN

関連要素

<param>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	<pre>bind, texture1D, texture2D, texture3D, textureCUBE, textureRECT,</pre>	
	textureDEPTH	
子要素	子要素はありません	
その他	なし	

備考

pass

概要

1つのレンダリングパイプラインのすべてのレンダリング状態とシェーダと設定を静的に宣言します。

コンセプト

<pass>は、レンダリングパイプラインのすべてのレンダリング状態とシェーダについて記述するため のもので、プログラムでジオメトリを送り出す前に、FX ランタイムに対して、現在のグラフィックス の状態を「適用」するように指示するための要素です。

「静的な」宣言というのは、グラフィックス状態に適用するためにスクリプトエンジンやランタイムシ ステムで評価を行う必要がない宣言を意味します。<pass>が適用される時点では、すべてのレンダリ ング状態の設定と均一パラメータは事前に計算されて値がわかっています。

属性

<pass>要素には、以下の属性があります。

sid	xs:NCName	オプションのラベルで、名前で <pass>を指定できるようにします。</pass>
		また必要であれば、テクニックを評価しながらアプリケーションで
		並べ替えられるようにします。

関連要素

<pass>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	technique
子要素	<pre>annotate, color_target, depth_target, stencil_target, color_clear, depth_clear, stencil_clear, draw, RENDER_STATES, shader</pre>
その他	なし

備考

<pass>の並べ替えは、1 つの<pass>を繰り返し適用するような場合に役立ちます。たとえば、目的の 効果を生み出すには、「ぼかし」のローパス重畳をオフスクリーンのテクスチャに何度も適用しなけれ ばならない場合もあります。

例

以下は、<profile CG>に含まれている<pass>の例です。

```
<pass sid="PixelShaderVersion">
```

```
<depth test enable value="true"/>
<depth func value="LEQUAL"/>
<shader stage="VERTEX">
 <name>goochVS</name>
 <bind symbol="LightPos">
    <param ref="effectLightPos"/>
  </bind>
</shader>
<shader stage="FRAGMENT">
```

```
<name>passThruFS</name>
</shader>
</pass>
```

phong

概要

cprofile COMMON>効果の中で利用し、環境、拡散、鏡面反射を行うシェーディング処理された表面 を生成する固定機能パイプラインを宣言します。その際、鏡面反射は Phong BRDF 近似にしたがってシ ェーディング処理されます。

コンセプト

<phong>シェーダは、共通の Phong シェーディング公式を利用します。

```
color = emissive + \langle ambient \rangle * ambient light + \langle diffuse \rangle * max(N.L, 0) +
<specular>*max(H.I, 0)<shininess>
```

Blinn シェーディングで利用している半角ベクトル H ではなく、完全反射ベクトル R を利用している点 に注意してください。

属性

<phong>要素に属性はありません。

関連要素

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	technique
子要素	emission, ambient, diffuse, specular, shininess, reflective,
	reflectivity, transparent, transparency, index of refraction
その他	なし

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<emission></emission>	<pre><common_color_or_texture_type> を 利 用して、このオブジェクトの表面から放射さ れる光源の量を宣言します。</common_color_or_texture_type></pre>	なし	0または1
<ambient></ambient>	<pre><common_color_or_texture_type> を 利 用して、このオブジェクトの表面から放射される環境光の量を宣言します。</common_color_or_texture_type></pre>	なし	0または1
<diffuse></diffuse>	<pre><common_color_or_texture_type> を 利 用して、このオブジェクトの表面から反射される拡散光の量を宣言します。</common_color_or_texture_type></pre>	なし	0または1
<specular></specular>	<pre><common_color_or_texture_type> を 利 用して、このオブジェクトの表面から反射さ れる鏡面反射光の量を宣言します。</common_color_or_texture_type></pre>	なし	0または1
<shininess></shininess>	<common_float_or_param_type>を利用して、このオブジェクトの表面から鏡面反射 突起部分の鏡面度または荒さを宣言します。</common_float_or_param_type>	なし	0または1
<reflective></reflective>	完全鏡面反射のカラーを <common_color_or_texture_type>として宣言します。</common_color_or_texture_type>	なし	0または1
<reflectivity></reflectivity>	<pre><common_float_or_param_type> を利用 して、反射された光に追加する完全鏡面反射 の量 (0.0~1.0の値) を宣言します。</common_float_or_param_type></pre>	なし	0または1

<transparent></transparent>	完全鏡面反射のカラーを <common_color_or_texture_type>として宣言します。</common_color_or_texture_type>	なし	0または1
<transparency></transparency>	<pre><common_float_or_param_type> を利用 して、反射されたカラーに追加する完全鏡面 反射の量を 0.0~1.0 のスカラー値として宣言 します。</common_float_or_param_type></pre>	なし	0または1
<pre><index_of_refraction></index_of_refraction></pre>	<pre><common_float_or_param_type> を利用 して、完全鏡面反射の反射インデックスを単 ーのスカラーインデックスとして宣言します。</common_float_or_param_type></pre>	なし	0または1

備考

profile_CG

概要

プラットフォーム固有のデータ型と<technique>宣言のブロックをオープンします。

コンセプト

<profile CG>要素は、特定のプロファイル用のプラットフォーム固有の値と宣言をすべてカプセル 化します。<effect>範囲内では、すべてのプラットフォームでパラメータが利用できますが、 cprofile CG>ブロック内で宣言されたパラメータは、そのプロファイル中のシェーダだけが利用で きます。

れている COLLADA の抽象データ型との明確なインタフェースを定義します。この範囲の外側で宣言され たパラメータの場合、<profile CG>ブロックの中で利用する際にキャストしなければならない場合 があります。

属性

file CG>には、以下の属性があります。

platform	xs:NMTOKEN	オプション。プラットフォームのタイプ。これはベンダ定義された 文字列で、プラットフォームまたは technique 用の機能ターゲッ
		トを表します。

関連要素

file CG>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数		
親要素	effect		
子要素	code, include, image, newparam, technique		
その他	なし		

備考

```
cprofile CG>
    <newparam sid="color">
      <float3> 0.5 0.5 0.5 </float3>
    </newparam>
    <newparam sid="lightpos">
      <semantic>LIGHTPOSO</semantic>
      <float3> 0.0 10.0 0.0 </float3>
    </newparam>
    <technique id="default" sid="default">
        <code>
    void passthroughVS (in varying float4 pos,
        in uniform float3 light_pos,
         in uniform float4x4 mat : MODELVIEWPROJ,
         out varying float4 oPosition: POSITION,
```

```
out varying float3 oToLight : TEXCOORD0 )
{ oPosition = mul(modelViewProj, position);
  oToLight = light pos - pos.xyz;
  return;
float3 diffuseFS (in uniform float3 flat_color,
      in varying float3 to light : TEXCOORDO ) : COLOR
    { return flat_color * clamp(1.0 - sqrt(dot(to_light, to_light)),
         0.0, 1.0);
    </code>
    <pass sid="single_pass">
      <shader stage="VERTEX">
        <name>passthroughVS</name>
        <bind symbol="light pos">
          <param ref="lightpos"/>
        </bind>
      </shader>
      <shader stage="FRAGMENT">
        <name>diffuseFS</name>
        <bind symbol="flat color">
          <param ref="color"/>
        </bind>
      </shader>
    </pass>
  </technique>
</profile_CG>
```

profile_COMMON

概要

プラットフォームに関係のない共通の固定機能シェーダの宣言ブロックをオープンします。

コンセプト

file COMMON>要素は、プラットフォームとは独立した固定機能シェーダの値と宣言をすべてカ プセル化し、すべてのプラットフォームでサポートする必要があります。common
効果は、 現在の効果ランタイムで他のプロファイルを認識できない際に、信頼性の高いフォールバックとして利 用するように設計されています。

属性

file COMMON 要素に属性はありません。

関連要素

file COMMON>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	effect	
子要素	image, newparam, technique	
その他	なし	

子要素

名前/例	解説	デフォルト値	出現回数
<pre><image <="" id="myID" pre=""/></pre>	標準の COLLADA イメージリソースを宣言	なし	任意
name="./BrickTexture"	します。		
format="R8G8B8A8"			
height="64" width="128"			
depth-"1">			
<pre><newparam sid="mySID"></newparam></pre>	すべてのプラットフォームで認識可能な	なし	任意
<semantic></semantic>	制約された型セット(補足のセマンティ		
DIFFUSECOLOR	ックスを伴った <float>、<float2>、</float2></float>		
	<float3>, <float4>, <surface>,</surface></float4></float3>		
<float3></float3>	<sampler2d>)から新しいパラメータを</sampler2d>		
1 2 3	作成します。		
<technique></technique>	この効果用の technique を 1 つだけ宣	なし	1
	言します。このノードには、 <asset>と</asset>		
	<image/> と <extra>を含み、</extra>		
	<pre><constant>, <lambert>, <phong>,</phong></lambert></constant></pre>		
	<bli><bli>nn>のいずれか1つを追加すること</bli></bli>		
	ができます。		

備考

```
common>
  <newparam sid="myDiffuseColor">
     <float3> 0.2 0.56 0.35 </float3>
   </newparam>
   <technique sid="phong1">
     <phong>
       <emmision><color>1.0 0.0 0.0 1.0</color></emmision>
       <ambient><color>1.0 0.0 0.0 1.0</color></ambient>
       <diffuse><param>myDiffuseColor</param></diffuse>
       <specular><color>1.0 0.0 0.0 1.0</color></specular>
       <shininess><float>50.0</float></shininess>
       <reflective><color>1.0 1.0 1.0 1.0/reflective>
       <reflectivity><float>0.5</float></reflectivity>
       <transparent><color>0.0 0.0 1.0 1.0</transparent>
       <transparency><float>1.0</float></transparency>
     </phong>
   </technique>
</profile_COMMON>
```

profile_GLES

概要

プラットフォーム固有のデータ型と<technique>宣言のブロックをオープンします。

コンセプト

<profile GLES>要素は、特定のプロファイル用のプラットフォーム固有の値と宣言をすべてカプセ ル化します。<effect>範囲内では、すべてのプラットフォームでパラメータが利用できますが、 できます。

されている COLLADA の抽象データ型との明確なインタフェースを定義します。この範囲の外側で宣言さ れたパラメータの場合、<profile GLES>ブロックの中で利用する際にキャストしなければならない 場合があります。

属性

file GLES>には、以下の属性があります。

platform	xs:NMTOKEN	オプション。プラットフォームの種類。ベンダ定義された文字列で、	
		プラットフォームまたは techinique の機能ターゲットを表します。	

関連要素

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	effect
子要素	image, newparam, technique
その他	なし

<newparam>には GLES の新しいオブジェクトが含まれます。<newparam>用の GLES 固有の VALUE TYPES には、<texture pipeline>と<sampler state>があります。

備考

profile_GLSL

概要

プラットフォーム固有のデータ型と<technique>宣言のブロックをオープンします。

コンセプト

<profile_GLSL>要素は、特定のプロファイル用にプラットフォーム固有の値と宣言をすべてカプセル化します。<effect>範囲内では、すべてのプラットフォームでパラメータが利用できますが、<profile_GLSL>ブロック内で宣言されたパラメータは、そのプロファイル中のシェーダだけが利用できます。

属性

file_GLSL>要素に属性はありません。

関連要素

file GLSL>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	effect
子要素	code, include, image, newparam, technique
その他	なし

備考

RGB

概要

<texture pipeline>コマンドの RGB 部分を定義します。これは、混合モードのテクスチャ操作です。

コンセプト

割り当てと全体のコンセプトの詳細に関しては、<texture pipeline>の解説を参照してください。

属性

〈RGB〉要素には、以下の属性があります。

operator	REPLACE MODULATE ADD ADD_SIGNED INTERPOLATE SUBTRACT DOT3_RGB DOT3 RGBA	glTexEnv(TEXTURE_ENV, COMBINE_RGB, operator)での利用を想定
scale	float	glTexEnv(TEXTURE_ENV, RGB_SCALE, scale)での利用を想定

関連要素

<RGB>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	texcombiner
子要素	argument
その他	なし

<argument>要素は、実行する特定の操作に必要な引数を設定します。

備考

例

<texture pipeline>を参照してください。

sampler1D

概要

1次元のテクスチャサンプラです。

コンセプト

属性

<sampler1D>要素に属性はありません。

関連要素

<sampler1D>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	newparam, setparam, usertype
子要素	<pre>source, wrap_s, minfilter, magfilter, mipfilter, border_color,</pre>
	mipmap maxlevel, mipmap bias
その他	なし

```
<source>要素は、0個または1つ指定できます。
<wrap_s>要素は、0個または1つ指定できます。
<minfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<magfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<br/><border_color>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipmap_maxlevel>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipmap_bias>要素は、0個または1つ指定できます。
```

備考

sampler2D

概要

2次元のテクスチャサンプラです。

コンセプト

属性

<sampler2D>要素に属性はありません。

関連要素

<sampler2D>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	newparam, setparam, usertype	
子要素	<pre>source, wrap_s, wrap_t, minfilter, magfilter, mipfilter,</pre>	
	border color, mipmap maxlevel, mipmap bias	
その他	なし	

```
<source>要素は、0個または1つ指定できます。
<wrap s>要素は、0個または1つ指定できます。
<wrap t>要素は、0個または1つ指定できます。
<minfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<magfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<border color>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipmap maxlevel>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipmap bias>要素は、0個または1つ指定できます。
```

備考

sampler3D

概要

3次元のテクスチャサンプラです。

コンセプト

属性

<sampler3D>要素に属性はありません。

関連要素

<sampler3D>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	newparam, setparam, usertype	
子要素	<pre>source, wrap_s, wrap_t, warp_p, minfilter, magfilter, mipfilter,</pre>	
	border color, mipmap maxlevel, mipmap bias	
その他	なし	

```
<source>要素は、0個または1つ指定できます。
<wrap_s>要素は、0個または1つ指定できます。
<wrap_t>要素は、0個または1つ指定できます。
<wrap_p>要素は、0個または1つ指定できます。
<minfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<magfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<br/><mipfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipmap_maxlevel>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipmap_bias>要素は、0個または1つ指定できます。
```

備考

samplerCUBE

概要

キューブマップ用のテクスチャサンプラです。

コンセプト

属性

<samplerCUBE>要素に属性はありません。

関連要素

<samplerCUBE>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	newparam, setparam, usertype	
子要素	<pre>source, wrap_s, wrap_t, wrap_p, minfilter, magfilter, mipfilter,</pre>	
	border color, mipmap maxlevel, mipmap bias	
その他	なし	

```
<source>要素は、0個または1つ指定できます。
<wrap s>要素は、0個または1つ指定できます。
<wrap_t>要素は、0個または1つ指定できます。
<wrap p>要素は、0個または1つ指定できます。
<minfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<magfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<border color>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipmap maxlevel>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipmap bias>要素は、0個または1つ指定できます。
```

備考

samplerRECT

概要

3次元のテクスチャサンプラです。

コンセプト

属性

<samplerRECT>要素に属性はありません。

関連要素

<samplerRECT>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	newparam, setparam, usertype	
子要素	<pre>source, wrap_s, wrap_t, minfilter, magfilter, mipfilter,</pre>	
	border color, mipmap maxlevel, mipmap bias	
その他	なし	

```
<source>要素は、0個または1つ指定できます。
<wrap_s>要素は、0個または1つ指定できます。
<wrap_t>要素は、0個または1つ指定できます。
<minfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<magfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipfilter>要素は、0個または1つ指定できます。
<box
<br/>
<box
color>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipmap_maxlevel>要素は、0個または1つ指定できます。
<mipmap bias>要素は、0個または1つ指定できます。
```

備考

sampler_state

概要

file GLES>用の 2 次元のテクスチャサンプラ状態です。これは、1 つまたは複数の <texture pipeline>で参照されるサンプラ固有の状態のバンドルです。

コンセプト

属性

<sampler state>要素に属性はありません。

関連要素

<sampler state>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	newparam, setparam, usertype	
子要素	<pre>wrap_s, wrap_t, minfilter, magfilter, mipfilter,</pre>	
	mipmap maxlevel, mipmap bias	
その他	なし	

<wrap s>要素は、0個または1つ指定できます。 <wrap t>要素は、0個または1つ指定できます。 <minfilter>要素は、0個または1つ指定できます。 <magfilter>要素は、0個または1つ指定できます。 <mipfilter>要素は、0個または1つ指定できます。 <border color>要素は、0個または1つ指定できます。 <mipmap maxlevel>要素は、0個または1つ指定できます。 <mipmap bias>要素は、0個または1つ指定できます。

備考

semantic

概要

パラメータ宣言の目的を記述するメタ情報を指定します。

コンセプト

セマンティックスは、オーバーロードの考えを利用して、効果中のパラメータ宣言の意図や目的を表します。セマンティックスは、これまで以下の3つの異なる種類のメタ情報を表すのに利用されてきています。

- パラメータに割り当てられたハードウェアのリソース (例: TEXCOORD2、NORMAL)
- パラメータで表現されているシーングラフまたはグラフィックス API からの値 (例: MODELVIEWMATRIX、CAMERAPOS、VIEWPORTSIZE)
- ランタイム時に効果を初期化する際に、アプリケーションで設定するユーザ定義された値(例: DAMAGE PERCENT、MAGIC LEVEL)

セマンティックスは、マッピングを明確にするために<bind_material>メカニズムを利用して、シーングラフ中にある値とデータソースを効果パラメータにバインドするために、<node>中の<instance geometry>宣言で利用されます。

属性

<semantic>要素に属性はありません。

関連要素

<semantic>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	newparam	
子要素	子要素はありません	
その他	なし	

備考

現時点では、セマンティックスの標準セットはありません。

```
<newparam sid="diffuseColor">
    <annotate name="UIWidget"><string>none</string></annotate>
    <semantic>DIFFUSE</semantic>
    <modifier>EXTERN</modifier>
    <float3> 0.30 0.56 0.12 </float>
</newparam>
```

setparam

概要

先に定義されたパラメータに新しい値を割り当てます。

コンセプト

パラメータはランタイム時に<newparam>として定義することができ、もしくはソースコードや事前に コンパイルされたバイナリ中のグローバルパラメータとしてコンパイル/リンク時に発見することがで きます。それぞれの<setparam>は推測的な呼び出しで、以下の効果を狙っています。

「X」と呼ばれるシンボルを検索して、現在の範囲内に見つかった場合には、このデータ型の値 を割り当てます。シンボルが見つからなかった場合や値を割り当てることができなかった場合に は、無視してロードを続けます。

<setparam>のインスタンスはどれも等しい点に注意してください。特定の<profile *>の中の <setparam>は、プラットフォーム固有のデータ型と定義へのアクセス権を持ちます。これに対して、 <instance material>ブロック中の<setparam>は、共通の COLLADA データ型のプールからの値だ けを割り当てることができます。

<setparam>は、事前に注釈を削除されたパラメータに対して注釈を追加する1つの方法です。高度な 言語プロファイルでは、<array length="N"/>要素を利用して、サイズが未定義の配列に具体化さ れた配列サイズを割り当てるのに<setparam>が利用できます。また、<usertype>のパラメータのイ ンスタンスを抽象インタフェース型のパラメータと結び付けるのにも利用できます。

属性

<setparam>要素には、以下の属性があります。

ref	xs:NCName	値セットを持つ事前に定義されたパラメータを参照します。
-----	-----------	-----------------------------

関連要素

<setparam>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	technique, generator, instance effect	
子要素	annotate, VALUE TYPES, usertype, array, connect param	
その他	なし	

備考

FX ランタイムローダでは、失敗した<setparam>をレポートするかどうか規定されていませんが、失 敗した際に効果のロードを中断すべきではありません。

例

<setparam ref="light Direction"> <annotate name="UIWidget"> <string>text</string> </annotate> <float3> 0.0 1.0 0.0 </float3> </setparam>

shader

概要

<pass>のレンダリングパイプラインで実行するシェーダを宣言して準備を整えます。

コンセプト

実行可能形式のシェーダは、特定の段階でレンダリングパイプラインを行う小さな関数またはプログラムです。こういったシェーダは、事前にロードされコンパイルされたバイナリから、もしくは埋め込まれたソースコードからランタイム時に動的に生成させて組み立てることができます。<shader>宣言は、シェーダをコンパイルして、値または事前に定義されたパラメータを均一入力にバインドするために必要なすべての情報を保持します。

COLLADA FX では、FX ランタイムのサポートに応じて、ソースコードシェーダと事前にコンパイルされたバイナリシェーダの両方が宣言できます。事前にコンパイルされたバイナリシェーダの場合、すでにコンパイル時にターゲットプロファイルが指定されていますが、バイナリヘッダをロードして解析しなくても、事前にコンパイルされたシェーダに関係した宣言を COLLADA リーダで検証できるようにするために、やはりプロファイル宣言が必要となります。

事前に定義されたパラメータ、ソースシェーダ、バイナリシェーダは、同じ名前空間/シンボルテーブル/ソースコード文字列にまとめられるとみなされるため、すべてのシンボルと関数がシェーダの宣言で利用でき、共通の関数、たとえば、共通のライティングコードを<technique>中の複数のシェーダで利用することが可能です。「翻訳ユニット」の考えを利用した FX ランタイムでは、それぞれのソースコードブロックに名前を付けて、名前空間をそういったユニットに分割することができます。

均一入力パラメータを持つシェーダは、シェーダの宣言時に、事前に定義されたパラメータもしくはリテラル値をこれらの値にバインドすることができ、必要であれば、コンパイラに対してリテラルや定数の値をインライン化させることが可能です。

属性

<shader>要素には、以下の属性があります。

stage	プラットフ ォーム固有	プログラマブル・シェーダの実行対象となるパイプラインの段階を 指定します(例:VERTEX、FRAGMENT など)。
	の列挙	

関連要素

<shader>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	pass	
子要素	<pre>annotate, compiler_target, common_color_or_texture_type, name, bind</pre>	
その他	なし	

備考



```
<shader stage="VERTEX">
 <compiler_target>ARBVP1</compiler_target>
 <name source="ThinFilm2">main</entry>
 <bind symbol="lightpos">
   <param ref="LightPos_03"/>
 </bind>
</shader>
```

stencil clear

概要

レンダリングターゲット表面をクリアするかどうか、クリアする場合にはどんな値を利用するのかを指定します。

コンセプト

描画を行う前に、レンダリングターゲット表面を空のキャンバス、つまりデフォルト値にリセットしなければならない場合もあります。これらの<stencil_clear>宣言では、どの値を利用するのか指定します。クリア文が含まれていない場合、ターゲット表面は、レンダリングが開始しても変更されません。

属性

<stencil clear>要素には、以下の属性があります。

index	xs:nonNegativeInteger	マルチレンダリングターゲットのどれを設定するのか
		指定します。

関連要素

<stencil clear>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	pass
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

例

<stencil clear index="0">0.0</stencil clear>

stencil_target

概要

特定のパスで、ステンシルの各情報を出力から受け取る<surface>を指定します。

コンセプト

複数レンダリングターゲット(MRT)では、フラグメントシェーダに対して、パスごとに 1 つ以上の値 を出力させたり、または標準の深度とステンシルの単位を任意のオフスクリーンバッファに書き込んだ り、そこから読み込んだりするためにリダイレクトさせることが可能です。これらの要素は、FX ラン タイムに対して、事前に定義されているどのサーフェイスを利用するのかを伝えることになります。

属性

<stencil target>要素には、以下の属性があります。

index	xs:nonNegativeInteger	マルチレンダリングターゲットのいずれか 1 つを指し
		示します。
slice	xs:nonNegativeInteger	単一の MIP マップレベル、ユニークな立方体の面、ま
		たは 3 次元テクスチャのレイヤも含め、対象とする
		<surface>の中のサブイメージを指し示します。</surface>

関連要素

<stencil target>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	pass
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

現在のプラットフォーム (Q4 2005) では、MRT の設定がかなり限定されています。たとえば、カラー バッファは4つだけで(すべて同じサイズで同じピクセルフォーマットでなければならない)、すべて のカラーバッファに対して1つの深度バッファとステンシルバッファしかアクティブにすることができ ません。COLLADA FX 宣言は、こういった制約を緩めるように設計されており、FX ランタイムは、実際 に適用する前に<pass>中の特性の MRT の宣言を検証する必要があり、検証に失敗した場合にはエラー のフラグを設定しなければなりません。

<stencil target>が指定されていない場合、FX ランタイムは、対象とするプラットフォーム用のデ フォルトのステンシルバッファセットを利用します。

```
<newparam sid="surfaceTex">
  <surface type="2D"/>
</newparam>
<pass>
  <stencil target>surfaceTex</stencil target>
</pass>
```

surface

概要

テクスチャサンプルのソースとレンダリングパスのターゲットの両方として利用されるリソースを宣言します。

コンセプト

<surface>というのは、GPU レンダリングのために<image>を抽象的に汎用化したもので、たとえば、事前にフィルタリングされた N レベルの MIP マッピングされたイメージなど、複数の<image>リソースを単一のオブジェクトにリンクすることが可能で、6 つの四角形のテクスチャを立方体マップに結び付けることができます。

<surface>オブジェクトは、個々のピクセルのフィールドのサイズとレイアウトを表すデータ形式を持ち、<size>を利用してピクセルの絶対値にサイズ化したり、<viewport_ratio>を利用してビューポートの分数としてサイズ化することが可能です。また、<mip_levels>を利用して決まった数のMIPマップレベルを宣言することもできます。

<surface>オブジェクトは、事前に存在する<image>オブジェクトセットから、それぞれの ID の順番 リストを<init_from>に指定して初期化することができます。また、<generator>要素を利用して、 表面の各ピクセルに対してソースコードを評価することでプログラム的に初期化することも可能です。

属性

<surface>要素には、以下の属性があります。

type	fx_surface_type_enum	必須。表面のタイプを指定します。1D、2D、3D、CUBE、
		DEPTH、RECT のいずれか1つを指定します。

関連要素

<surface>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	newparam, setparam	
子要素	<pre>init_from, generator, format, size, viewport_ratio, mip_levels,</pre>	
	mipmap generate	
その他	なし	

備考

```
<surface type="CUBE">
  <init_from> sky01 sky02 sky03 sky04 sky05 ground </init_from>
  <format> R5G6B5 </format>
  <size> 64 64 </size>
  <mip_levels> 0 </mip_levels>
</surface>
```

technique

概要

ある方法を利用して効果をレンダリングするために必要なテクスチャやサンプラー、シェーダ、パラメ ータ、パスに関する記述を保持します。

コンセプト

テクニックは、効果のレンダリングに必要なすべての必須要素を保持します。それぞれの効果には複数 のテクニックを含めることができ、それぞれのテクニックで効果をレンダリングする別々の方法を表し ます。一般にテクニックが利用される状況としては、以下の3つがあります。

- あるテクニックで高い LOD バージョンの効果を記述し、2 番目のテクニックで同じ効果の低い LODバージョンを記述するような場合。
- 同じ効果を別々の方法で記述しておき、標準の API を利用した未知のデバイスに対して最も効率 的なバージョンの効果を見つけるために FX ランタイムの検証ツールを利用する場合。
- 異なるゲームの状態、たとえば、昼間のテクニックと夜間のテクニックなどの効果を記述し、通 常のテクニックと「魔法が有効」なテクニックを記述する場合。

属性

<technique>要素には、以下の属性があります。

id	xs:ID	オプション。要素のユニークな識別子を含むテキスト文字列です。 この値はインスタンス文書中でユニークでなければなりません。
sid	xs:NCName	オプション。この要素のサブ識別子を含んだテキスト文字列値です。
		この値は、親要素の範囲内でユニークでなければなりません。

関連要素

<technique>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数	
親要素	profile CG, profile COMMON, profile GLSL, bind material,	
	source, light, optics, imager	
子要素	asset, annotate, blinn, include, newparam, setparam, pass	
その他	なし	

備考

ツールを利用して効果のテクニックを自動的に生成することができ、テクニックを最善の<asset>と して管理する(作成時間、利用可能期間、親子関係、生成に利用するツールを管理する)ことが可能で す。



technique_hint

概要

効果で利用するテクニックのプラットフォームのヒントを追加します。

コンセプト

シェーダエディタは、効果がインスタンス化された際にデフォルトで利用するテクニックの情報が必要 とします。検証の前提として、FX ランタイムがプラットフォームの文字列を認識できた場合には、推 奨されているテクニックを利用しなければなりません。

属性

<technique_hint>要素には、以下の属性があります。

platform	xs:NCName	ヒントが対象としているプラットフォームを指定した文字列を定義 します。
ref	xs:NCName	プラットフォームの名前を参照します。

関連要素

<technique hint>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	instance effect
子要素	子要素はありません
その他	なし

備考

例

<technique_hint platform="PS3" ref="HighLOD"> <technique_hint platform="OpenGL|ES" ref="twopass">

texcombiner

概要

<texture pipeline>コマンドを定義します。これは混合モードのテクスチャ操作です。

コンセプト

この要素は、割り当てられているテクスチャユニットの混合状態を設定します。 割り当てと全体のコンセプトの詳細に関しては、<texture pipeline>の解説を参照してください。

属性

<texcombiner>要素に属性はありません。

関連要素

<texcombiner>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	texture pipeline
子要素	constant, RGB, alpha
その他	なし

<constant>要素は、glTexEnv(TEXTURE_ENV, TEXTURE_ENV_COLOR, value)のための float4です。

<RGB>要素は、テクスチャ混合コマンドの RGB コンポーネントを設定します。 <alpha>要素は、テクスチャ混合コマンドのアルファコンポーネントを設定します。

備考

コマンドは、最終的に OpenGL ES ハードウェアのテクスチャユニットに割り当てられます。このコマンドタイプでは、以下のコマンドで、それぞれのテクスチャユニットをテクスチャ混合モードに変更しなければなりません。

glTexEnv(TEXTURE ENV, TEXTURE ENV MODE, COMBINE)

OpenGL ES ハードウェアのテクスチャユニット代入の詳細に関しては<texture_pipeline>の解説を参照してください。

例

<texture pipeline>を参照してください。

texenv

概要

<texture pipeline>コマンドを定義します。これは単純な非混合モードのテクスチャ操作です。

コンセプト

この要素は、割り当てられる先のテクスチャユニットの状態を設定します。 割り当てと全体のコンセプトの詳細に関しては、<texture pipeline>の解説を参照してください。

属性

<texenv>要素には、以下の属性があります。

operator	REPLACE MODULATE DECAL BLEND ADD	入力フラグメントに対して実行する操作
unit	xs:NCName	テクスチャユニット

関連要素

<texenv>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	texture pipeline
子要素	constant
その他	なし

<constant>要素は、glTexEnv(TEXTURE ENV, TEXTURE ENV COLOR, value)のための float4 です。

備考

割り当てられる先のテクスチャユニットに対して glTexEnv(TEXTURE ENV, TEXTURE ENV MODE, operator) の呼び出しを行うものと想定しています。

例

<texture pipeline>を参照してください。

texture_pipeline

概要

通常モードと混合モードで glTexEnv を利用してマルチテクスチャ操作に変換されるテクスチャコマンドセットを定義します。

コンセプト

この要素には、すべての GLES マルチテクスチャ状態を定義する順番付けられたコマンドシーケンスが含まれます。

それぞれのコマンドは、最終的にテクスチャユニットに割り当てられます。

- <texcombiner>は、混合モードでテクスチャユニットの設定を定義します。
- <texenv>は、非混合モードでテクスチャユニットの設定を定義します。

それぞれのコマンドは、テクスチャユニットの名前とコマンドの利用特性を基にして、後のバインド処理の際にテクスチャユニットに割り当てられます。

フラグメントシェーダを有効にするために、パスは <texture_pipeline> と <texture pipeline enable>の状態を利用します。

それぞれのコマンドの順番は1:1で、ハードウェアのテクスチャユニットが割り当てられます。 テクスチャクロスバーがサポートされているかどうかに応じて(GLES 1.1)、個々のコマンドから名前 付きのテクスチャユニットオブジェクト(<texture_unit>)が適切なハードウェアテクスチャユニ ットに割り当てられます。GLES 1.0 の場合、テクスチャは既存のユニットからのものでなければなら ず、そのため、source="texture"をともなう2つの引数は、同じ<texture_unit>要素を参照して いない場合には不正なものとなります。

属性

<texture pipeline>要素には、以下の属性があります。

sid	xs:NCName

関連要素

<texture pipeline>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	profile GLES
子要素	texcombiner, texenv
その他	なし

備考

それぞれの要素はコマンドのタイプです。



```
<texture_pipeline sid="terrain-transition-shader">
<texcombiner>
 <constant> 0.0f, 0.0f, 0.0f, 1.0f </constant>
  <RGB operator="INTERPOLATE">
   <argument idx="0" source="TEXTURE" operand="SRC RGB" unit="gravel"/>
   <argument idx="1" source="TEXTURE" operand="SRC RGB" unit="grass"/>
   <argument idx="2" source="TEXTURE" operand="SRC ALPHA" unit="transition"/>
   </RGB>
   <alpha operator="INTERPOLATE">
   <argument idx="0" source="TEXTURE" operand="SRC ALPHA" unit="gravel"/>
   <argument idx="1" source="TEXTURE" operand="SRC_ALPHA" unit="grass"/>
   <argument idx="2" source="TEXTURE" operand="SRC ALPHA" unit="transition"/>
   </alpha>
 </texcombiner>
 <texcombiner>
  <RGB operator="MODULATE">
   <argument idx="0" source="PRIMARY" operand="SRC RGB"/>
   <argument idx="1" source="PREVIOUS" operand="SRC RGB"/>
  </RGB>
  <alpha operator="MODULATE">
   <argument idx="0" source="PRIMARY" operand="SRC ALPHA"/>
   <argument idx="1" source="PREVIOUS" operand="SRC_ALPHA"/>
  </alpha>
 </texcombiner>
 <texenv unit="debug-decal-unit" operator="DECAL"/>
</texture pipeline>
```

texture unit

概要

テクスチャユニットの定義型です。これらのテクスチャユニットは、<texture_pipeline>コマンド中での利用に応じて、ハードウェアテクスチャユニットにマッピングされます。

コンセプト

<texture_pipeline>がハードウェアの上限を一度に超えない限りは、ハードウェアで対応している以上のテクスチャユニットを定義することも可能で、フラグメントシェーダも有効となります(GLESのバージョンにも依存します)。

属性

<texture unit>要素には、以下の属性があります。

S	1 (1	xs:NCName
\sim	- La	20 · NCName

関連要素

<texture unit>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	RGB, alpha
子要素	surface, sampler state, texcoord
その他	なし

<surface>要素は、テクスチャに利用される表面の surface パラメータを参照します。

<sampler_state>要素は、表面のサンプリングに利用される状態を持った<sampler_state>パラメータを参照します。

<texcoord>要素には、テクスチャユニットが利用しなければならないテクスチャ座標配列のセマンティックス名を表す semantic 属性が含まれます。配列は<bind_material>を利用してマッピングされます。

備考

例

<texture pipeline>を参照してください。

usertype

概要

構造化されたクラスのインスタンスを作成します。

コンセプト

インタフェースオブジェクトは、Cg 言語 1.4 の仕様の一部として導入されたもので、オブジェクトの クラスのための抽象インタフェースを宣言します。インタフェースオブジェクトは、必要な関数シグネ チャだけを宣言し、特定のメンバデータのために必要なものは何も宣言しません。

ユーザタイプは、必要となる任意のメンバデータとともにインタフェース中に宣言された各関数の実装 を提供するための関数宣言を含む、そういったインタフェースや構造体の具体化されたインスタンスで す。

ユーザタイプは、ソースコードまたはインクルードされたシェーダ中でだけ宣言でき、<usertype>宣 言は、テクニック用にすべてのソースコードが宣言された後にだけ指定することができます。

属性

<usertype>要素には、以下の属性があります。

name	xs:NCName	現在のソースコード翻訳ユニット中にある構造体宣言のための識別子
		です。

関連要素

<usertype>要素は、以下の要素と関連性があります。

出現回数	スキーマ中に定義された要素の数
親要素	newparam (cg newparam)
子要素	CG VALUE TYPE, array, usertype, connect param
その他	なし

備考

<usertype>の各要素は、値が設定されている順番で各リーフノードを処理するか、もしくは一連の <setparam>宣言を利用して名前で各リーフノードにアクセスして、<newparam>中で作成時に初期化 することができます。

```
<newparam sid="lightsource">
  <usertype name="spotlight">
   <float3> 10 12 10 </float3>
    <float3> 0.3 0.3 0.114 </float3>
  </usertype>
</newparam>
```

VALUE TYPES

概要

異なる FX プロファイルは、強く型付けされた利用可能な別々のパラメータセットを持ちます。

COLLADA の範囲の VALUE_TYPES

bool, bool2, bool3, bool4, int, int2, int3, int4, float, float2, float3, float4, float1x1, float1x2, float1x3, float1x4, float2x1, float2x2, float2x3, float2x4, float3x1, float3x2, float3x3, float3x4, float4x1, float4x2, float4x3, float4x4, surface, sampler1D, sampler2D, sampler3D, samplerCUBE, samplerRECT, samplerDEPTH, enum

GLSL の範囲の VALUE_TYPES

bool, bool2, bool3, bool4, int, int2, int3, int4, float, float2, float3, float4, float2x2, float3x3, float4x4, surface, sampler1D, sampler2D, sampler3D, samplerCUBE, samplerRECT, samplerDEPTH, enum

CG の範囲の VALUE_TYPES

bool, bool2, bool3, bool4, bool1x1, bool1x2, bool1x3, bool1x4, bool2x1, bool2x2, bool2x3, bool2x4, bool3x1, bool3x2, bool3x3, bool3x4, bool4x1, bool4x2, bool4x3, bool4x4, int, int2, int3, int4, int1x1, int1x2, int1x3, int1x4, int2x1, int2x2, int2x3, int2x4, int3x1, int3x2, int3x3, int3x4, int4x1, int4x2, int4x3, int4x4, float, float2, float3, float4, float1x1, float1x2, float1x3, float1x4, float2x1, float2x2, float2x3, float2x4, float3x1, float3x2, float3x3, float3x4, float4x1, float4x2, float4x3, float4x4, half, half2, half3, half4, half1x1, half1x2, half1x3, half1x4, half2x1, half2x2, half2x3, half2x4, half3x1, half3x2, half3x3, half3x4, half4x1, half4x2, half4x3, half4x4, fixed, fixed2, fixed3, fixed4, fixed1x1, fixed1x2, fixed1x3, fixed1x4, fixed2x1, fixed2x2, fixed2x3, fixed2x4, fixed3x1, fixed3x2, fixed3x3, fixed3x4, fixed4x1, fixed4x2, fixed4x3, fixed4x4, surface, sampler1D, sampler2D, sampler3D, samplerCUBE, samplerRECT, samplerDEPTH, enum

GLES の範囲の VALUE_TYPES

bool, bool2, bool3, bool4, int, int2, int3, int4, float, float2, float3, float4, float1x1, float1x2, float1x3, float1x4, float2x1, float2x2, float2x3, float2x4, float3x1, float3x2, float3x3, float3x4, float4x1, float4x2, float4x3, float4x4, texture unit, surface, sampler state, texture pipeline, enum

このページは空白です。

Appendix A キューブの例

このページは空白です。

例:キューブ

この付録では、単純な白いキューブを記述する COLLADA インスタンス文書の簡単な例を示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<COLLADA xmlns="http://www.collada.org/2005/COLLADASchema" version="1.3.0">
  clibrary type="GEOMETRY">
   <geometry id="box" name="box">
     <mesh>
       <source id="box-Pos">
         <float array id="box-Pos-array" count="24">
          -0.5 0.5 0.5
           0.5 0.5 0.5
          -0.5 -0.5 0.5
           0.5 -0.5 0.5
          -0.5 0.5 -0.5
           0.5 0.5 -0.5
          -0.5 -0.5 -0.5
           0.5 -0.5 -0.5
         </float array>
         <technique profile="COMMON">
           <accessor source="#box-Pos-array" count="8" stride="3">
             <param name="X" type="float" />
             <param name="Y" type="float" />
             <param name="Z" type="float" />
           </accessor>
         </technique>
       </source>
        <vertices id="box-Vtx">
         <input semantic="POSITION" source="#box-Pos"/>
       </vertices>
       <polygons count="6">
         <input semantic="VERTEX" source="#box-Vtx" idx="0"/>
          0 2 3 1 
         0 1 5 4
         6 7 3 2
         0 4 6 2
          3 7 5 1 
          5 7 6 4 
       </polygons>
     </mesh>
   </geometry>
 </library>
  <scene id="DefaultScene">
   <node id="Box" name="Box">
     <instance url="#box"/>
   </node>
  </scene>
</COLLADA>
```

このページは空白です。

用語集

このページは空白です。

• **属性**:XML 要素は、任意の数の属性を持つことができます(なくてもかまいません)。属性は、開始タグの中のタグ名の直後に指定します。それぞれの属性は、名前と値のペアで構成します。属性の値の部分は、かならず引用符("")で囲みます。属性は、それが結び付けられている要素についての意味的な情報を提供します。以下に例を示しておきます。

<tagName attribute="value">

• **コメント**: XML ファイルには、コメントのテキストを含めることができます。コメントは、以下 に示す特殊な形のマークアップで識別されます。

<!-- これは XML のコメントです -->

- **要素**: XML 文書は、主に要素から構成されています。要素は、その前後をタグに囲まれた情報の ブロックです。要素は、必要に応じて入れ子(ネスト)にして、階層的なデータセットを作成す ることもできます。
- **名前**:一般に属性の名前は、それが属している要素との関係を表す意味を持っています。以下に 例を示しておきます。

<Array size="5" type="xs:float">
 1.0 2.0 3.0 4.0 5.0
</Array>

これは、size と type という 2 つの属性を持った Array という名前の要素です。size 属性で配列のサイズを指定し、type 属性で配列に浮動小数点のデータが含まれることを表しています。

• **タグ**:個々の XML 要素は、開始タグから始まります。開始タグの構文は、次のように角括弧に囲まれた名前から構成されます。

<tagName>

それぞれの XML 要素は、終了タグで終わります。終了タグの構文は次の通りです。

</tagName>

開始タグと終了タグの間は、任意の情報ブロックから構成されます。

- 検証:XML それ自体では、いかなる文書構造やスキーマをも記述していません。その代わりに、XML では、XML 文書の検証を可能にするメカニズムを提供しています。対象文書(インスタンス文書)には、スキーマ文書へのリンクが含まれています。XML パーサは、このスキーマ文書を利用して、その中に指定された規則にしたがってインスタンス文書の構文と意味を検証できます。この処理は検証(validation)と呼ばれています。
- **値**:解析の際に、属性値は常にテキストデータとして扱われます。
- XML: XML (eXtensible Markup Language) は拡張可能なマークアップ言語で、文書、ファイル、データ集合などの構造や意味を記述するための標準的な言語を提供します。XML 自体が、要素、属性、コメント、テキストデータからなる構造化された言語です。
- XML Schema: XML Schema 言語は、構文、構造、意味において、同一の規則にしたがう XML 文書の 構造を記述する手段を提供します。 XML Schema 自体も XML で記述されているため、他の XML ベー スのフォーマットの設計に簡単に利用できます。